

始



9

特232
983



青木澄十郎著

ヨハネ黙示録講解

聖書傳道社刊行



序に代へて

今いまし昔います主たる全能の神よ 汝の大なる能力を執りて王と成り給ひしことを感謝す 諸國のたみ怒を懐けり 汝の怒も亦た到れり 死にたる者を審き 汝の僕なる預言者及び聖徒 また小なるも大なるも汝の名を畏るる者に報賞を興へ 地を亡ぼす者を亡ぼし給ふ時いたれり 主なる全能の神よ 汝の御業は大なるかな 妙なるかな 主よ 誰か汝を畏れざる 誰か御名を崇めざる 汝のみ聖なり 萬國の民來りて御前に拜せん アーメン 主イエスよ 來り給へ

黙示録講解 目次

本書の序言(一章一―三)……………	一	神の羔羊(五章)……………	100
諸教會への挨拶(二章四―八)……………	七	第六章に就て……………	111
本書の構造……………	七	第一封印より第四封印(六章一―八)……………	115
序幕的異象(一章九―廿)……………	三	第五封印第六封印(六章九―十七)……………	131
第一異象 七つの教會……………	三	挿話(第七章)……………	139
エパソの教會(二章一―七)……………	三	第七封印(八章一―五)……………	145
スミルナの教會(二章八―十一)……………	四	第三異象 七つのラツバ……………	146
ペルガモの教會(二章十二―十七)……………	五	第一ラツバより第四ラツバ(八章六―十三)……………	146
テアテラの教會(二章十八―廿九)……………	五	第五ラツバ第六ラツバ(九章)……………	146
サルデスの教會(三章一―六)……………	六	二つの挿話……………	146
ヒラデルヒアの教會(三章七―十二)……………	七	七つの雷(十章)……………	154
ラオデキヤの教會(三章十三―廿二)……………	七	二人の證人(十一章一―十三)……………	162
第二異象 七つの封印……………	七	第七ラツバ(十一章十四―十九)……………	174
天の寶座(四章)……………	七	第四異象 七つの人物……………	179
		太陽を着たる女(十二章)……………	179

海より上り来る歌(十三章十一—十)	一九〇
陸より上り来る歌(十三章十一—十八)	一九四
三つの挿話(十四章概要)	二〇〇
第一の挿話(十四章一—五)	二〇一
第二の挿話(十四章六—十三)	二〇三
第三の挿話(十四章十四—二十)	二〇七
第五異象 七つの鉢	
準備的光景(十五章)	二二
第一鉢より第五鉢(十六章一—十一)	二七
第六鉢(十六章十二—十六)	三二
第七鉢(十六章十七—廿一)	三五
第六異象 七つの山(即ち大淫婦)	
怪獸に坐する大淫婦(十七章)	三八
大淫婦の末路(十八章)	四四
天上の歡呼(十九章一—十)	五五
白馬に乗る者(十九章十一—廿一)	六三

千年の禁錮(二十章)	二六八
第七異象 七つの新しきもの	
新天新地新エルサレム等(廿一、廿二章)	二七七
結尾	二八五

附録	
聖ヨハネの最後の手紙	
(ヨハネ第二、三書)	一
老ヨハネの獨語(詩)	一五
目次終	

黙示録講解

青木澄十郎

黙示録はむづかしい本です。のみならず此の書の前にペテロの黙示録と云ふ本があつて、之から系統を引いて『ソロモンの古詩』と云ふものが生れ次いでヨハネ第一書第二書また本書が出たのだなどと云ふ様な説もあり、ナカナカ面倒な研究であります。私は矢張使徒ヨハネが聖靈の指導によつてパトモスの島で書いたもの、若しくはパトモスで見た黙示に基いて書いたものと信じます。で、右様な問題には手をつけませんで、單純な講解を試みたいと存じます。

本書の序言(一章一—三)

「これイエスキリストの黙示なり。即ち、必ず速かに起る可き事を、その僕どもに顯させんとて、神の彼に與へしものなるを、彼その使を僕ヨハネに遣して示し給へり。ヨハネは神の言とイエス・キリストの證とに就き

て、その見しところを悉く證せり。此の預言の言を讀む者と之を聽きて其の中に録されたることを守る者どもとは幸福なり、時近ければなり」。

黙示録の解釋については種々の立場があります。之をヨハネ時代の状態の記録と見るものもあり、或る教理の主張と考へる人もあります。併し本書自身が明言してゐる所によれば『イエスキリストの黙示』であり、『必ず速かに起る可き事』『しもべヨハネに示し給へる』『預言の言』ことばであります。これだけは著者自身の言ふ所ですから確實とせねばなりません。では『イエスキリストの黙示』とは怎ういふ意味ですか。此の『の』の字は『が』の意味ですか、又は『について』の意味ですか。即ち、イエスが黙示した事といふ意味ですか、又はイエスに就いて黙示されたものといふ意味ですか。之を第二の意味に解して、イエスの御再臨に就ての黙示と解する人も澤山あります。しかし、それは穩當でありますまい。矢張り第一の意味に解釋して、イエスが黙示した事とするのが當然でせう。では『黙示』とは怎ういふ意味ですか。原語ではアポカルプシスと申しまして、隠れたるを顯はすといふ意味です。『黙示』の『黙』の字は何處から來たのか私にはわかりません。ドイツ譯にはオツフエンパールンクとあります。赤裸々に開示するとの意でありませう。蓋し此の譯語が適當ではないでせうか。『黙』の字をつけると、まだ何か隠されてゐるやうな感じが致しま

す。『イエスキリストの開示』と譯したら怎うでせうか。イエスは其の愛弟子ヨハネに何を開示しましたか。『必ず速かに起る可き事』を開示したのであります。『起る可き事』でありますから將來の事に相違ありません。即ち未來記であります。起りつゝある事でもなく、又は起つた事でもありません。『速かに』起らんとする事でもあります。併し此の『速かに』は一日二日或は一年二年と云つたやうに極めて短時間に此書の内容が萬事皆済してしまふと考へる必要はありません。『速かに起る可き事』でありますから、早速に着手せられ開始せられるとの意味でありまして、速かに起る速かに済んでしまふのだと早合點してはいけません。併し安心して下さい。『必ず』とつけ加へてあります。『必ず起る可き事』であります。神の定め給ふた所は『必ず』成るのです。一つの間違ひもなく『必ず』次から次へと『速かに』起つてくるのです。私共には一寸先きは闇ですが、神様は一つ一つ既定のプログラムを『必ず』『速かに』實行なさるのです。其のプログラムがイエスキリストに與へられ、イエスキリストが天使を用ゐて使徒ヨハネに開示なすつたのです。ヨハネが此の撰に當つた事は私共から見ても最も當を得たイエスの御處置と考へられます。イエスは御在世中にペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人を特別に愛し給ひました。彼らに特別な見どころがあつたからでせう。然るに誠に惜しい事にはヤコブは先頭第一に殉教の死を遂げてしまひました。主イエスの居

ない世界に長く生きたくなかつたのかも知れません。で、パウロといふ人が彼の代りをする事になつたのでせう。主の死後第一番に必要なのは活動的な實行家であり組織家であるペテロであつたのでせう。『我が教會を此岩の上に建つべし』と主が言はれた程、初代の教會を組織する手腕があつたのでせう。其の次に必要な人物はキリストに關する教理を理論的に説明する人でした。これはパウロに於て見事に實行されました。最後に教會の行く手を示して其の心得となるべき事を言ひ遣して置く人を要しました。即ち預言者の役目であります。此れはヨハネに於て最も適當な人が見出されたのだと私は信じて居ります。されば本書は第三節に明言してある如く『預言のことば』であります。初代教會に起つた過去の事件を象徴で書いたのだとの説は當りません。勿論初代教會の事も書いてあるでせうが、たゞ其れだけでは速かに必ず起る可き事の預言とは言ひ難いでせう。偕て『此の預言の言』は『神が彼（キリスト）に與へ』彼（キリスト）その使（天使）を遣はしてヨハネに示し』たと書いてあります（一節）。鄭重を極めた取扱方であります。神とキリストとは同一體ではないか。キリストは天使など用ゐず、直接にヨハネに現はれたやうに第十節に書いてあるではないか、と云つたやうな空論は避けませう。イエス御自身の告白にも『その日その時を知る者なし、天にある使者たちも知らず、子も知らず、たゞ父のみ知り給ふ』（マルコ十三ノ卅二）と言つ

て居られる事を思ひ合せたら足りるでせう。又、天使の事は書中に到る處に現はれてゐますから、其の大體を指して『その使を遣はし』と書いたのだと見れば何らの矛盾も無いでせう。兎に角『父のみ知り給ふ』所の大秘密をヨハネがバトモスの島で『示された』のであります。此の『示し』の文字がまた面白いのです。『記號で示す』又は『象徴で示す』といふ文字です。即ち此書が『記號』『象徴』で書かれてある所以です。而して最後の目的は『その僕ども（凡ての信者でせう）に顯はす』ためであります。世間一般に對してではありません。教會に顯し示したいとの御目的であります。神はキリストに『與へ』キリストはヨハネに『象徴で示し』ヨハネは『しもべどもに顯はす』のであります。三つの動詞が『與へ』『示し』『顯はし』と異つてゐるところに微妙な區別があります。

第二節に『神の言とイエスキリストの證』と云ふ句があります。此れは多分本書の内容全體を指すのでありませうが、また廣くキリストの福音全體をも指すものであると考へられます。なぜなれば同じ言葉が第九節にもありますが、此れは本書の内容といふ意味でなくキリストの福音全體を指すものであります。兎に角ヨハネがいのちがけで證するところは『神の言とイエスキリストの證』であります。『證する』とは面白い語ではありませんか。使徒等の任務は第一に『證する』ことで

した。ペンテコステの日のペテロの演説のところにも「この他なほ多くの言をもて證し」(行傳二ノ十四)とあり、其の次のペテロの演説にも「神はこれを死人中より甦へらせ給へり、我らは其の證人なり」(同上三ノ十五)と言つてゐます。イエスは神の證人であり、使徒等はイエスの證人でもあります。理窟を述べるものではありません。事實の證據人となるのです。ですから此處でもヨハネは「その見しところを悉く證せり」と言つてゐます。聞いたところを宣傳するものではありません。見た事を其儘に立證するものです。凡て「神の言」は見るべきもの、體驗すべきものです。耳だけで聞くものではありません。勿論此のところでは異象まがしに於てヨハネが見たところを其儘に書いたといふ意味でありませう。

此の序言の最後に、即ち第三節に此書を「讀む者」と「聽く者」と「守る者」とに祝福を祈つてゐます。「讀む者」は單數で「聽く者」と「守る者」は複數です。ヨハネは多分集會の席上で或る一人が此書を読み、會衆が謹聽してゐる有様を想像したのでせう。昔は一人一冊の聖書など到底所持することが出来ませんでしたから、一人が讀んで全會衆は聽くだけです。更らに聽くのみでなく「守る者」の多數ある可き事を豫想したのです。此れが最も祝福された人達である事は言ふを俟ちません。其の祝福の完全に成就する「時近ければ也」と結んでゐます。「時近ければ也」の語は本

書の二十二章十一節にも繰返してあります。キリストの御再臨が近いとの意味が含まれてゐるやうにも見えますが、兎に角キリストを信する者の祝福の完成する時を指したことだけは確實でせう。

諸教會への挨拶 (一章四—八)

「ヨハネ、書をアジアに在る七つの教會に贈る。願くは今在し後來り給ふ者及び其の御座の前にある七つの靈、また忠實なる證人、死人の中より最先に生れ給ひしもの、地の諸王の君なるイエスキリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。願くは我らを愛しその血をもて我らを罪より解き放ち我らを其の父なる神のため國民となし祭司となし給へる者に世々限りなく榮光と權威とあらんことを、アマメン。視よ、彼は雲の中において來り給ふ。諸衆の目、殊に彼を刺したる者これを見ん、かつ地上の諸族みな彼の故に嘆かん。然り、アマメン。今いまし昔いまし後來り給ふ主なる全能の神いひ給ふ、我はアルバなり、オメガなり」

パウロは其の書翰の始めにいつも天父とイエスキリストの祝福を祈つて挨拶としてゐます。此書も亦同じ筆法で先づ三位一體の神の祝福を祈つて挨拶に代へてゐるのであります。「今在し昔いまし後來り給ふ」とは永遠無窮のエホバの神と云ふことです。元來エホバと云ふ語は(本當はヤーウエで)「彼在す」との意味であります。出埃及記三章十三節以下を見ますと、モーセが神様の名を何と言つてイエラエル人に紹介してよいかと尋ねた時に「我は在りて在る者なり」と答へ給ひまし

た。そして『是は永遠にわが名となり、世々我がしるしとなるべし』と言つて居られます。「我は在りて在る者なり」の原語の發音はエーウエ、アシエル、エーウエです。エーウエが『我在り』でありますところから、ヤーウエ即ち『在る者』が神様の名としてモーセに示されたのです。然るに誤つてヤーウエをエホバと發音するに到つたものです。其の理由は極めて簡單で、母音のつけ方が轉訛したのだと言へば足りるでせう。さればエホバの神は『在りて在る者』との意義です。即ち誰に造られたのでも無く、自ら存在する者である。自ら存在する御方であるから、何時から何時まで存在すると限られたものでなくて、何時でも存在する御方である。永久の自存者である。即ち永遠無窮の神です。「今在し、昔いまし、後來る者」とは永遠無窮を過去現在未來に分けて言つたのです。「其の御座の前にある七つの靈」とは聖靈のことです。七はユダヤ人の聖數であり又滿數です。イザヤもキリストの上に降るべきエホバの靈を預言する時に七つの形容語を用ひてゐます（十一ノ二）。聖靈の御働きは聖く且つ滿ち足れるものである事を現はす爲めに七つと云つたのです。のみならず七つの教會に宛てた書翰の挨拶として最も適當な語と思はれます。七つの教會が凡ての時代の全教會を代表せしめてある如く、七つの靈は凡ての時代に凡ての處に於て働く神の靈を指したものです。それから『忠實なる證人……』は主イエスキリストを指したものであることは明かな

事です。ナゼ此の様に長たらしい言葉を連ねてイエスの代名詞としたかと言へば、それは愛せられた弟子としてのヨハネの心はイエスで一杯であつたからでもありません。本書がイエスの開示（黙示）を書く爲めのものであるからでもあります。ヨハネの見たイエスは第一に『忠實なる證人』で、第二に『死人の中より最先きに生れし者』で第三に『地の諸王の君』であります。イエスに對するヨハネの信仰個條と言つてもよいでせう。何の『證人』ですか、ヨハネ傳十八章卅七節を見ますと、イエスはピラトの前に立つて『われの王たることは汝の言へる如し。我は之が爲めに生れ、之が爲めに世に來れり、即ち眞理につきて證せん爲なり』と言つて居られます。黙示録を書く時に此の語の記憶が新しくヨハネに甦つて來たのでせう。「證人」と「王」とを一緒にした所がよく似てゐます。ヨハネの見たイエスは眞理の證人として十字架の死に就いた忠實な御方でした。が、しかし單なる殉教者ではありません。甦つた御方です。しかも其れは御自身が甦つたのみでなく、『最先きに』であります。コリント前書十五章にあるパウロの復活論と同一でイエスは彼を信する者の復活の『初穂』であるとの信仰です。さればヨハネの信仰はキリストが私共の爲めに成し給ふた來世の祝福に重きを置いてゐた事は明かです。次に、イエスは此の死と此復活によつて『諸王の君』である事が證明せられたとヨハネは言つて居るのです。神として最初から『諸王の君』で

あつたとの思想とは趣きを異にし、死と復活とにてよつて贖罪と救拯とを成就した事によつて『諸王の君』となり給ふたとの意であります。荒野に於ける四十日斷食の時にサタンが『汝若し平伏して我を拜せば此ら（世界の國々と其榮華）を皆なんぢに與へん』（マタイ四ノ九）と言つて誘惑したところの其の權威をイエスの謙遜と服従と死と復活とによつて贏ち得た事を指したのであります。

此の如く父なる神と聖靈とイエスキリストよりの恩恵と平安とを祈つて、先づ七つの教會に於てた書翰の劈頭の挨拶としたのであります。ですから大體の意味に於てはパウロがいつも『願くは父なる神及び主イエスキリストより賜ふ恩恵と平安と汝らにあらん事を』と書くのと同じであります。茲に注意したい事はパウロもヨハネも挨拶を書く時に『恩恵と平安……』と言つてゐる事です。普通のユダヤ人の書翰文は『汝に平安あれ』との挨拶で始まるものです。ヤコブ書の如きは其の例に従つて、單に『平安を祈る』と云ふ挨拶を冒頭として手紙を書いてゐます。パウロとヨハネは『恩恵』を祈つて後に通常の『平安』を祈つてゐます。此れは救はれた者の『恩恵』を特に感じた爲めでありませう。

『ヨハネ書をアジアに在る七つの教會に贈る』（四節）

單に『ヨハネ』と書いて、使徒とも何とも言はないのは此の頃信者の社會にヨハネの名は一般によく知れ渡つて居たからであります。使徒ヨハネの作たる事を疑ふ材料とはなりません。次に『アジアに在る七つの教會に贈る』とありますが、これは勿論亞細亞大陸を指したのではなく、小亞細亞全體を指したのもありません。ヨハネが其の晩年を献げたエベソの教會を中心として、其の附近の教會を七つだけ挙げたものです。しかもパウロの書翰のやうに實際此等の教會に宛てた書信ではありません。此書に掲げられた七つの教會が、それぞれの特徴を有して居り、其の特徴が將來全世界に擴がる可き多くの教會の代表的特徴であるであらう事を豫想して、先づ『七つの教會に贈る』と書いたのです。ですからこの『七つの教會』も本書が象徴文學である性質上、凡ての時代の凡ての教會の象徴として用ゐられたのであります。『七つの教會に贈る』と言つた時にヨハネの眼前には世の終までの全世界の教會が展開されてゐたのであります。ユダヤ人は『四』を以て地の數とし、『三』を以て天の數といたして居りましたから、四と三とを合算した『七』及び之を乗じた數『十二』を聖數又は滿數として用ゐてゐました。ヨハネは之を採用したのです。ですからヨハネの此の挨拶及び先きに掲げた祝禱は私共までをくるめた挨拶及び祝禱であると言つても差支はありません。廣く大きい祝禱であります。

挨拶の最後に頌榮があります。此れは祝福のやうに三一の神を目標とせず、たゞイエスキリストだけを頌めたゞへて居ります。一見不思議のやうですが、ヨハネのイエスに對する深い情愛を示すと同時に、本書が『イエスキリストの黙示』である性質上當然でありませう。其の頌榮は、

「願くは我らを愛し、その血をもて我らを罪より解放ち、われらを其の父なる神のために國民となし、祭司となし給へる者に世々限りなく榮光と権力とあらんことを、アーメン」

と云ふのであります。この『我らを愛し』の語がヨハネの口から出たときに、どれほどの深みがあったであらうかと想像されます。彼は實に一生イエスの愛にのみ生きた人ですから彼がイエスの愛を口にするときには戀人が愛を語るやうな趣があります。彼の書翰の中にも「主は我らの爲めに生命を棄て給へり。これによりて愛といふことを知りたり」(ヨハネ第一書三ノ十六)とさへ言つて居ります。ヨハネはイエスによつて始めて愛といふものを知つたのです。『その血をもて我らを解放ち』此れがヨハネの心を奪つたイエスの愛です。生命を棄ててくれたイエス。血を流してくれたイエスです。併しヨハネは怎うしてイエスの死が自分の罪の爲めであることを知るに至つたのでせうか。それは主イエスが付わたされ給ふた夜に晚餐を食するとき御自分の死を説明された御言葉がヨハネの體驗の中に甦つて來た事によるものだらうと私は思つてゐます。パウロの信仰と符節を合すが

如くであります。さてこの『血をもて解放ち』の文字は多くの古い寫本に『血の中に我らを罪より洗ひ』と書いてあります。ですから元譯は『その血をもて我儕の罪を洗潔め』であります。いづれにしても『血をもて』はよくありません。『血の中に』であります。主イエスの血しほの中に浸つて私共の罪が先づ赦され而して潔められることを言つたものであります。『洗ひ』の方を採用すれば汚いものを洗ふこと即ち罪の赦に重きを置き、『解放ち』の方を採用すれば汚いものを洗ふこと即ち罪の赦に重きを置くことに重きを置いて居ります。その『解放』の結果は我らを『神のために國民となし、祭司となし』たのであります。これがイエスの愛の恩賜であります。が、この『國民となし』との譯語はよくありません。これでは纔かに神の民となるの意味しか出て來ません。原語は『王國となし』であります。『王國』!。これは主イエスが御在世中に『天の王國』(日本譯天國)又は『神の王國』(日本譯神の國)と屢々仰せられた其の『王國』を指して居るのです。ですから福音書に現はれたイエスの御教訓に照應するやうに譯すならば寧ろ思ひ切つて『我らを天國となし』となつた方がよいかと思はれる程で、元譯の『王となし』の方が改譯の『國民となし』よりもいくらかましです。即ち『我ら』が複數で、神の王國となり、それから單數で個人が一人づつ『父なる神に祭司』となるのです。我らは團體として『王國』となり、個人

として『祭司』となつたと云ふ意味です。で『王國』となつたとは、サタンの奴隸から解放された勝利と自由とを高調し、『父なる神に祭司となし』とは我々一人一人か神に直接に近づく事を許された事と、他人の罪の爲めに執成す者となつた事を言ふのです。先づ自分の勝利が與へられ、次で人の爲めに執成す者となるのです。尙ほ譯文について今一言せねばならぬ事があります。それは『父なる神の爲めに』の句は『國民となし』を形容するのではなく『祭司となし』を形容するのであります。僭越ですが全體を左の如く改め譯す必要があると存じます。

願くは我らを愛し、その血の中に我らを罪より解放し（或ひは洗ひ）、我らを王國となし、その父なる神に祭司となし給へる者に、彼に榮光と權力と世々限りなくあらんことを、アーメン

ヨハネはイエスの事が思はれてたまらぬ人の如く、文法に拘泥せず『……給へる者に、彼に』と『彼』の字を再びつけ加へてゐます。

主イエスを讚美し、其の榮光を頌へて『彼に榮光と權力と世々限りなくあらんことを、アーメン』と叫んだけれども、まだ足らぬやうに感じたヨハネは待ち焦れてゐる御再臨のことを言はずには居られなかつたやうです。それで挨拶の言葉の最後に

「視よ、彼は雲の中にありて來り給ふ、諸衆の目、殊に彼を刺したる者これを見ん、かつ地上の諸族みな彼の

故に歎かん、然り、アーメン。今在し、昔いまし、後來り給ふ全能の神いひ給ふ「我はアルバなり、オメガなり」

と附け加へて、長い挨拶を結んでゐます。第四節に父なる神を『今在し、昔いまし、後來り給ふ者』と稱しましたが、主イエスは父と自身一體であるが、御再臨の意味で『後來り給ふ』ことを暗示したいところから『後來り』の語が出たのでせう。ヨハネは先づ『視よ』と言ひました。此れは何か新しい事か驚く可き事件を紹介するときの語であります。イザヤが處女降誕を預言した時にも『視よ、をとめ孕みて子を生まん』（七ノ十四）と言ひましたやうに、本書の中にも幾度も用ゐられてゐますから、此の語が出たら何か大事件の紹介だと思つて讀むべきです。主の御再臨は實に大事件であります。最初の降臨はベテレヘムであつて、神の御榮光を棄て『己を空しうし僕の貌をとりて』（ピリピ二ノ六）來り給ひました。此れは我らの罪の贖ひのためでした。併し御再臨は『雲の中にありて來り給ふ』のです。即ち天の大なる權威を以て來り給ふのです。世の審判者として來り給ふのです。舊約書で『雲の中に来る』の語は神の審判を指してゐます。二千年前には『僕の貌をとり』給ふたのであるから、見すばらしい職工の子として生れ、貧しい一生を送り給ひましたが、御再臨の時は『人の子その榮光をもてもろもろの御使を率ひ來る時、その榮光の座位に坐せん』（マ

タイ廿五ノ卅)とありますから、とても私共の想像することの出来ない恐ろしい權威です。「雲の中にありて來り給ふ」とは此の光景を指して言つたのです。何のために來られるのでせうか。主イエス御自身の御言葉によると「かくてその前にもろもろの國人あつめられ、之を別つこと牧羊者の羊と山羊とを分つが如く」なされるためです。ですから世界の終末の大審判に相違ありません。此の七節に『もろもろの目、これを見ん』とあるのは此の大審判の日に其の『榮光の座位』にある主を見ることを指したのです。世界開闢から世の終末までの間に生れて死んだ人が、一人も洩れなく榮光の主の面前に出るのであります。勿論それが怎んな形式で行はれるかは私共の知り得るところではありません。肉眼で見えるのか、靈眼で見えるのか、それは私共にはわかりませんが、いづれにしても現在の私共の肉眼で見えるよりも、ヨリ鮮かに、ヨリ現實に、見るのである事は間違ひないでせう。そうです、萬人が審判の主イエスをハッキリと見つめなければならぬ時が來る事だけはたしかに豫告されてあります。救主イエスをハッキリと見るのは幸な事ではありますが、審判の主イエスを見なければならぬ事は、決して凡ての人にとつて幸福だとは言へません。さればヨハネは「彼を刺したる者これを見ん」と言ひ、又「かつ地上の諸族みな彼の故に歎かん、然りアアメン」とさへ言つて居ります。主の御再臨は、之を喜ぶ者よりも、之を嘆く人が多いやうにさへ見えます。

「彼を刺したる者」とは言ふまでもなくイエスを十字架につけた人等です。ヨハネはあの時の慘酷な印象を到底消し去ることが出来なかつたのでせう。むごたらしく主を十字架につけた人等、あの人人も榮光の主を見ずには居られないのであると思つたのでせう。「地上の諸族」とはマタイ傳二十五章卅一節以下にある『もろもろの國人』とあるのと國じて、異邦人全體即ちイエスを信じない凡ての人を指すのであります。此らの人々が世の大審判の時に如何に大なる哭きに陥る可きかは更らに委しく本書十八章九節以下に書いてあります。神は愛でありますが、十字架の愛をさへ拒絶する者は大審判の時に於ては最早悔改める事が出来ないであります。「嘆かん」の語で打切つてあるのは其の嘆きが悔改を呼出すことの出来ない質のものである事を暗示して居ります。即ちユダの悔恨の如きもので、悔ひの苦しみだけであつて、改めて信する能力は全然失はれてしまつたのです。パウロの言つた通り「今は恵の時今は救の日」(コリント後六ノ二)であります。恵みと赦しの時が過ぎ去り、審判の時が來ます。其時には誰も悔改める力を失つてしまひます。たゞ嘆くだけであります。そのやうな恐ろしい時が來るのは「然り、アアメン」であるとヨハネは追加してゐます。ギリシヤ語とヘブル語とで二重に其の確實なことを保證したのです。ヨハネが二重に保證しただけでなく、最後に全能の神の自署捺印があります。即ち「主なる全能の神言ひたまふ、我はア

ルバなり、オメガなり」がそれです。アルバはギリシヤ語のイロハの始の文字でオメガは終の文字です。結局神が一切の事の始であり『終』であると自證されたわけです。併し『始』といふ意味よりも『終』といふ意味を高調してあるのでせう。凡ての事の『始』であつた神は必ずまた凡ての事の『終』を全ふし給ふとの意味でせう。換言すれば全能の神が始めた此の世界であるから、必ず其の終末を御つけになる、大審判を以て凡ての人の始末を御つけになる、と言明されたわけです。

ヨハネの挨拶は此くの如くにして結ばれました。大變に長い挨拶がありますが、此の挨拶の中にヨハネの信仰の告白と、本書の大意とが明白に記されてあることは讀む者にとつて多大の便宜であります。之を約言すれば、ヨハネは三一の神を信じてゐた事、殊にイエスの十字架と御復活とに重きを置いて居た事、而して再臨と大審判とが本書の眼目である事を知ることが出来ます。

本書の構造

前回で挨拶が終つたので、少しく本書の構造を紹介して置きたいと思ひます。此の書は他の書よりも構造を知ることが必要であるにも關らず、之を知ることが困難であります。不十分な研究であります。私は左の如く七つの大きな異象まばらしから成立つて居ると考へます。

第一異象。七つの教會

(一ノ九ヨリ三ノ廿二)

第二異象。七つの封印

(四ノ一ヨリ八ノ一)

第三異象。七つのラツバ

(八ノ二ヨリ十一ノ十九)

第四異象。△七つの人物

(十二ノ一ヨリ十四ノ二十)

第五異象。七つの鉢

(十五ノ一ヨリ十六ノ廿二)

第六異象。△七つの山

(十七ノ一ヨリ廿ノ十五)

第七異象。新天新地(七つの新しきもの)

(廿一ノ一ヨリ廿二ノ廿一)

右の中七つの教會、七つの封印、七つのラツバ、七つの鉢は明かでありませんが、七つの人物と七つの山とはそれ程明かではありませんから、△をつけて區別して置きました。新天新地は無論何人にも明かです。が、『七つの新しきもの』は余り明かではありません。

七つの教會の段落には先づヨハネの當時の有様を主として書き、將來の教會にも此等の教會に似た事の起る可きを暗示したに過ぎません。

七つの封印の段落にはキリスト以後の世界が(主として教會が)如何に進展すべきかを預言し、戦慄すべき惡戰苦闘の繪巻物が六枚、順々に開かれ、最後の一枚は沈黙であつて、七つのラツバに

移ります。

七つのラツバの段落は七つの封印の繰返しのように見えますが、少し異つて、七つの封印の末期即ち第五と第六との封印によつて示された時代を繰返して詳説したのであります。それから第七の封印に於て示さる可くして沈黙して居つた部分を開封し、第七のラツバを吹くときに世界の終末、キリスト王國の勝利が描き出されて、十一章の終と共に一と先づ世界末の豫言が済みます。

第十二、十三、十四章は再び逆戻りして教會と此世との争闘を書き示します。此の段落を七つの人物と名づけましたのは教會の側に於て、太陽を著た女と其子と其一族とミカエルとがあり、反對の側に於て龍と海の獸と陸の獸との七つの登場人物が示されてあるからであります。

七つの鉢は神の刑罰の最後のものであります。即ち第七の封印の内容、また第七のラツバの内容の詳説と見てよろしいと存じます。此世の最末期に押し迫つた時代の豫言であります。

第十七、十八、十九、廿章は『大淫婦』と稱せられ、『大なるバビロン』と稱せらる大勢力の倒壊を豫言したのですが、ヨハネは例によつて七の數を用ゐ、此の『淫婦』は『七つの山』の上に坐すと書いてありますので此の段落を七つの山と呼んだわけです。此の段落は七つの鉢と同時代を指すもので、七つの鉢が示す時代の一部分を詳説したのでありませう。それは『七つの鉢を持てる

天使』(十七ノ一)が此の淫婦をヨハネに示すことによつて知られます。

而して最後に新天新地の時代が來るのです。即ち第二十一、二十二章がそれであります。

七つの封印、七つのラツバ、七つの人物、七つの鉢、七つの山、の各段落には一つづつ挿話が組み入れてあります。此れは其の段落の大主意とは少し異つたもので括弧の中に入る可きものです。左に掲げて見ませう。

封印の段落では第七章全體が挿話です。大體が恐る可き神の怒を書いて居るのですが、第七章には其中から救はれる十四萬四千人の事が書いてあります。

ラツバの段落も亦神からの禍害の事が書いてあるのですが、第十章から第十一章の十四節までは挿話でありまして『小さき巻物を持つ天使』と『二人の證者』との二つの挿話があります。

七つの人物の段落にも第十四章の一節から十三節までに第七章の如く十四萬四千人の挿話と、三人の天使の挿話があります。

七つの鉢の段落には極めて短い『蛙に似た三つの靈』の挿話が第十六章十三節から十六節までに書いてあります。

七つの山の段落即ち大なるバビロンの倒壊の痛快な豫言の中に四つのハレルヤの挿話がありま

す。即ち第十九章の一節より十節までです。

以上は本書を諒解するの鍵であると存じます。私は此の構造がわからなかつた爲めに過去數年間、黙示録に手を付けては途中で止めて居りました。此れから順序を逐ふて少しづつ講解して行きますが、此の構造だけは頭に入れて置いて頂きたう存じます。

序幕的異象 (一章九—廿)

前段で本書の構造は各『七つ』の内容を有する七つの段落から成立つてゐる事を申し述べました。その第一段は一章九節から三章廿二節に至るまで『七つの教會』に書きおくる可く命ぜられた異象であります。其の大きな異象の中の序幕的異象が即ち此の九節から廿節までであります。併し此の序幕的異象は第一段に對する序幕であると同時に、本書全體の序幕をも兼ねて居ります。

『汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難と國と忍耐とに與る我ヨハネ、神の言とイエスの證との爲めにバトモスといふ島にありき。われ主日に御靈に感じたるに、我が後にラツバのごとき大なる聲を聞けり。曰く汝の見る所のことを書に録し、エベツ、スミルナ、ベルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤに在る七つの教會に贈れ』(一ノ九ヨリ十一)

先づヨハネ自身の呼稱に注意を惹かざるを得ません。ヨハネは自分を使徒と呼んだことは無いやうです。ヨハネ第一書は全く無名ですし、第二書第三書には單に『長老』(原語プレズテロス、即ち年長者)と自稱してゐるだけです。此處では殊更に自分と他の信者との區別を否定する言語を用ゐてゐます。『汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの……』と言つてゐる所が如何にもヨハネの性格を現はしてゐます。彼はイエスの愛弟子でありましたけれども、決してイエスから特別待遇を受けるものではありません。『イエスの艱難と國と忍耐と』に『共に與るヨハネ』でした。實際を言へば彼らよりも多くの『艱難』に與つたのですが、その點は言はずに、萬事彼らと同じに苦しみ、同じに忍耐して居るヨハネだと言つたところに彼の人格の美しさが見えるでせう。イエスの御在世中には怎うかして他の十人の弟子を凌いで大なる榮光に與りたいと求めた人ですが、何といふ變化でありませう。『艱難』とは當時猛烈であつた迫害を指すのでせうが『艱難と國(原語、王國)と忍耐とに與る』とは實に興味深い言ひ方ではありませんか。勿論何でも三つ並べるのが彼の癖ですが、此處に並べた三つは面白い取合せであります。艱難と王國と忍耐といふ三品料理はおいしいのでせうか苦いのでせうか辛いのでせうか、一寸見當のつかない御料理です。此の三つをゴツチヤに考へたところにヨハネの信仰の態度が見えます。勿論此處では『艱難』が主語でありまし

て、此の艱難と忍耐との中間にサンドキツチのやうに美味な『王國』が挟まれてあるのです。一體黙示録はキリスト信者の艱難を書いて居るのでから、先づ艱難の字で始めるのは當を得たものです。ヨハネは更らに此の艱難を再説して『神の言とイエスの證との爲めにバトモスといふ島にありき』と言つてゐます。バトモスはギリシヤ半島の多島海にある孤島で殆ど岩石ばかりの小島です。此處には鑛山があつたので、皇帝ドミシヤンは残酷にも老齡のヨハネを其の坑夫としたのだと言ふ説もあります。今でもヨハネが住んでゐた岩窟だとして案内者が指示する恐ろしい洞穴があるそうです。ヨハネは『神の言とイエスの證』のために此處に流されたと言つてゐます。『神の言』とは舊約を指し、『イエスの證』とは新約を指すのであると解する人もありますが、私は『神の言』とはヨハネ傳一章に『太初に言あり』と言つたのと似通つた意味でキリストの福音を指すのだと思ひます。『イエスの證』といふ思想も同じくヨハネ傳一章にあります。七節に『この人は證の爲めに來れり、光につきて證を爲し……』とあります。即ちバプテスマのヨハネはキリストの證人であつたとの意味でせう。されば先師ヨハネの如く、自分も同じくイエスの證人であるがために島流しになつたと言ふのでせう。福音を宣傳しイエスの證人となる事は容易なことではなかつたのです。全くいのちがけの仕事であつたのです。私共の生活は餘りに安樂過ぎます。もう少し苦しまなければ

ヨハネに合はせる顔がないやうに思ひます。ヨハネは斯く人から責められ棄てられ、自分の愛するエベソの教會から逐はれて此の孤島に参りましたが、其の心は愈々主イエスに近づき其の靈眼は愈々明かに開かれたのであります。『主の日に靈に感じた』と申して居ります。『主の日』とはユダヤ人の安息日だとか、主の審判の日だとか、新約の時代全體を指すとか、種々の説を爲す者がありますが、イエスの愛弟子ヨハネにとつては『主の日』は唯だ一つしか無かつたと思ひます。それは主イエスの日です、主イエスの復活なされた日です。初代の教會の人々はユダヤ人の在來の安息日、即ち土曜日も休みましたが、其の翌日はイエスの御復活の日として記念したのでです。それが次第に土曜日を廢して、御復活日だけを守るやうに變つて來たのです。ヨハネ時代にはまだ此の日が一般に『主の日』と呼稱されるには至らなかつたかも知れませんが、ヨハネの心には在來の安息日以上に大切な日であつたに相違ありません。ヨハネは此日に愛する主の深い思出に耽つてゐたのでありませう。其の瞑想が次第に深くなつて遂に外界の事を全く忘れて『靈に感じゐた』のでせう。但し『靈に感じ』の譯は適當ではありません。『靈に在る者となりき』と譯す可きです。全然靈的な状態に入つたのです。パウロが『第三の天にまで』携へ上げられて（コリント後十二章）『言ひ得ざる言を聞』いたと告白して居るのと同じやうな状態に入つたのであります。パウロは『言ひ得ざる

言』を聞いたのですが、ヨハネは之を『書に録す』べく命ぜられました。たゞ十章四節に一回だけ書く事を禁じられたことがあるだけです。四章二節にもヨハネは同一の言葉を用ゐて『われ直ちに靈に在る者となり』(私譯)と言つてゐます。此れはパウロとヨハネとのみの経験でなく、ペテロにも同じ経験があります。使徒行傳十章にペテロが晝の十二時に祈つてゐるうちに『我を忘れし心地にて天開けしを見る』とあります。物質の世界に五感が閉ざされて靈の世界に眼が開かれたのであります。肉の生活に在る者に與へられ得る最高の恵みであると思はれます。ヨハネは淋しい孤島で主の日に主の十字架や御復活を憶ひ、主の建て給ふた教會も亦十字架の苦しみを嘗めつゝあることなどを思つて深い冥想に耽つてゐた時に、忽ち彼は恍惚として『靈に在る者』となつたのであります。其の時突如として『後にラツバの如き大なる聲を聞』きました。俗界に遠ざかるに従つて、靈界が開け行くのでせうか。『後に』の語は彼が不用意であつた有様と、突如として聞こゑた有様を現はすものでヨハネ自身がかやうな異象を見やうと求めて居たのでない事を示します。『ラツバの如き』とは其聲の大きさと明瞭さを云ふものであつて、ヨハネにとつては立派な客觀的事件であつたのです。舊約書を見るとラツバは祝節や進軍に用ゐられたものでありますから、此れは教會に元氣を興へ、進軍の意氣を勵ますことも暗示されてゐるかも知れません。此の聲は主御自身の聲であ

つたか、主の従者たる天使の聲であつたか、それは不明に屬します。

突如としてヨハネの後方から響いて來たラツバの如き聲は

「汝の見る所のことを書に録してエベソ、スミルナ、ヘルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤに在る七つの教會に贈れ」

と命じました。『見る所のこと』とあります。聞くところのことではありません。此の默示録の預言は大體としてヨハネがパノラマのやうに其の眼前に展開する幻象を見せられたのでありませう。勿論或る學者は『見る』と云ふ語を用ゆるのが此の種の文學、即ち啓示文學の形式であつて、實際は『見た』のでも何でもないと説明しますが、私は文字通りに受取つて讀む者の一人です。先きに述べましたやうに『靈にある者』となつて『見た』のでありませう。絶海の孤島で靈にある者となつたとき、靈眼が特に開かれたものと考へられます。物界に遠ざかるに従つて、天界が次第に近づき來るのは、私共ですら多少経験する所であります。その見た所を『書に録す』べく命ぜられた事も注意を要します。七つの教會によつて代表された凡ての教會—あらゆる時代のあらゆる教會に『贈る』ために『書に録す』やう命ぜられたのでありまして、凡ての信者が心して讀まねばならぬ靈界の教科書である事が暗示されて居ります。

「われ振反りて我に語る聲を見んとし、振反り見れば七つの金の燈臺あり。また燈臺の間に人の子の如き者ありて……」(十二節)

『七つの金の燈臺』、すばらしいものです。純金を打ちのばして作ったもので、巴旦杏の花の形をした七つの枝があります(出埃及記廿五ノ卅一)。エホバの幕屋の中に在つて神前を照す燭臺でありまして、イスラエル民族を象徴して居ります。巴旦杏の花は春に於て一番早く咲く、而してそれが純金で作られ、神前に光を放つのでありますから、イスラエルの象徴たるに最も適したものであります。が、今ヨハネの見た燭臺は七つの枝を出してゐないで、別々に七個あるのです。其の七つの間に『人の子の如き者』を見たのです。言ふまでもなく、昔のイスラエルの如く一基の燭臺に七つの枝があるのでなく、七個の燭臺即ち、各種の民族から成るキリスト教會が世界に光を放つべきものである事を見たのです。併し教會は光其物で無く、光を放つ道具に過ぎません。光其物は燭臺の間を歩み給ふ『人の子の如き者』から來るのです。『その目は焰の如し其顔は烈しく照る日の如し』とあるのが、それでは無いでせうか。此の『人の子の如き者』とは誰でありませうか。申すまでもなく、それはイエスキリストであります。殊にイエスの『人間性』を指したものです。不思議なやうですがヨハネは別のところで(ヨハネ傳五ノ廿七)イエスは『人の子たるに因りて審判する

權』を與へられた、と書いて居ります。イエスは神の子たるが故に、審判すると言はないで『人の子』であるが故に『審判する』と言つたのは味のある言葉だと思ひます。眞に人間たるものこそ、一般人間の審判者となる事を得るものでせう。今この處でも(黙示録ではイエスを世の審判者として書いて居る)同じ思想によつて『人の子の如き者』と言つて居ります。元來イエスが御在世中に御自身を『人の子』と呼んだのは、多分ダニエル書七章十三節から暗示を得られたものであるらしいのであります。そこにはダニエルの異象中の重大なものが載せられてあります。今其委しい解釋を述べることは出来ませんが、其の本文を左に掲げます。即ち明かにキリストの豫告であります。

「我また夜の異象の中に觀てありけるに、人の子の如き者雲に乗りて來り、日の老たる者(エホバ神)の許に到りたれば、即ちその前に導きけるに、之に權と榮と國とを賜ひて、諸民諸族諸音をして之に事へしむ。その權は永遠の權にして移り去らず、又その國は亡ぶることなし」(ダニエル書七ノ十三、四)

イエスは御自身が此の『人の子』であるとの自覺から『人の子』を以て御自身の呼稱となされたのであると思はれます。勿論只だそれだけではなく、御自身が唯一無二の眞人であるとの意味もありませう。併しヨハネが此のところで『人の子の如き者』と呼んだのはダニエルの語をソツタリ借用

したのであります。何となればダニエルと同じく、異象を示され、異象を以て書いて居るからであります。

さればヨハネの背後に現はれたイエスは「人の子たるが故に審判者」たる御方として立つて居られるのであります。其の御容貌は一つ一つ注意に値するものです。即ち

「人の子の如き者ありて、足まで垂るゝ衣を看、胸に金の帯を束ね、その頭と頭髮とは白き毛の如く雪の如く白く、その目は燄の如く、その足は爐にて焼きたる輝ける眞鍮の如く、その聲は多くの水の聲の如し。その右の手には七つの星を持ち、その口より兩刃の利き劍いで、その顔は烈しく照る日のごとし」(註、白き毛とあるは白き羊毛と改むべし)

會つて地上を歩み給ふた謙卑のイエスとは全く異つた御榮光の御貌であります。「足まで垂るゝ衣を着、胸に金の帯を束ね」とは祭司の服装です。ユダヤ人の服装は日本人のそれに似て居ります。ですから「帯」をしめます。「腰に帯をする」とは僕婢などが労働するときの形容語であります。『胸に帯を束ね』るのは祭司が神殿の中で神前に奉仕する時の姿であります。キリストは十字架の上に於て既に贖罪の死を遂げ給ふて今は祭司として悔改めた罪人の爲めに執成し給ひつゝある御姿であります。併し此の十字架の贖罪と祭司としての御執成こそ、悔改めぬ人にとつては審判となるの

であります。御目と御足と御口とを御覽なさい。會つて地上に在り給ひし時の『柔和にして謙遜』であつたのと反對で、恐ろしい權威と撃滅の力を示して居ります。「目は燄の如く」です。たゞに『光』であり給ふのみでなく、猛烈な火燄であるのです。人の心の奥底まで、燃き盡さんばかりの燄で残すところなく見透すのです。「足は爐にて焼きたる輝ける眞鍮」とありまして、鏘鏘爐から取り出したばかりのやうな此の足で踏まれた者の潰滅を想像して御覽なさい。昔の戦争では負けた捕虜の首を勝利者が踏みつける習慣があつた事も思ひ出して見たらよいでせう。而して其の御口は怎うでせう。「兩刃の利劍」が出て來るのです。不動尊や閻魔王を聯想させるものがあります。閻魔王は矢張り審判者を意味するとか聞いて居りますが、此處にも審判者としてのキリストの御姿は随分恐る可きものであります。「口より利き劍出づ」とあるのは審判の宣告の銳利さと其の處罰の峻嚴さを示した物と思はれます。此の如く地上の生活に於て十字架の贖罪を成就し給ふたキリストは御再臨の時に於て、悔改めて信じた者に對しては祭司であり、悔改めざる者に對しては、恐る可き權威を以て最後の審判を成し給ふのであります。尙ほ『其顔は烈しく照る日の如く』とあります。會つて『我れ世にある間は世の光なり』(ヨハネ傳九ノ五)と仰せられました。それは溫和な春の日のやうな光でした。人の心を照すと同時になごめる光でありました。併し今は盛夏の眞

晝の烈日のやうな光であります。悔改めぬ人にとつては之を照すと同時に焼き亡ぼす火となるのであります。『その頭と頭髮とは白き羊毛の如く雪の如く』とあるのも單にイエスの御人格の純白さを示したのみでなく、其の顔の輝きの如く頭も頭髮も目映い程に輝いてゐる事を示したのです。ヨハネは曾つてヘルモン山上で變貌せられたイエスの御姿が『かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も爲し得ぬ程に白く』あつた（マルコ九ノ二）事を思ひ出したでせう。先きに引用したダニエル書七章九節にはエホバの神の御姿を形容して『其の衣は雪の如くに白く、その髪の毛は晒し清めたる羊の毛の如し』とありますから、イエスの御姿の神の御姿と同様である事を示してゐるのでせう。また『其の聲は多くの水の如し』も主の威嚴と力とを示すもので、曾つては野外に於ける五千人七千人の大衆に向つてすら少しの支障もなく朗々たる音吐を以て福音を語り給ふたが、今は洪水の押し寄する如き音聲を以て全世界に審判を宣し給ふ事を指すのであります。

本書は大體としてダニエル書に似た所が多いのですが、主の御容貌の寫生も其の文字をダニエル書から借りたものが多いやうです。ペルシャ王クロスの三年にダニエルが見た異象に左の如きものがあります。

「目を舉げて望み觀しに、一箇の人ありて布の衣を着、ウバズの金の帯を腰にしめ居り、その體は黄金色の玉

の如く、その顔は電光の如く、其の目は火の談の如く、其手と足の色は磨ける銅の如く、その言ふ聲は群衆の聲の如し」（ダニエル十ノ五）

『布の衣』といふのも祭司の衣です。ヨハネの見た異象と非常によく似て居ります。勿論此れによつて直ちに二者が全く同一であるとの判断を下すことは出来ませんが、何か共通な點のあることだけは考へずには居られません。ダニエル書に於てはガブリエル又はミカエルと稱へられる天使を指す形容語ですが、ガブリエルとは『神の人』との意であり、ミカエルとは『神の如き者は誰ぞ』との義でありますから黙示録に於て『神人』としてのイエスが之に似た姿を有つてゐたのは相應しい事と思はれます。

「我これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり」（十七節）

地上に於てキリストの暖かい愛を受け、また之に暖かい愛を返へした人があつたとすれば、それはヨハネであつたと思はれます。キリストの愛に甘へることの出来る人があつたとすれば、それはヨハネ以外にはありません。そのヨハネも榮光のキリストを見たときに『其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり』と言ふのです。福音書に書かれたイエスは人の子であるが故に親しみ易いですが、黙示録に描かれたキリストは榮光の主であるが故に懼る可き威嚴があります。げに贖罪のイ

エスは『僕の貌をとり』神の御姿を棄てて居られたのであります。が、ヨハネですら其の足下に死者の如くに倒れてしまつた程に恐ろしい審判の主キリストの前に立つことを得る者は一人もあるまい。古への聖者は皆同じやうな經驗をもつてゐます。イザヤもエホバの榮光を見たときに『禍なるかな我ほろびなん』(六ノ五)とまで感じ、ダニエルも『氣を失へる狀にて地にひれふし』(八ノ十三)とあります。私共は神の愛に狎れて之を侮つてゐるやうな事はないでせうか。天の父を信ずるのは善い。十字架のキリストの愛を信ずるのは善い。けれども其の方面ばかり見て、狎れ侮るやうな心を持つに至つては大變です。神の本質は『聖』であることを忘れてはなりません。一目見たばかりでヨハネですら足下に倒れるほどの御方が私の爲めに、地上の卑しい生活を爲し、遂に十字架にかゝつて下さつた事を忘れるところから種々の不平や我がまゝが私共の心に生じてくるのでせう。併し私共に本當の謙遜があつて主の足下に倒れて死にたる者の如くなりますならば、其の謙遜と悔改と敬虔とに對して主は慈悲深く憐みある御方でありませう。

「彼その右の手を我におきて言ひ給ふ、懼るな」(十七節)

神を畏れざる者に對しては主の榮光は審判の榮光であります。主を畏るる者に對しては矢張り贖罪の主であります。ですから畏れざる者には恐るべき御方であり、畏るる者には『懼るな』と言

ひ給ふのです。しかも地上を歩み給ふた時の御やさしさと少しも變らない温かさを以てヨハネに『右の手をおき』給ひました。ヨハネはやつぱり昔ながらの先生を思ひ出して嬉しかつたでせう。だが其の『右の手』は唯だ暖いだけの手ではありませんでした。何か持つてゐる御手です。十六節に戻つて見ますと『その右の手に七つの星を持つ』とあります。『七つの星は七つの教會』(二十節)ですから、教會を持ち給ふ御手でヨハネに觸つたのです。左の手には何も持つて居られなかつたにも關らず右の手で觸られたのには何か意味があるでせう。申すまでもなく『右』は尊い方です。イエスは神の右に坐し給ふ御方であります(使徒行七ノ五五)。其の右の手に教會を持ち、其の右の手でヨハネに觸れたのですから意味は明かです。どんな榮光の主でもヨハネは懼れなくてもよいのです。併しヨハネを通して教會に與へられたるメツセーヂと警告とは之を教會に傳へねばなりません。それが本書に次第に展開されて來ます。

さて『懼るな』と仰せられた理由として御自身を三つに分けて説明して居られます。
『懼るな。』

- 一、我は最先なり、最後なり、活ける者なり。
- 二、我かつて死にたりしが視よ世々限りなく生く

三、また死と陰府との鍵をもてり(十七節ノ末ヨリ十八節)

此の三つの資格を有つて居られるのです。第一は御自分がエホバの神と同じく永遠無窮に存在する御方である事を示すと同時に特に『活ける者』即ち人格存在者である事を高調し、第二は十字架にかゝり贖罪を成し、復活して永遠の生命を有ち給ふ事を示し、第三は其の復活によつて死に勝利し、彼を信する者を復活せしめ給ふ事と、審判の主であり給ふ事を示して居るのです。即ちイエスの本質と勝利と事業とを明かにして居ります。此のイエスが教會を右の手に持ち、同じ手をヨハネにつけて居るが故に決して『懼るな』と言ふのであります。實にヨハネとしても懼るゝ理由のなかつたやうに教會も懼るる理由はありません。キリストの榮光の恐ろしいほどに輝いてゐるのは、反つて我々の爲には大なる安心となるべきです。『箴の如き目』や『口より出づる兩刃の利劍』などは決して我々の敵でなく、我々の主であり首かしらであり味方である事を考へますならば、其の威光が大きいほど『懼る』る理由とはならないで、安心する理由となるのであります。併し本書を讀んで行きますと世界はキリストとサタンとの戦場であります。福音書に於て平和の君であつたキリストが本書では徹頭徹尾戰鬪的であります。而して教會も亦此の戦争の渦の中にあつて惡戰苦闘しなければならぬのです。ですから患難苦痛は素より覺悟して居なければなりません。要するに『汝ら世

に在りては患難を受けん。されど懼るる勿れ。我既に世に勝てり』との主の御言葉が本書の趣旨と合致するのでありませう。

『されば汝が見しことと今あることと後に成らんとする事とを録せ。即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈臺との奥義なり。七つの星は七つの教會の使にして七つの燈臺は七つの教會なり』(十九節二十節)

『されば』が非常に面白いと思ひます。主は前記の如き御方であるが故にヨハネはその默示を書く可きだと言ふ意味でせう。其の書く可き事は何であります。それはヨハネの『見しところ』であります。異象によつて見せて頂いた所です。即ち『今あることと、後に成らんとすること』でありまして、教會の現在と將來に關する默示であります。(教會と言へば問題が小さく聞こえますが、ヨハネの見せられた教會は世界の中心であります)ヨハネ當時の教會の有様から終末に至るまでに關するまでの事を異象によつて示されんとしつゝあるのです。此れは『奥義』であります。『秘密』であります。神のほかにも知ることの出来ない隠れた事であります。しかも其の『秘密』をヨハネが示されたのです。ですから私は左の如く改譯したいと思ひます。

『されば(中略)後に成らんとする事、即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈臺と

の奥義を録せ云々』

『奥義』とは本書全體を指すのであつて、次の句の『七つの星は七つの教會の使云々』だけを指すのでない事を明かにしたいと思ひます。結局此の『奥義』即ち『秘密』の開放が本書の『黙示』(又は『開示』)たる所以であるのです。

第一異象 七つの教會

エペソの教會 (二章一—七)

『エペソの教會の使に書きおくれ』(二ノ一)と書き始めまして、以下六つの教會の使に送られた書翰の形式になつて居りますが、七つの教會に別々に書きおくるつもりでない事は明白であります。各教會が自分にあてはまる所を聞くやうに書かれてあるのです。即ち凡ての時代の凡ての教會におくられたものであります。教會宛にせず、『教會の使』にあてたのは怎ういふわけせうか。之には種々の説もありますが、結局教會の責任ある人々を代表者と見做したものでありませう。尤もエペソの教會はヨハネ自身の居た教會でありますけれども。

エペソは此の地方の主要な都會であり、又教會も古いので、第一番に擧げられたのでありませ

う。此處にはパウロも其の旅行傳道の中で最も永い三年といふ年月を滞在しましたし、ヨハネもドミシヤン帝の死後赦されてパトモスから歸つた晩年を此處で過し、年老いて歩行も不自由になつてから、人々に昇かれて講壇に上つては『子供らよ互に相愛せよ』と只だそれだけを繰返へしてゐたと言はれてゐるのも此の教會であります。此の黙示録も或は其の思想をパトモスの島で見た異象で與へられ、此町で筆を執つたのかも知れません。

『右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈臺の間を歩む者、斯く言ふ。』(二ノ二)此れはキリスト御自身には相違ありませんが、他の教會に對するよりも、ヨリ一般的な呼稱を以て臨んで居られます。我々が教會として、若しくは教會の使者として第一に記憶すべき事はキリストが『七つの星』を其の右の手に持つてゐて下さる事であります。私共が若し活きた信者であるならば各自一人が『星』であります。『教會の使者』であります。小さくとも光り輝く者です。何かの使命に生きて居る者であります。キリストは義の太陽として此の星の一つ一つを光らせて下さいます。そして此の小さな光が集つた時に一つの『金の燈臺』となります。教會は『金の燈臺』であらねばならないのです。此世の荒海を渡る人々の『燈臺』であり、『家にある凡ての物を照らす燭臺』であるのです。しかも其れは靈的に純金で造られ、神の前に尊きものであります。さればキリストは此

の『金の燈臺の間を歩む』で下されます。此れは理想です。実際には我らの『星』は光を失つてゐます。『金』は滓をまじへてゐます。『燈臺』は暗くなりました。それでもまだ主は私共を惜んで私共の間を歩んでゐて下さいます。

『我なんちの行爲と勞と忍耐とを知る』(二ノ二)七つの教會の一つ一つに對して必ず『我…知る』と書いてあります。パウロが『キリストは教會の首』『我らは彼の體の肢なり』(エペソ書五ノ廿三と廿九)と言つてゐる如くキリストは御自身の體として教會を能く知つて居られる。四肢百體の動きを一つ一つを知つて居られる。殊にその『行爲』と『勞』と『忍耐』とを知つて居られます。行爲とは善きも惡しきも、其の爲す所の全般を指すのであり、『勞』と『忍耐』とはキリスト者の生活の活動の方面と受身の方面を現した語です。進んでは道の爲めに勞苦の骨折を爲し、退いては世間から負はされる苦難を忍ぶのであります。エペソの教會は此の兩方面に於て能く勤めた事が、キリストに知られ認められたのです。

『また汝が惡しきを忍び得ざること、自ら使徒と稱へて使徒にあらぬ者どもを試みて、其の虚偽を見あらはし、ことを知る。汝は忍耐を保ち、我が名のために忍びて倦まざりき。』(二ノ二)

先づエペソの教會の特徴として主の喜び給ふところが擧げられて居ります。即ち惡に對する敵愾

心と偽善に對する洞察と倦まざる忍耐とであります。『惡しき者を忍び得ざりしこと』は第六節に於て更らに其の何であるかを詳説してある通り『ニコライ宗の行爲を憎む』ことでもあります。それから『虚偽の使徒を見あらはした』と言ふのは怎んな歴史的事實であつたかは知る由もありませんが、使徒行傳二十章二十九節を見るとパウロが死を覺悟してエルサレムに行く途中ミレトから人をエペソに遣はして教會の長老たちを呼び寄せ、涙を流して彼らに『荒き豺狼』の入り来る可きを豫言し、極力之に注意す可き事を勧めた事を思ひ合せて見ますと、初代の教會にも早くから異端を以て信者を自分に惹きつけやうとする恐る可き偽使徒が現はれたやうです。パウロは之を防ぐべく警告し、ヨハネはエペソの教會が能く之を防いだ事を賞めてゐるのは興味ある符合だと思ひます。最後に彼らの『主の名の爲めに忍びて倦まざる』ことが擧げられてゐます。此れは先に掲げた第二節の始めにも『われ汝の…忍耐を知る』と言つて居るのでありますから、二重に主の御賞詞を賜はつたわけであります。進んで働くといふのは結構な事ではありますが、『忍んで倦まない』といふ事は此の惡しき世に介在する教會の最も大切な資格であるといふのでせう。勿論初代教會は特別にヒドイ迫害の中に在りましたからでもありませんが、いづれの時代にも一時的信仰に入る人は澤山ありますが、終りまで之を維持する人は曉天の星であります。何事でも『忍びて倦まぬ』人は進んで働

く人よりも尠いものです。特に「イエスの名の爲めに」之を爲し得る人は如何に稀なことでせう。

『されど我汝に責むべき所あり。汝は初の愛を離れたり。さればなんぢ何處より墮ちしかを思へ。悔改めて初の行爲を爲せ』(二ノ四、五)

七つの教會の一つ一つに對して主は必ず「我知る」と言つて始め、其の善いところをほめ、次に悪い所を責め、恵みの約束を以て結んで居られます。エペソの教會の悪い所は「初の愛を離れた」ことです。此の「初の愛」とは或る學者らの考へるやうに慈善行爲の如きものを指したのでなく、主イエスに對する愛であります。ヨハネはイエスを信ずることを結婚のやうに考へたのです。大低の結婚に於て見るところは、結婚當時に於ては夫婦の愛が暖いけれども年を経るに従つて冷却してくる事です。ヨハネは愛の人で彼は年と共にイエスに對する愛が深くなつて行つたやうですが、エペソの教會はヨハネの姿を反映しませんで、主を信じ始めた當時の愛が次第に薄らいだのであります。主の此の御譴責こそ今日の私共にとつて實に頂門の一針であります。昔ホゼアが「汝の愛情はあしたの雲の如く、たゞちに消ゆる朝霧の如し」(六ノ四)と言つて當時のイスラエル人の不人情を嘆いたことがあります。愛は恒久なることが一番尊いのですが、また此れが一番得難いのであります。世人はよく「熱愛」と言ひますが、主の望み給ふところは熱よりも恒久である事です。

「若し悔改めずば我なんぢに到り汝の燈臺をその處より取除かん」(二ノ五)

此の「到り」は原語で非常に強い意味です。世の終りの大審判ではないが、小審判を以て教會に臨み給ふことを指したのです。エペソは「アジアの光」とまで言はれた繁昌な土地ですが、其地の教會は特に「燈臺」でなければならなかつたのです。教會の光は何と言つても主を愛するの愛です。此れを失へば燈臺が光を失つたのと同様です。此の愛がなければ隣人愛も兄弟愛も永くは續かなくなります。日々悔改を要するのは此の「初の愛」に歸ることにあります。

「されど汝に取る可き所あり、汝はニコライ宗の行爲を憎む。我も之を憎めり」(二ノ六)

ニコライ宗の起原に就いては種々の説があるけれども結局不明に屬します。此の宗旨はエペソとベルガモトに行はれてゐたやうであります。どんな宗旨かよくわかりませんが、偶像信者のする行爲を其儘に行つた人達で、不潔の行爲を是認したものであつた事だけは確實でせう。第十四節にある「バラムの教」と同じものです。ニコライはギリシヤ語で、バラムはヘブル語で、同じ意味です。それからヨハネは「耳ある者は御靈の諸教會に言ふ所を聴く可し」と言つて居りますが、マタイ傳十三章九節其他に於てイエスが御在世中に屢々「耳ある者は聞く可し」と言はれた其の御言葉がヨハネの心に泌み込んでゐたものと見えます。なほ「諸教會に言ふ所を聞く可し」の語がある所

を見ますと前にも述べた通り此の書物は七つの教會にあててありますが、凡ての教會に讀ませる目的で書かれた事が明かであります。それから最後に約束があります。「勝を得る者には、われ神のバラダイスに在る生命の樹の果を食ふ事を許さん」(二ノ七)との此れです。「勝を得る者には」の語は七つの教會の一つ／＼に繰返へされてある所を見ますと、此れは教會即ち信者の最も大切な任務に相違ありません。イエスを信する者は教會としても個人としても、戰鬥状態にある事を忘れてはならないと言ふ事です。イエスを信する者には打ち勝つべき内外の敵がある事を寸時も忘れてはならない事を注意するために、此語が繰返へされてあります。戰つて勝つ者のみが『バラダイス』の生命の樹の果を食ふ事を許されるのです。此語は言ふまでもなく直接には創世記三章の物語を指すものでありませうが、更らに其の物語が象徴する所の『永遠の生命』其物を指すことは言ふを要しません。此れはヨハネの信仰の中心であつて其の第一書に於て詳説されて居ります。(拙著『生命を見し人の手記』を御覽下さい。)

スミルナの教會 (二章八一十一)

「スミルナに在る教會の使者に書きおくれ、最先にして最後なる者、死人となりて復た生し者かく言ふ、われ汝の艱難と貧窮とを知る——されど汝は富る者なり、我はまた自らユダヤ人と稱へてユダヤ人に非ず、サタン

の會に屬く者より汝が譏を受くるを知る。なんぢ受けんとする苦難を懼るな。視よ惡魔なんぢを試みんとて汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日の間患難を受けん。なんぢ死に至るまで忠實なれ、さらば我なんぢに生命を冠冕を與へん。耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽く可し、勝を得る者は第二の死に害はるることなし」(二ノ八一十一)

七つの教會は大體二種に區別せられ、前の三つが、幾分天に近い教會であり、後の四つが此世に近い教會であると言はれて居るのですが、いづれの教會も缺點があつて主から責められて居ります。然るに前の三教會の中ではスミルナの教會後の教會の中ではヒラデルヒヤの教會とだけが、此の譴責を免れて居ります。されば我々の師とすべきものは此の二教會でありませう。ヨハネの時代ですら、七つの教會の中五つまでが譴責されるものであつた事は悲しい事ですが、亦た弱い我々の慰めであります。

偕て此のスミルナ教會に於て最も無疵な教會の姿を見出すのでありますが、世間的に見れば最も貧乏な教會であり最も苦んだ教會であります。スミルナといふ町は大變に富んだ町であり、富んでゐるために大變に淫蕩な町であります。従つて厳格なキリスト教には反對であり、又唯物的な目で輕蔑して居りました。加ふるにユダヤ人は例によつて此の町の金權を握つてゐましたが、教會に對

しては辛辣な反對をしてゐたのです。で、『艱難と貧窮』とが此の教會の特徴でありました。主は此の二つの特徴によつて此の教會を『知る』と言つて居られます。『艱難と貧窮』此れは誰も歓迎するところのものではありませんが、眞實神を求むる者にとつては屢々大なる教育的價値を有するものです。第三世紀の頃まで大體として艱難と貧窮の中にあつた教會は健全に發達して來たのですが、コンスタンチン大帝がキリスト教を奉じ、キリスト教がロマの天下を支配するやうになつてから、腐敗が急速にパン種の如く擴がつて、外面的に勢力を得、數と廣さと權力とに於て増大して來た教會は質と深さとに於て非常に劣つて來たのです。信仰生活に最も恐る可きものは妥協と怠慢とであります。教會が世の勢力と妥協して富み且つ一般に歓迎せらるゝに及んで眞劍味は失せ、墮落は加速度を以て進みました。此れは個人の信仰でも同じ事であります。第十三世紀の有名な神學者トーマス・アクイナスが一日法皇を訪問したところ、法皇は莫大な御賽錢の勘定をしてゐた處であつたので、少し耻しく思ひ、『今日では教會が、金銀は我になし、と言ふ時代は過ぎ去つた』と言つた處が、アクイナスは嚴然として、『然り閣下よ、併しベテロの如く、されど我にあるものを汝に與ふ、主イエスの名によりて、立ちて歩めと叫んで跛者を立たせる時代も亦過ぎ去りました』と答へたといふ有名な話は、事實であつたか否かは知らないが實に教會の墮落と無能との原因を明

かにしてゐると思はれます。けれども此れは心靈的訓練の上から考へて言ふ可き事であつて、單に外形上の貧富だけで考へては失當であります。今日の日本の教會を御覽なさい。金錢を欲すること頗る急で所謂有力者の鼻息を窺ふ有様となつてゐますが、矢張り貧乏です。『金銀は我になし』の状態を續けて居りますと同時に『主イエスの名によりて立ちて歩め』と號令する力もありません。スミルナの教會の貧窮は此種の貧乏ではなく、此世の富にたよらないところの貧乏であります。『艱難と貧窮』との中にあつて只管十字架と復活の主のみ見上げる教會であつたのです。即ちヨブの如き境遇に置かれ、ヨブの如き信仰を保つたのでせう。ヨブ記三十六章十五節に『神は艱難者を艱難によりて救ひ之が耳を慮遇によりて開き給ふ』とあるのは誠に興味深い語であります。スミルナはかやうな教會でありますから、主は最も希望と慰めに満ちた姿で彼らに語り給ひます。『最先にして最後なる者、死人となりて復た生きし者、かく言ふ』と言つて居られます、即ち復活の主、永遠の生命の主として此の教會に臨んで居り給ひます。他の六つの教會のいづれに對するよりも一番慰めの多い御姿を以て臨んで居られるのは注意すべきでせう。のみならず一言の非難する所もなく、賞詞と獎勵とのみを與へて居られます。艱難と貧窮も茲に至つて其の甲斐があるといふものです。彼らが如何に信仰に富んでゐたかは主の『汝の貧窮を知る——されど汝は富める者

なり」との御言葉によつて知られます。けれども此の教會の艱難の時機はまだ過ぎ去つたのではありません。主は此の教會を慰めて、汝の艱難は最早充分であるとは言つて居られません。反つて『なんぢ受けんとする苦難を懼るな。視よ悪魔なんぢを試みんとして汝らの中の或者を獄に入れんとす……なんぢ死に至るまで忠實なれ』と言つて居られます。實につらい事ではありませんか。彼らは今既に『艱難と貧窮』の火中に投ぜられて苦んで居るのです。然るに主は之を慰めて、まだまだ艱難が来るぞ、もつと大きな苦難が来るぞと言つて居られるのです。此れは前に掲げたヨブ記の語のやうに、神は其の愛し給ふ者を艱難から救はないで『艱難に在る者を艱難によりて救ふ』のでありませう。スミルナの教會の信者達は此世に生きてゐる間は苦難と貧窮とから救はれる望みは與へられませんでした。寧ろ其の状態は一生涯くわい續くであらうことが『なんぢ死に至るまで忠實なれ』との一語に暗示されて居ります。噫、主を信するのために、一生涯『艱難と貧窮』の中に暮したのであります。一生涯です。此世に在る間は浮ぶ瀬はなかつたのであります。息をつく時は與へられなかつたのであります。此れが七つの教會の中で一番恵まれた教會の姿であります。一番主の御氣に入つた信者の運命であります。今日の我々が容易く口にする艱難の語や貧乏の語とは全くちがつた本當の艱難、徹底した貧窮です。『汝らの中の或者は獄に入れられんとす』との語は文字通りに解

さなければならぬのです。財産は悉く没收されて、其身は獄中に（今日のやうな樂な刑務所ではありません）投ぜられるのです。而して『死に至るまで』其處に居らなければならぬ人もあつたのです。此れがスミルナ教會に與へられた祝福です。何といふ慘酷な祝福でありませう、併しこれが主の最も愛し給ふ教會に對する最高級の恩賜であるのです。ですから主は慰めの語を加へて『汝ら十日の間患難を受けん』と申されて居ります『十日』とは勿論二十四時間を十回繰返すのではありません。『十』は大數であります。大數ではあるけれども、期限のある數です。屢々言つたやうに黙示録の數字は悉く象徴しやうかくですから、茲でもそれを忘れてはいけません。されば彼等の受けつゝあり、又受けんとする患難は『十日の間』です。永い時期です、が、期限があるのです。永遠ではありません。スミルナの人々は實に『憂き事なほ此上にもれかし、限りある身の力ためさん』と言つたやうな悲愴な決心の人達であつたでせう。我我も時代がちがふなど、言つて、逃避してはいけません。眞劍に主の道を歩み、主に喜ばれたいならば、此の教會を手本とすべきでは無いでせうか。

彼らの患難は此れだけではありません。『悪魔なんぢを試みんとして獄に入れんとす』との語に見られるやうに、悪魔が悪魔の姿で正面から我々の敵として我々を苦しめるのは苦しいけれども忍

び易いです。それが獄中であつてもまだ忍べます。が、更らに深刻なのは味方と思はるゝ者から來るところの迫害であります。スミルナの教會に對しては、同じ神を信すると考へられるユダヤ教の人達からの迫害があつた事です。『自らユダヤ人と稱へてユダヤ人に非ず、サタンの會(サタンの教會と譯すを可とす)に屬く者より汝が譏を受くるを知る』とあるのが即ち夫れです。『サタンの教會』とは實に皮肉な語ではありませんか。表面は神の教會ですが實際はサタンの教會であるものが、今日でも無いとは言へますまい。此の種の教會はスミルナのやうな眞實の教會を譏ります。彼らは自分達こそ本當に神に屬する者であつてスミルナ教會の如きは偽物であると譏つたのでせう。現代でも原始福音に忠實ならんとするものを頑迷回陋の徒として排斥して基督教の轉向を策する人なども澤山あります。併し主の賞讃を受けたスミルナ教會は徹頭徹尾來世の救に満足して現世の苦難を忍んだ人達でした。彼らに約束せられた所は悉く來世です、即ち『なんぢ死に至るまで忠實なれ、さらば汝に生命の冠冕を與へん』とあり、又『勝を得るものは第二の死に害はるゝことなし』とありまして、死後に於ける永遠無窮の生命を保證されたのであります。一言で云へばスミルナ教會は現世を悉く失つて來世の祝福を約束されたのであります、『價高き眞珠一つを見出さば、往きて有てる者を悉く賣りて之を買ふなり』(マタイ十三の四五)とのイエスの御言葉を生地で行

つた人達です。唯物思想に赤化された教會は來世を冷笑して現世のみを高調します。

ベルガモの教會(二章十二—十七)

『ベルガモに在る教會の使者に書きおくれ、兩刃の利き劍を持つ者斯く言ふ。われ汝の住む所を知る、彼處にはサタンの座位あり、汝わが名を保ち、わが忠實なる證人アンテパスが汝らのうち即ちサタンの住む所にて殺されし時も、なほ我を信する信仰を棄てざりき。』(黙二ノ十二、十三)

ベルガモといふ町はエベソとスミルナの如く美と富との町であります。併しベルガモは前掲の二つの町よりもモツト宗教的でした。即ち多くの神々の盛んに拜せられる町です。中にもエスキュラピウスといふ醫藥の神が尊崇されてゐました。此神は蛇の姿で特に生殖を司る神であつたので、此點に關する罪惡は他の町々の遙か上に出で、宗教の名に於て淫蕩の公認せられる有様でした。だからキリストも亦『兩刃の利き劍を持つ者』として此町に臨んで居ります。此町を『サタンの座位ある』處と言つたのも同じ理由からせう。蛇とサタン、淫蕩と惡魔の王座、因縁が深いやうに思はれます。此の『座位』といふ語は『王座』といふ意味であつて、ヨハネの考へによれば天に神の『王座』があれば、惡魔にも亦其の『王座』があるといふので、正當なる神の御支配に對して、こ

れに反逆する悪魔の偽政府も組織されてゐることを指したものです。恐る可きは實に巨大なる悪魔の力であります。光明の世界と對立して暗黒の世界も亦た其の暴威を逞ふしてゐるのです。

かやうな町であつたれども福音は此處にも勝利して教會は此處にも立てられてゐました。しかも其れは立派な教會であつて殆んど責むべき所が無かつたのです。唯だ數名の譴責すべき人が混入してゐたに過ぎず、教會全體としては如何なる迫害をも恐れない勇敢な信仰を持つてゐました。

「わが忠實な證る人アンテパスが殺されし時もなほ我を信する信仰を棄てざりき」

と賞讃されるほどです。アンテパスとは誰であつたかは全く不明です。我々はたゞ知られざる殉教者の一人と考へて置いたらよいでせう。此の時代には後世に知られない殉教者、死を以てする『忠實なるキリストの證人』の多かつた事を思ふと我々の餘りに安穩な生活は誠に耻かしい。

「然れど我なんちに責むべき一二の事あり。汝の中にバラムの教を保つ者どもあり。バラムはバラクに教へ、彼をしてイスラエルの子孫の前に贖物を置かしめ、偶像に献げし物を食はせ、かつ淫行をなさしめたり。斯の如く汝らの中にもニコライ宗の教を保つ者あり」(同十四、十五節)

偽預言者バラムの記事は民數記略二十二、三、四章にあり、又其末路は三十一章八節に記されてゐます。舊約人物中最も難解な一人です。兎に角彼は神の預言者であつたがバラク王が提供した財

實に目が眩んでイスラエル人を淫行に導く計畫を立てた人です。『バラムの教』とは此のバラムの末流を汲む人達であつて、約言すれば『偶像と淫行』です。『ニコライ宗の教』といふのも同一の人達を指すのである事は言ふまでもありません。ニコラと言ふ教會の執事が指導者であつたから此名があるとも言ひ、又ヘブル語のバラムはギリシャ語のニコライと意味が同じであるからだとも言ふが本當の事は分りません。だが彼らは實に淫行に陥つたのみでなく、之を是認した人達であつた事は『バラム教』と言ひ、『ニコライ宗の教』と言ふ語によつても明かです。或は後世のアンテノミアン派の思想の如きものでは無かつたでせうか。彼らは信仰によつてのみ救はれる事を高調する爲に、一切の善行を無價値として否定し去つたのです。殊に肉體に關する罪は靈魂とは無關係なものととして、其の罪たる事を認めなかつたものです。兎に角ベルガモの教會には不道德な人達が居たと言ふよりも、其れを信條とした人達が居たのです。が、幸にもこれは教會全體の趨勢ではなく、極めて少數な人達に限られてゐた。だから教會がキリストから叱られた點はかゝる異端に陥つたと言ふのではなく、かゝる者を許容してゐる點にあるのであります。言ひ換へれば此の教會は全體としての團體意識に乏しい事です。教會はキリストの體であるから、一つの肢が誤れば他の肢が之を救はねばならない點を閉却して居たのです。萬一どうしてもいけない時は外科手術を行つても全

體を救はねばならぬ事に気がつかなかつたのです。だから主は

「されば悔改めよ。然らずば我すみやかに汝に到りわが口の劍にて彼らと戦はん」(同十六節)

と叱責して居られます。此れは一つの教會の中にあつては互に戒め互に救はなければならない事を教へ、迷へる人の爲めに、迷はざる者が悔改めなければならぬ事を教へます。「然らずば」利劍は「汝」即ち教會全體に來るのです。併し主が敵として戦ひ給ふのは、幸にして「彼らと戦はん」であります。全體は幾分か其の影響を受けるでせうが、主の戦ひの目標とはなりません。のみならず此の試練の中にあつて

「勝を得る者には我かくれたるマナを與へん。また受くる者の外、誰も知らざる新しき名を録したる白き石を與へん」(同十七節)

と約束されてゐます。人生は戦争です。殊に信仰生活はサタンとの戦争です。ヨハネが各教會に對して一つ一つ「勝を得る者には」と繰り返したのには、戦はねばならぬ、勝たねばならぬ、一つ一つ勝利して行かねばならぬ、此れがキリストを信する者の毎日であり、又一生であると言ふのです。エスキュラピウスの神は先きに言つたやうに醫藥の神であつて殊に生殖の神祕を司ると信ぜられ不可知不可識な生命の神祕の源と信ぜられてゐました。之に對してヨハネはキリストの生命の神祕

が彼を信する者に與へられる事を約束したのです。

「我かくれたるマナを與へん」

「誰も知らざる新しき名を録したる白き石を與へん」(十七節)

二度も神祕を高調してゐます。「マナ」はイスラエル人がモーセに導かれて曠野に居た時に食した不思議な食物です。それが何であつたかは誰も知りません。しかも昔のマナ以上に「かくれたる」マナが與へられるのです。サタンは生殖の神祕を司ると稱するであらうがキリストは生命の神祕を握つて居られる、而して之を信する者に食せしめ給ふのであります。それから

「受くる者の外誰も知らざる新しき名」も誠に嬉しい御約束です。與へる者と與へられる者と二人しか知らない秘密の名です。キリストと私との二人しか知らない合ひ言葉です。淫行の神エスキュラピウスが與へる神祕には戀人と戀人と二人だけしか知らない甘い囁きがあるかも知れないが、主を信する者には主と我と二人しか知らない、又外の者に知る事の出來ない新しい關係が生じます。主が私の名を呼び給ふ時に、それは他の人が私を呼ぶのと同じ發音であるかも知れないけれども私にとつては全く新しい名であります。私の母が私の名を呼んでくれた様に、同じ深さで今私の名を呼んでくれる人はありません。此れは母と私と二人しか理解し得ない名でした。「白き石」とは何

を意味するか私にはよく分りませんが、紙の不足してゐた古代に於ては石に文字を書いて人に送ることは珍しくなかつたと言ふから別段に『石』といふ字に拘泥せずして『白き』といふ語に重點を置いて考へた方がよいのかも考へます。『白き名』が興へられると讀んでも差支ないのかも知れません。言ふまでもなく『純潔』を意味するものでベルガモ人の汚れた行爲の反對を示したものです。或人は『白き石』を舊約に於ける大祭司の胸を飾る寶石の中にかくされたウリムに譬へたものだと思つて、此説も棄て難いです。しか解すればダイヤモンドか何かのやうに價高き『白き石』であつて、此の『新しき名』の尊さと神聖さを示したものであります。

テアテラの教會（二章十八―廿九）

「目は焔の如く、足は輝ける眞鍮の如くなる神の子、かく言ふ。われ汝の行爲および汝の愛と信仰と職めと忍耐とを知る。又なんぢの初の行爲よりは後の行爲の多きことを知る。されど……」（二ノ十九）

此のテアテラの教會に對する主イエスの御顔は

「目は焔の如く、足は輝ける眞鍮の如くなる者」

として描かれてゐます。此れは焔の如き目を以て隠れたる罪を見とほし、火に焼ける如き眞鍮の足を以て踏みにじるが如く審判を行ひ給ふ御方として此の教會に對し給ふことを示します。此の教會

は大體に於てはよろしいので殊に愛と信仰とにすぐれてゐました。だから

「われ汝の行爲、及び汝の愛と信仰と職と忍耐とを知る」（二ノ十九）

との有り難い賞詞を賜はつてゐます。しかも此教會は停滞した教會ではなかつたのです。

「汝の初の行爲よりは後の行爲の多きことを知る」（二ノ十九）

と言はれてゐます。だが此の教會にも大きな缺點がありました。それは愛が行き過ぎて罪惡に對して餘りに寛大なことです。教會の中に一派の人々があつて、信仰のみを高調する結果でせうが淫行や偶像を認容して居ました。

「自ら預言者と稱へ……淫行を爲さしめ、偶像に獻げし物を食はしむる女イゼベルを容れおけり」（二ノ廿）

とあるのがそれです。此の『イゼベル』とは或る婦人の名であつたのか、或は單に淫行の人々をヨハネが斯く名づけたのかは不明ですが、昔のイスラエルの王アハブの悪しき妃^{イゼベル}で預言者エリヤを苦しめ、偶像の預言者を保護したエゼベルの再來の如きものである事を指摘したのです。テアテラの教會は全部此の潮流に靡いたのではなかつたやうです。たゞ此種の人々を『容れおけり』とある通り、認容してゐたのです。愛が此の教會の特長であつたと共に、愛が柔弱に流れて正義の弾力に不足してゐたのであります。換言すれば此の教會は『淫行と偶像』と言つたやうな此世の勢力此世の

習慣此の世の俗化と妥協してゐたのです。ベルガモの教會にも「淫行と偶像」とが行はれてゐたが、此の教會では其の勢力が更らに大きくなり、且つ更らに寛大に認容されて居たらしい。或説によればイゼベルと言ふ女は此の教會の牧師の妻であつたのであらうとさへ言はれてゐます。此教會の最も弱點とする所は『俗化』で、此世との妥協です。俗化と妥協とを認容する點に非難があつたのです。いづれの時代の教會にも俗化せる人の混入することは免れ難い。しかし教會は之を峻厳に拒否すべきものであつて、認容すべきではありません。此點に於てテアテラの教會は實に現代の教會の預言であると言へませう。ヨハネは七つの代表的教會の特徴を一つ一つ描き出して其の當時の訓戒となし又將來に同じタイプの教會の起る可き預言としたのです。妥協と俗化、之れ正に現代教會の一般的通弊です。此れに對して『目は焰の如き』主は何と言ひ給ふかを聞きませう。

「我かれに悔改むる機を與ふれど、其淫行を悔改むることを欲せず。視よ、かれを牀に投入れん。又かれと共に姦淫を行ふ者も、其行爲を悔改めずば大なる患難に投入れん。又かれの子供を打ち殺さん」(二ノ廿一—廿三)

『我かれに』は「かの女に」であつて、此の俗化のグループの主動者たる婦人であるか、又は其のグループを女性で言ひあらはしたかであります。「機」と譯してある字はクロノス即ち『時』と

いふ字で、充分の時間を與へて悔改を待ち給ふ主の御忍耐が示されてゐます。然るに彼女と彼女のグループは『悔改』むることを欲せずとある。原語では『欲せず』の字が強く示されてゐます。主の御忍耐を無視して何處までも自分達の『欲する』所を爲さんとしてゐるのです。悔改が出来ないのでなく、爲ないので。爲る意志が無いのです。人は一躍して聖者となれるものではないから、信者と雖も罪に陥ります。罪に陥つて容易に脱出し得ないこともあります。けれども如何なる場合にも、之を悔改むるの意志が無ければならない。常に反省し常に自己の中に新しい罪を發見し常に之を脱却して主の御姿に近づかんと『欲する』心が無ければなりません。さらば主は我らを憫み我らを赦し我らに力を貸して遂には悔改を成就せしめ給ふのです。が、『欲せざる』者は致し方が無い。彼らに對して殘る所のこととは、處分されるだけです。即ち

「視よ、我かれを牀に投入れん」

とある。此れは實に主の正義と御憐愍との一致した御審判を示します。『牀』の文字が興味深い。淫行の人達は今は快樂の『牀』に此世を満喫してゐるのです。しかし其の『牀』は何時までも快樂の『牀』ではあり得ない。淫行の『牀』には既に其の當然の歸結である苦痛の發芽が含まれてゐる。其の苦痛をヨハネは代表的に重病の『牀』或は死の『牀』に譬へたのであります。『牀』は『牀』

であるが、其の播く時の快と刈る時の苦と正反對の状態を對照して、罪の自罰的性質を示してゐるのです。

次に『又かれ（彼女）と姦淫を行ふ者』とあるのは、文字通りに解すべきではないでせう。彼女の行爲を認容してゐる人々を指すのであつて『彼女と同じく此世と妥協せんとする者』と解すべきです。だから俗化を許容する教會の全體を指すと見てよいでせう。而して次に『又かれ（彼女）の子供を殺さん』とあるのは彼女の説に従ふ思想上の子供で、彼女と同じく偶像と淫行とを行ふ人達であります。

「斯くてもろもろの教會は我が人の腎と心とを究むる者なるを知る可し、我は汝らのおの行爲に隨ひて報ひん」（二ノ廿二）

『もろもろの教會』の文字が注意を喚起する。ヨハネは本書に於て直接には七つの教會だけ撰り出してゐるけれども、實際は萬世に亘る萬國の教會に語つてゐるのであることを示します。『腎』とは情の存するところ、『心』とは理智の存する所、此れがヘブル人の心理學です。併し茲では單に人心の奥の底まで見透すとの意味でせう。『汝らのおの行爲に隨ひて報ひん』とあるのは決して信仰の無効を説いたのでは無く、悔改と信仰との伴はない『行爲』を指したのである事は云

ふまでもないでせう。

「我この他のテアテラの人にして未だかの教を受けず、所謂サタンの深きところを知らぬ汝らに斯く言ふ。我ほかの重きを汝らに負はせじ。ただ汝らは其の有つところを我が到らん時まで保て」（二ノ廿四、廿五）

茲に『この他の人』といふ語が出てゐます。直譯すれば『残れる人』であつて、イザヤ書に散見する『その民のこのれる者』（例イザヤ書十一ノ十六）と似た意味でせう。イザヤによればイスラエルは神の國には相違ないが、全體としては其の使命を全ふする者ではない。國民の大多數は神から離れてしまふけれど其中にも少數の『このれる者』があつて、それが神の國の種子となると言ふのです。ヨハネは教會といふものに對して（或はテアテラの如き教會に對して）同じ考を以て此の『このれる者』の語を用ゐたのではあるまいかと思はれます。教會は腐敗する俗化する此世と妥協して墮落する。併し其中に妥協せずして『このれる者』がある、此れが教會の中にあつて本當の神の國を形成する種子である、と言ふ意味を含んでゐるのでありませう。

次に『サタンの深きところ』といふ文字ですが、元譯には『サタンの奥義』とあります。つまりイゼベル一派の人々は自ら神の深い奥義を知つてゐると稱してゐたのです。迷信や邪説を唱ふる人々は何處の國でも何らかの秘密とか奥義とかいふものがあるやうに説いて人を惑はすものです。ヨ

ハネは之を皮肉つて、若し彼らに『深いもの』即ち『神祕』とか『奥義』とか言つたやうなものがありとすれば、それは『サタンの秘密』にちがひないと諷刺したのであると思はれます。併し能く考へて見ると此れは皮肉や諷刺でなく、實際に於ても有り得可きことです。サタンは神の王國に對するサタンの王國を所有する（マタイ傳十二ノ廿六）、それ程の恐る可き存在であるから何らかの『深い奥義』を有つて居ないとも限らぬ。かやうな秘密は知らない方が反つてよいので、一度其の『深いところ』の妙味を味はされたものは容易に之を離れることが出来ぬのです。それはイゼベル一派の偶像と淫行獎勵の人々が容易に悔改めることが出来なかつた事實によつても立證されます。次に『我ほかの重きを汝らに負はせじ』とあるが、此の『重き』の字は使徒行傳十五章廿八節にある字と同じであつて、使徒達の會議は異邦人たるクリスチャンに對して『偶像に獻げたものと……淫行とを避く可き事を命ずる事』を決議し、その他に『何の重きをも汝らに負はせぬを可しとする也』と言つて居るのに符合してゐます。（但し改譯には『重き』の字を省いて、『何をも汝らに負はせぬ……』と譯し、元譯には『他の任を負はせじ』と譯してある。）結局ヨハネはイゼベル一派の人々の言ふ所は會つてエルサレムで開いた使徒等の會議に悖るものであることを指摘し、此れだけは嚴守すべきものである事を高調したのでありませう。他の點に於てテアテラの教會は既に『有

つところ』を保つて行けばよいのであります。彼らは第十九節に於て主から賞讃された如く『愛と信仰と職と忍耐と』を有つてゐるのだから、此れを何處までも保持して行けば

「勝を得て終に至るまで我が命ぜしことを守るものには、諸國の民を治むる權威を與へん」(二ノ廿六)

といふ約束が成就します。此の『勝を得る』の文字は七つの教會に一一與へられてゐる約束である事は前にも述べた通りです。信者の生活は常に戦争であつて、信仰生活はノンキな遊戯でなく、一日一日と緊張した努力でなければならぬ事が示されてゐます。其の代りに勝利者に與へられる祝福は實に大きいもので

「諸國の民を治むる權威を與へん。彼は鐵の杖を以て之を治め、土の器を碎くが如くならん。我が父より我が受けたる權威の如し」(二ノ廿六、七)

とあります。此れは詩の第二篇にあるキリストの預言そつくりの言葉です。勿論ヨハネは詩篇からそつくり借用して來たのであつて、詩の第二篇に於てキリストに對して預言した祝福が、其儘に信仰の勝利者にも與へられると言ふのです。我々が「諸國の民を治むる」とは怎ういふ意味であるかよくわからないが、兎に角キリスト御自身の權威の如きものが與へられるとの御約束であることは間違ひないでせう。而して

「我また彼に曙の明星を與へん」(二ノ廿八)

と追加してある。此の恵みが何であるかは古來殆んど定説がありません。「曙の明星」は暗から明への轉換に於ける大きな光です。何らかの輝かしい美しい賜物と解して置けばよいでせう。但し私見として餘り突飛であり又何らの考證も無いが、「曙の明星」とは金星ウネナスでなからうかと思ふ。金星はギリシヤの神話に於ては愛と美の女神です。勿論ギリシヤ神話に於ては道德が缺けてゐるから其の金星を此處に持込んで來るわけはあるまいと言へば其れまでであるが、元來此の教會の最も大きい試誘はイゼベル派の主張する淫行であつたのであるからヨハネは其の對比コントラストとして、純潔な美と愛とが與へられると言はんが爲めに「曙の明星を與へん」と言つたのではあるまいかと思ふ。重ねて言ふが、此の私見には何らの考證もなく、又餘り研究もしてないのであるから、冒險的に提出したまでです。

サルデスの教會(三章一―六)

「サルデスに在る教會の使に書きおくれ。神の七つの靈と七つの星とを持つ者かく言ふ。われ汝の行爲を知る。汝は生くる名あれど死にたる者なり。なんぢ目をさまし、殆んど死なんとする殘のものを堅うせよわれ汝の行爲の我が汝の前に全からぬを見とめたり」(黙示録三ノ一、二)

サルデスの町は非常に富んだ町であつて、教會も亦この影響を受けてゐた。そこでキリストは「神の七つの靈を持つ者」として彼らに對し給ふたのです。彼らは「靈」に於て缺けて居たから「聖靈」を「持つ者」として臨み給ふたのです。彼らに之を與へんと爲し給ふ姿です。又「七つの星を持つ者」として臨んで居られる。一章十六節にも「其の右の手に七つの星を持つ」とあるが、其の「持つ」は手に握つてゐる形であるが、此の「持つ」は所有する義であつて、サルデスの教會が「所有してゐない」點を諷示したのです。聖靈を所有しない教會は如何に富裕であつても決して光らないのです。此の教會に對して、はたゞ

「われ汝の行爲を知る」

と言つただけです。エベソの教會には「われ汝の行爲と勞と忍耐とを知る」と言ひ、テアテラの教會には「汝の行爲及び汝の愛と信仰とつとめと忍耐とを知る」と言つてあるのに反して、サルデスの教會に對しては「汝の行爲を知る」とだけに過ぎない。之れは此の教會が實質が無く「行爲」だけしか無いからであります。其の點を更らに追究して

「汝は生くる名あれど死にたる者なり」

と言つて居る。之れほど恐ろしい宣告があるでせうか。主イエスが我々を御覽になつて「われ汝の

行爲を知る』と仰せられたゞけで、其内容を何一つ見出し給はぬやうでは大變です。主は必ず葉のみ茂つた無花果を御覽になつた時と同じ感がなさるでせう。天より主イエスが私共を御覽になつて、あれはナカナカよい教會らしい、會堂も立派であるし、仕事も澤山やつてゐる、と思つてだんだん近づいて御覽になつて見ると、中は全く空^かつぽである。之れでは怎んなに失望なさる事です。『生くる名あれど死にたる』とは最も恐る可き宣告です。自己欺瞞であるか、他を欺かんとする偽善であるか、反省の不足であるか、知らないけれども、『行爲』だけ立派で信仰と人格の實なき教會、これこそ實に現代の我々を痛烈に暴露したものでないでせうか。

けれどもサルデスの教會には『殆んど死なんとする残りのもの』が存在して居ました。『残りのもの』とは何であるか、それは『残りの人々』との意味であつて、教會は全體として死んでゐるが、まだ脈のある人々が幾分か残つてゐるといふ意味だと解する人もあるが、私は『タ、ロイバ』の語が中性であるから、幾分か死にきらずに残つた部分があるとの意味に解したい。即ち教會自体にまだ幾分の生命が残つてゐるのです。いづれに解しても『死にたる者』の教會であつて、其中に少しばかり『殆んど死なんとする残りのもの』があるのみなのです。死屍累々たる教會です。敗軍の戦場を思はせます。全くの死骸が一パイに散亂してゐる、其中にまだヒクヒクして纔かに生きてゐる

者があるのです。何と情ない教會の姿でせう。併し之れは物質的に富める教會であり事業の出来てゐる教會です。サルデスの教會も今日の教會を指した預言のやうです。富みたい、仕事をしたい、唯だそれだけの教會は禍なるかなです。だから主は『われ汝の行爲のわが神の前に全からぬを見たり』と言つて居られる。元譯によると『我なんちの行爲の我が神の前に全きを見ざる也』とあります。同じ意味であるが元譯が採用した文章の方が意味が強いやうに感じます。兎に角、信仰なき行爲、心を閑却した善行爲それは人の前には立派であらう。けれども『神の前には』ダメです。どんな立派な行爲でも、それが心からのものでなければ一つとして『全き』ものはないのです。若し幸にして我らの心に幾分でも眞實な『残りのもの』があるならば今のうちに一生懸命にそれを守り立てなければなりません。煙れる亞麻であり、傷める芦であつても主は必ず顧みて下さるでせう。たとひそれが『殆んど死なんとする』ばかりでもよいから悔改めさへすればまだ見込みがあります。

「されば汝の如何に受けしか如何に聴きしかを思ひ出で之を守りて悔改めよ」(三ノ三)

との勧告が與へられてゐます。『悔改』は必要ですが、如何にして悔改むべきでせうか。先づ『思ひ出で』るのであります。信者の悔改めは未信者の悔改めとちがつてゐます。未信者の悔改めは過去の一部を棄てるのですが、信者の悔改めは救はれた最初の經驗に立歸るのです。夫婦喧嘩をした

時に結婚當時を『思ひ出す』ことが有効であるやうに、キリストを始めて知つて胸の躍つた過去を思ひ出すのです。パウロの語を借りて言へば『キリストに對する眞心と貞操とを失は』ざるやうにするのです(コリント後書十一ノ三)。茲では二つの事を思ひ出せと命じられてゐます。『如何に受けしか』と『如何に聽きしか』を思ひ出すのです。『如何に受けしか』を思ひ出せとはキリストの信仰が取引であつた事を再確認するのであります。漠然たる理想でなくしてハツキリと受け取つた體驗である事を今一度思ひ出して心に銘ずるのです。『如何に聽きしか』を思ひ出せとは言ふまでもなく、使徒等によつて傳へられた歴史的事實の再認識です。キリスト教は單なる理想教でなく、史的事實を基礎とした信仰です。キリスト教からキリストの歴史を除けばキリスト教は死滅します。モダンな教會が高等批評の前に降参して聖書の歴史的價値を棚にあげて、なほ且つキリスト教を維持しやうとするのは矛盾も亦甚だしい。此點に於てヨハネもパウロも全く一致してゐます。即ち墮落しつゝある教會に對して、其の復興策としてはキリストの歴史を思ひ出して之に歸るのであると言ふのです。元譯によれば『受けたる所』『聽きたる所を憶ひいで、之を守る』のであります。パウロも『我らにもせよ、天よりの使にもせよ、我らの曾つて宣傳へたる所に背きたる福音を汝らに宣傳ふる者あらば誼はるべし』(ガラテヤ書一ノ八)と極言して、福音の傳統を高調し

てゐます。繰返して言ふが、今日の教會はサルデスの教會ソツクリです。『生くる名ありて死にたる者』です。之を再び生かすの道は決して新しいキリスト教を起すのではない。或はキリスト教の轉向を策するのではない。原始福音に歸るのです。初代の教會を復興するのです。『受けたるところ、聽きたる所を思ひ出で之を守りて悔改めよ』と一字一句が其儘に現代の教會に的中する。而して若し此の『悔改』め即ち最初の信仰への復歸を遷延するならばキリストは斷然恐る可き審判を以つて之に臨み給ふ。

『もし目を覺さずば盜人の如く我きたらん、汝わがいづれの時に來るかを知らざるべし』(三節)

との警告が即ちそれでありませう。此句は勿論御再臨を意味するものであるが、最後の御再臨のみを指すのではなく、時に隨つて行ひ給ふ主の御審判をも含むのであります。エルサレムの滅亡が其の一つであつた如く、歐州の大戦争も其の一つに數へられるであらうし、國家や教會の轉落、又は個人之死罰等をも指してゐます。神の恩寵の時期は春の日の如く暖くして長い。しかし神の審判は『盜人の如く』突如として來るのです。之れは主イエスも屢々言明されたところであつて、此の『盜人の如く來る』の語はヨハネが御在世の時の主から聞いたのを其儘に此處でも用ひてゐるのであります。

「されどサルデスにて衣を汚さぬもの數名あり、彼らは白き衣を着て我と偕に歩まん、斯くするに相應しき者なれば也。勝を得る者は斯くの如く白き衣を着せられん、我彼らの名を生命の書より消し落さず、我が父の前と御使のと前にて其の名を言ひあらはさん。耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽く可し」(黙示録三ノ四六)

サルデスの教會は行爲だけあつて内容と實質の缺けた教會で、信仰を養はないで交際や運動や社會奉仕などのみを叫ぶ現代教會と同じです。従つて彼らは外觀的な生活を整へるに急であつて、本質的な自分の姿を考へる道がない。此れでは宗教が一種の裝飾になつてしまひます。靈魂に白粉をつけて満足してゐられる人はそれでいゝかも知れないが、本當に純白になりたい人は之れで満足が出来ぬものではありません。全く美しい透明な動機から行はれてこそ、さゝやかな奉仕一つでも神の前に價值が生ずるのです。サルデスの教會は人の前には立派な働きをやつてゐるけれども

「汝の行爲の神の前に全からぬを認めたり」(三ノ二)

と言はれた通り、彼らの『行爲』は凡てが人の前のみ爲されてゐるので、彼らの宗教的行爲と見えるところは悉く體裁や世間體から來るので『神の前に』爲されてはゐないのです。無色透明な心から爲されるではありません。宗教の事に於ては嫌なら嫌でよいから正直でありたい。何でもが『神の前に』でありたい。献金などの場合に屢々此の不純な心を見出すのは神の教會にとつて最も嘆

かほしい事です。教會の俗化と腐敗は凡て『神の前』でなく人の前に爲す此心から生ずるのです。

併しながら幸にしてサルデスにも『衣を汚さぬ者數名あり』と言はれてゐる。たとひ目に見える教會での有力者でなくとも此の『數名』こそ實に教會の生命であります。『衣を汚さぬ者』とは一點の汚れも無い聖人といふ意味ではありません。キリストを除いて左様な人がある筈は無い。此處では此教會の俗化に對して『衣を汚さぬ者』であつて、教會が一般に『行爲』だけを粧つて實質を顧みない中でありながら、純粹無難な心で萬事を爲す人達です。即ち神の前にあつて事を爲す正直な心の人達です。恚ういふ人達は何時の時代でも少數です。『數名あり』と譯してあるのは『僅少の名あり』と直譯した方がいゝ。日本語では數名と云へば數人といふのと同じ意味に用ひられてゐるので『名』といふ文字に重きを置いたヨハネの心が充分に汲み取れない恨みがあります。ヨハネの心では主イエスが『彼は羊の名を呼びてひき出す』(ヨハネ傳十ノ三)と言つたのを思ひ出してゐるのでせう。外觀だけの宗教生活をしてゐる人達は、怎んな多くを働いてゐても其人達の名は人に知られてゐるだけで神には知られてゐません。が、本當に神の前に生きてゐる人は人の前には無名であつても、神の前に有名です。サルデスの教會には澤山の會員があつたが、神の前に『名』があるのは數人に過ぎない、と言ふのです。此らの人達は更らに『白き衣を着て我と偕に歩まん、彼

らは斯くするに相應しき者なればなり」とあります。彼らは

『白き衣を着せられん。我その名を生命の書より消し落さす』

と折紙がつけられてゐます。俗化の教會の中にあつても出来るだけ自分の良心を汚さない人は、更らにキリストによる義の『白衣を着せられる』のです。此の『白衣』とは實に純白を指すのみではないやうです。『白き衣を着せられ、我と偕に歩まん』とあるのを見ると、主イエスの白衣と同じものであること意味をするのでせう。主イエスの御衣とは何であるかと言へば、それは第一章十三節に『人の子の如き者ありて足まで垂るゝ衣を着、胸に金の帯を束ね』とあるのがそれであつて、祭司が其の務めを爲すときの服装です。イエスが山上で變貌せられた時にも『其の衣、白くなりて輝けり。モーセとエリア……イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを語る』(ルカ傳九ノ廿九、卅一)とあるのと同じ意味に相違ありません。『エルサレムで遂げる逝去』とは言ふまでもなく十字架上の贖罪の死を指すのであつて、モーセとエリアが出て來たのは律法と預言との成就として贖罪の死を遂げ給ふ事を話し合つたのです。されば此時の『白衣』もイエスが祭司として世の罪の爲めに執成し給ふ御姿であります。此の同じ白衣が俗化の教會の中にありながら純な信仰の生活を送り良心を清く守つた人達に與へられるのです。そのみで無い『我と偕に歩まん』との御

約束が與へられてゐます。『我と偕に居らん』とはヨハネ傳十五章に見える『汝ら我が愛に居れ』との御約束の成就で、此れだけでも既にヨハネを満足せしめたところであるが、此處では更らに一歩を進めて『我と偕に歩まん』とあります。『歩む』の字は進歩を示し活動を示す。サルデスの教會は元來が『歩む』教會です。活動だけはする教會でした。が併し實質が伴はなかつた。『神の前に』ではなかつた。之に反して此ら少數の人々はイエスと『偕に歩む』ことが許されるのです。イエスが心から偕に働いて下さるところの白衣の働きが許される。世間體や人前の爲めでなく、神の受納し給ふ純白な働きです。と同時にキリストのその如く祭司の働きです。私達も小さい祭司となつて、贖罪の働きを御手傳ひさせて頂けるのです。此れは實に大した事であるからヨハネは『彼らは斯くするに相應しき者なれば』と重々しく特筆してゐます。

こうなつたらもう大丈夫です。信者が此處まで來れば最早再び墮落する心配はありません。『我その名を生命の書より消し落さす』とハッキリ言ひ放つて下さる。此れこそ實に神學の術語で言ふ Eternal Assurance (永遠の保證) であります。サルデスの教會の一般は此處まで來てゐません。教會の名簿にはついてゐるが、天國の名簿には怎うですか。此世に本籍を置いて天國には一時寄留ぐらしい程度の人はい昔も今も多いやうです。かやうな二心の人が『生命の書より消し落される』こと

があるであらうことは想像するに難くありません。併し眞にイエスの白衣を着、イエスと偕に歩むやうになつた者は『生命の書から其名を消し落されないのみでなく

「我が父の前と御使ひの前にて其名を言ひあらはさん」とある通りに特別の表彰にあづかるのです。然り、自分の名が單に神に知れたのみでなく、天の使等の前に表彰されるのであるのは此上もなく嬉しい事でありませう。

ヒラデルヒアの教會(三章七—十二)

「聖なる者眞なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉づる者なく、閉づれば開く者なき者かく言ふ、われ汝の行爲を知る、視よ、我なんぢの前に開けたる門を置く、これを閉ぢ得るものなし。汝すこしの力ありて我が言を守り、我が名を否まざりき、視よ……」(三ノ七)

此の教會に對して主は

「聖なる者眞なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉づる者なく、閉づれば開く者なき者」

として現はれて居ます。ヒラデルヒアの教會はスミルナの教會と等しく非難さる可き點の少い教會です。之に對して主が『聖なる者、眞なる者』として現はれて居られるのは當然でせう。詩篇第十八の廿六節に神は『きよき者には潔き者となり、僻む者には僻む者となり給ふ』とある通り、主の

本當の『聖さ』は幾分でも聖い生活に近づいてゐる者にで無ければわからない。さればヒラデルヒアの教會の如く『主の言を守る』者には其の『眞なる』御姿、『聖なる』御姿を見させて下さるのです。此の聖なる主はまた『ダビデの鍵』の持主として

「われ汝の行爲を知る、視よ、我なんぢの前に開けたる門を置く」(八節)

と言つて居られます。此れは何の『門』であり、何の『鍵』でありませう。此れはイザヤ書二十二章二十二節にある『我またダビデの家の鍵をその肩に置かん。彼開けば閉づる者なく、彼閉づれば開く者なし』あるのと全く同じ言葉であるから、同じ意味でありませう。イザヤ書ではダビデ家の宮殿と寶庫との鍵を指してるところから考へると、此れも亦靈的にダビデ家の宮殿と寶庫とを指すと解したらよいでせう。さすれば言ふまでもなく天國の宮殿と寶庫との鍵であります。ヒラデルヒアの教會の如くに忠實な信者即ち

「少しの力ありて我が言を守り、我が名を否まざりき」(八節)

とある人々に對して主は天國の門を開け放し、天國の凡ての寶庫の中にあるものを自由に取らせて下さると云ふのです。勿論我らは『少しの力』しか無い。けれども其の『少し』を一杯に用ゆるところを主は喜んで下さるのです。ヒラデルヒアの教會は信者の數も少く、貧しい人達のみであつた

らしい。しかし彼らは忠實に其の持つてゐるだけ盡して主に仕へたのです。「我が名を否まざりき」と過去の動詞が用ゐてあるところを見ると、此の教會には何か恐ろしい迫害があつて、主の名を拒まなければ一身が安全でないやうな事があつたらしい。其の迫害に勝つて堂々と主の名を崇めて來たのであります。教會内や信者同志の中ではクリスチャンらしい顔をして、少し不便な宴會や未信者の前に出ると知らぬ顔をしてゐるやうなカメレオン信者では無かつたのです。主はかやうな勇敢な信者を愛して、更らに大なる勝利を與へ給ふのです。

「我サタンの會……の中より或者をして汝の足下に來り拜せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん」(九節)とあるのは其の賞詞です。「サタンの會」とは先きにもあつた語で「サタンの教會」と譯した方がよい。此處ではユダヤ人の教會を指したのです。イエスが會つて言はれたやうに、肉體だけがアラハムの子孫であつて、靈的にはサタンに屬するユダヤ人の教會の中からさへも「汝の足下に來り拜する者」が生ずると言ふのです。神として拜む者が出來ると言ふので無い事は勿論で、精神的に全く降参して同じ信仰に入る者が出て來てくると言ふのです。我らを経蔑し迫害する人達も我らが如何なる場合にも主の名を拒まないのを見るときに、遂には信仰の道に引きつけられてくる。此れが本當の傳道であります。しかし此れには大なる忍耐が要ります。

「汝我が忍耐の言を守りし故に、我なんぢを守りて地に住む者どもを試むる爲めに全世界に來らんとする試練のときに免れしめん」(十節)

『忍耐の言』とは面白い語です。『言』は勿論キリストの福音を指すのですが、ヨハネは黙示録を一貫して、福音を忍耐に結びつけてゐます。一章九節にも『イエスの艱難と國と忍耐とに與る我ヨハネ』とあつた事を思ひ出したい。キリスト教は福音である。幸福を與ふる音づれには相違ない。しかし本當に此の幸福を受取るまでには「忍耐」を要する。大なる忍耐を要する。或は此の世に於ける生涯は全然忍耐の生涯で終らねばならぬかも知れない。「忍耐」といふ字は如何なる試練と苦難の中にも「最初の信仰を一貫して動かす神に對する忠誠を全ふる人格」と定義されてゐる文字で、新約聖書の到る處に散見してゐる文字です。由來舊約の祝福は概して地上の幸福であるが、新約の福音は忍耐の福音です。「汝ら世にありては患難を受けん」と明かに指定されてゐます。患難の中に忍耐を建築して行くのであります。忍耐の字を「トンネルの中を目をつぶつて通る」と言つたやうに解釋してはいけない。忍耐其物が人間の建築に必要なのであることを記憶せねばなりません。人間の建築に於けるコンクリートの基礎工事となるものが忍耐です。忍耐は靈魂の耐久性です。耐久性の乏しい靈魂に永遠の生命は宿ることが出來ないでせう。此世に在つて少しの艱難苦痛

の爲めに信仰を失ひ神を忘れるやうな薄弱な基礎工事の上に永遠の住居は建築され得る筈が無いでせう。暗いトンネルを早く通り抜けやうとするのは忍耐ではなく逃避です。徳川家康が『人の一生は重荷を負ふて遠き路を行くが如し』との家訓を遺したといふが、味ふ可き語です。我らが今日受けてゐる苦難はまだまだ小さいもので、いづれは

「地に住む者どもを試むるために全世界に來らんとする試練の時」(十節)と言ふ恐ろしいの

が来る。此れは『大患難時代』と稱してキリスト御再臨前に全世界に襲來すべく屢々預言されたものであります。マタイ傳二十四章二十一節に『其時大なる患難あらん、世の創より今に至るまで斯る患難はなく、また後にも無からん』とイエス御自身の口から預言されたところです。私は特に御再臨のみを高唱するものではないが、現時の世界相を見ると此の『大患難時代』が目睫の間に迫つてゐるのではないかと考へられます。或は既に其の初期に入つたのではないかと思はれます。而して此の『大患難時代』に次で起るものは主の御再臨である事は此處でも述べられてゐます。即ちヨハネは

「われ速かに來らん」(十一節)

と言つて『全世界に來らんとする試練の時』の直後に主の來り給ふことを示してゐます。此語こ

そ本書の中心を爲すものであつて、現代の神學者が如何に説明し去らうとしても、キリストの再臨であることは疑ふ餘地はありません。之れは主を信する者にとつては大なる慰安であり、主を信ぜざる者にとつては大なる恐怖である。ヒラデルヒアの教會はどんなに慰められた事でありませう。私共は果して怎うですか。主の來り給ふ事を本當に待ち焦れる心地の人は幸であります。其人はいつでも此世の大審判者としてキリストに直面する用意の出來てゐる人です。前にあつたところの『忍耐の言』を守つてゐる人です。此の忍耐の福音をヨハネは非常な寶物に譬へて、誰か奪はんとし隙を狙つてゐるから用心しろと言つてゐます。

「汝のもつものを守りて、汝の冠冕を人に奪はれざれ」(十一節)

信仰といふものを之れ程の寶物と思つて大切に守つてゐる人が幾人今の世に在るでせうか。ヘブル書の著者も『されば大なる報を受く可き汝らの確信を投げすつな』(ヘブル書十ノ卅五)と言つてゐます。『大なる報』といひ『冠冕』といひ、大したものゝが與へられるまでシツカリと握つて、離してならぬものは『忍耐の言』です。かくして終まで忍ぶ者は勝利者となるのです。

「われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん。彼は再び外に出でざる可し」(十二節)

日蓮上人は『わ日日本の柱とならん』と言つたと傳へられてゐるが、『神の聖所の柱』とされる事

は何といふ光榮でありませう。『忍耐の言』を守る人こそ實に教會の柱であり、天國の柱であります。派手な仕事をする人ではない。教會が最も苦しんでゐる時に教會の柱となる人は終始一貫の人、雨にも晴にも變らぬ人である。かやうな人は天國に行つても亦柱となる人であります。

「又かれの上に、わが神の名及び我が神の都、すなはち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と我が新しき名とを書きしるさん」(十二節)

三つの名が此の勝利者の上に書きしるされます。「神の名」と『新しきエルサレムの名』と主イエスの『新らしき名』とであります。此らの名が『かれの上に書きしるされる』のであつて、與へられるではありません。此れは所有者の捺印の如き意味でせう。若し私の書物に青木と書いてあれば其本が青木になつたといふのではなく、青木の所有であるとの意味です。それと同じく私の上に『神の名』が書いてあれば私が神になつたといふのではなく、神に所有されてゐるといふ事を意味し。『新しいエルサレムの名』が書いてあるのは、私が新エルサレムの市民であるといふ意味であり、キリストの『新しい名』が書いてあるのは、キリストに屬するのだと云ふ意味であります。忍耐によつて勝利せる者は神とキリストと天國に屬する者となつて、神の宮の柱とせられ、永遠に其處から出ることが無いと保證されたのであります。

ラオデキヤの教會(三章十三—廿二)

ラオデキヤの教會の使者に書きおくれ。アアメンたる者、忠實なる眞の證人神の造り給ふもの、本源たる者かく言ふ、われ汝の行爲を知る汝は冷かにも非ず熱きにも非ず、我は寧ろ汝が冷かならんか、熱かならんかを願ふ。かく熱きにも非ず冷かにも非ず、たゞ微温が故に我なんぢを我が口より吐き出さん、なんぢ、我は富めり豊かなり乏しき所なしと言ひて、己が惱める者憐むべき者貧しき者盲目なる者裸かなる者たるを知らざれば、我なんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金を買ひて富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、汝の裸の恥を露さざれ、眼藥を買ひて汝の目に塗り見ることを得よ。凡てわが愛する者は我之を戒め、之を懲す。この故に汝はげみて悔改めよ。視よわれ戸の外に立ちて叩く、人もし我が聲を聞きて戸を開かば我その内に入りて彼と共に食し、彼も亦我と共に食せん。勝を得る者には我と共に我が座位に坐すことを許さん。我の勝を得しとき我が父と共に其の御座に坐したるが如し。耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」(黙三ノ十四—廿二)

ラオデキヤの教會は眞劍味の乏しい教會でありました。此世と靈の世界とを併せ所有せんとする教會でした。だから主は『アアメンたる者、忠實なる眞の證人……』即ち最も眞劍な御方として彼らに對し給ふたのです。

此の教會が實に俗化の教會の代表語となつてゐる事は誰でも知つてゐます。若し七つの教會を一

一つ時代別にしてキリスト教會の歴史の豫言的プログラムであるとの解釋をとるならば現代の教會こそ此のラオデキヤ教會によつて指示されたところの時代であると言へるでせう。即ち七つの時期の最末期に當つて教會が全く俗化して此の教會の如くなるであらうことを言つたものと見られるでせう。ラオデキヤの町は小アジアの一中心を爲す繁榮な土地で、物質的に恵まれたところであるから、其の教會も亦物質的成功を重んずる悪風があつたのです。彼らは自ら『我は富めり豊なり、乏しき所なしと言つてゐる』（三章十七）と書いてあるが、之は彼らの物質的地位を指したもので、此の教會の信者には『富める者』が多かつたのです。言はゞ此世の成功者の多い教會でした。此世の成功者であることはそれ自體に於て何らの悪いこともないですが、ラオデキヤ教會の信者達は此世の成功を以て、自分達は神に恵まれてゐる徴だと考へ、スミルナのやうな貧乏教會を見下げて居たかも知れません。人間は弱いものでありながら、自分の力に恃み易い性質を持つてゐます。自分に物質上の『富』があつて萬事に『豊』で『乏しき事が無い』とすると、たとひ口先きでは一切は神恩によるのだと言つて居ても、心の奥では自分の『富』にたより易い。で、彼らは恐らく此世の富が心に一杯になつて、靈の世界や目に見えない天に屬することが心を惹かないやうになつてゐたのでありませう。かやうな教會は神様の目から御覽になれば『惱める者、憐むべき者、貧しき者、

盲目なる者、裸なる者』（三ノ十七）の寄合世帯です。ヨハネの目から見ても、ラオデキヤの教會は其の立派な集會所を持つて、其の美しい衣裳の會員を抱いて、其の豊かなる會計を擁して、實は靈的に貧弱其物である事が、あはれにも彼の靈眼に映じたのでせう。現代の教會を初代教會に比較して見ると、實にラオデキヤ時代に陥つてゐるのではないかと思はざるを得ません。日本は兎に角、歐米の諸教會の立派さ贅澤さに反比例して信仰の内容の如何に貧弱である事よ。或は七つの教會の最後の教會として、教會歴史の最後の頁に近づいたのかも知れません。實に物質に富んだ教會は此世と妥協し易い。否、物質を重んずる教會は既に此世と妥協してゐるのです。だから其の信仰は徹底的であり得ません。おのづから『熱きにも非ず、冷かにもあらず、たゞ微温なる』（三ノ十六）態度を採ります。諺に『金持ち喧嘩せず』とある通り、教會が戰闘的でない。金持の信者は實に此處に言はれた通りである事を私共は屢々目撃します。今の時代の教會は使徒時代に比すれば如何に富裕であるか、而して如何に戰闘力に缺けてゐるかを思はざるを得ません。教會に『金銀は我に無し』と言ふ時代が過ぎ去つた時に、『我に有るものを與ふ、ナザレのイエスの名によりて立ち出』されんばかりの状態です。が、煙れる麻をも消し給はぬ主は、少しでも信仰のある者を未だ全

く棄て給はないで寧ろ此世との苟合妥協を棄て、主に來る可き事を勸めて居られます。即ち十八節に

「我なんぢに勸む。なんぢ我より火に煉りたる金を買ひて富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、……眼藥を買ひて汝の目に塗れ……」

と言つて居られます。「煉りたる金」とか「白衣」とか「眼藥」とか、悉く心靈上の意味である事は言ふを要さないが『我より……買へ』の文字は特に注意を要します。キリストの福音は無償で與へられるものではあるが、或る意味から言へば非常に高價なものであつて『天國は……の如し、……有てる物を悉く賣りて之を買ふ也』(マタイ傳十三ノ四四、四五)とさへ言はれてゐます。主イエスは貧しき者には無償で天國の寶物を與へ給ふけれども、富める者には『悉く賣りて之を買ふ』可く命じたまふのです。富める者が其の物質上の富さへも神の國の爲めに惜しむやうでは所謂『微温』の信仰であつて、天國の『煉金』や『白衣』を得られるものではない。しかも此の明白な道理をさへ見得ないのであるから、此世の富と比較にならぬ天國の富を見得るやうに先づ『眼藥を買ひて目に塗』らねばなりません。之れはヨハネ第一書に「神は光なり云々」と書いてあるのと同じ思想で、私共は先づ靈界を見るの目が開かれなければならぬ事を指したのでありませう。併し富に酔

ひ此世に酔つて居る者は容易に目を醒すべくもありません。之には痛棒が要ります。人は苦痛によつてのみ目が覺める。だから次の句に於て

「凡て我愛する者は我これを戒め、之を懲す、この故になんぢ勵みて悔改めよ」(十九節)

と言つて居ります。愛の痛棒です。斯くまでに不徹底な微温的な我々でも神はなほ我らを愛して『我が愛する者』の中に入れて下さるのです。「戒め」と「懲しめ」との來るのは未だ棄てられない證據です。ラオデキヤ教會、ラオデキヤ信者に與へられる最も大きな愛は「戒め」と「懲しめ」とであります。して見ると現代のやうな教會に與へらるべきものは患難苦痛の「懲しめ」時代であらねばなりません。

第二十節に於てヨハネはまた『視よ』と叫んでゐます。驚く可き事があるのです。

「視よ、我れ戸の外に立ちて叩く、人若し我が聲を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼と共に食し彼も亦我と共に食せん」

最も有名な句であります。ラオデキヤの教會にさへも、ラオデキヤの信者に對してさへも、主は放棄の態度を執り給はないで、尙ほ『悔改』を要求し、其の門前に立つて『叩き』給ふのです。之れを御再臨の前提と解してラオデキヤ時代の後には御再臨の準備をせよとの意味であると解する人

もありません。それもあるかも知れないが、大體としての意味は主イエスが此世に溺れんとしてゐる我々にでさへも、心の門前に立つて『叩き』つゝあり給ふ御姿であると思ひます。しかも、雷に叩くのみではない、『聲』をかけてゐて下さるのであります。一體此句は雅歌五章二節に

「時に愛する者の聲あり、即ち門を叩きていふ、我が妹、わが佳偶、……わがために開け」

とあるのに能く似てゐます。雅歌は本當に愛し合ふ男女の愛を歌つてゐるのですが、ヨハネの見たイエスも同じ熱愛を以て、我々の心の門前に立つて居られるといふのでありませう。門の前に立つて叩きつゝある主の我らに要求し給ふ所は『ともに食せん』と云ふ事です。聖キアラがたつた一度でよいから恩師フランチェスコと共に食したいと願つて、其の願を果した時に森が一面に輝いたとさへ言はれてゐるが、主イエスは取税人罪人にも劣る私共と一緒に食せんことを切に求めて居られるのです。同じ食物を攝り、同じものを同じやうに味ひ、同じやうに感ずるやうになることを要求し給ふのです。それを主は私のやうなものにまで望み給ふのです。教會の中で一番劣等なラオデキヤの教會にさへそれを望み給ふのです。否、教會が全體として微温であるから、反つて其の環境に勝利して、主を迎へ入れる者を特に要望し給ふのであります。されば

「勝を得る者には我と共に我が座位に坐することを許さん、我の勝を得しとき、我が父と共に其の御座に坐し

たるが如し」

と言ふ尊い御獎勵を與へて居られます。最も俗化した教會にあつて尙ほ且つ勝利する者には、最高とも見ゆる賞與が約束されてゐるのであります。

黙示録の序幕としての段落、七つの教會は此れで終つたのですが、總括して其の教ふる所を考察すると。

第一に、教會は如何に見すばらしくとも、神の前には貴いものであつて、主イエスは諸教會の間を歩んで居り給ふのです。即ち一章十三節に「七つの黄金の燈臺あり、また燈臺の間に人の子の如き者あり……」とある通りです。教會は此世に在つて「黄金」であり、又「燈臺」であります。而して榮光の主は「其の間」を往き來しつゝあり給ふのです。此れはエクレシヤとか何とか言ふむづかしい立派な教會では無い。現實に小アジアにある缺點だらけの七つの地方的な教會についてあります。

第二に、各教會それぞれの缺點が示されてゐます。

エベソの教會は、始めの愛を離れた。(二ノ四)

スミルナの教會は、偽善者が多い。(二ノ九)

ベルガモの教會は、異端者がある。(二ノ十四)

テアテラの教會は、頽廢してゐる。(二ノ二〇)

サルデスの教會は、靈的に死んでゐる。(三ノ一)

ヒラデルヒアの教會は、力が少い。(三ノ八)

ラオデキアの教會は、なまぬるい。(三ノ十六)

どの教會も、之れでも『黄金の燈臺』かと思はれる程です。けれども主は決して棄てないで、それぞれ適當な譴責を與へて悔改に精進すべき事を勸めて居られます。我々にとつては大なる慰藉です。と同時に随分痛いところもあります。

第三に、各教會それぞれに褒美の約束が與へられてゐます。勿論それは『勝を得る者』に對してだけであるから、一々『勝を得る者には』と斷つてあります。信仰と悔改とは容易なるが如くして容易でなく、信者の生活は常に緊張した戰鬥の生活でなければならぬ事が教へられてゐます。

エペソの勝者は、パラダイスに在る生命の樹の果を食ふ事が許される。(二ノ七)

スミルナの勝者は、第二の死に害せられない。(二ノ十一)

ベルガモの勝者は、かくれたるマナが與へられる。(二ノ十七)

テアテラの勝者は、諸國を治める權が與へられる。(二ノ廿六)

サルデスの勝者は、白衣を着せられる。(三ノ五)

ヒラデルヒアの勝者は、神殿の柱となる。(三ノ十二)

ラオデキアの勝者は、天父と共に其の御座に坐す。(三ノ廿二)

此らの恩賞はそれぞれの教會の缺點に勝利した各人に對して別々に約束された形で書いてはありますが、結局信仰の勝利を得た者には一様に此らの悉くが與へられると解して差支はありません。我々の教會はエペソの教會であり、又ラオデキアの教會でもあるのです。一人の姿を七つの方面から撮影した寫真であり、之を組み行て、一個の銅像となるのだと見てもよい。勿論時代々に應じて、或は特にエペソの教會時代と見らる可き時代もあり、今日の如く特にラオデキア教會であると考へられる時代もあります。が、全体を組み合せた姿がいつれの教會にも見られるのです。

此ら諸教會(即ち凡ての教會)に對して神は特別の御計畫を有ち給ひます。否、此ら諸教會を中心として全世界に對する精密な計畫が樹てられてあります。それは建築家の設計圖の如くに詳細なものです。が、それには嚴重に『七つの封印』がつけられてあります。

『我また御座に坐し給ふ者の右の手に卷物のあるを見り、その裏表に文字あり、七つの印をもて

封せらる』(五ノ一)

とあるがそれでありませぬ。だから黙示録の中心は此の『七つの封印』せる巻物であります。此巻物の開封が主イエスの手によつて行はれるのです。

併し、其の開封の直前にヨハネは天の『御座』の光景を第四章に於て讀者に紹介してゐます。

第二異象 七つの封印

天の寶座 (第四章)

七つの封印せる巻物は本書の主體です。それは天地を支配し給ふ神の御手に握られてあるのであるから、ヨハネは其の巻物を開封する前に先づ天にある神の『御座』の雄大な光景を述べてゐます。四章と五章とが即ちそれです。この意味に於て四章五章はまだ緒論の部に屬する。四章は天に在りて地を審く神の御榮光の有様を記し、五章は神秘の巻物を開く序幕であります。

「この後、われ見しに、視よ、天に開けたる門あり、初に我に語るを聞きしラツバのごとき聲いふ「茲に登れ、我この後おこるべき事を汝に示さん」直ちに、われ御靈に感ぜしが、視よ天に御座設けあり。その御座に坐し給ふ者あり、その坐し給ふ者の狀は碧玉、赤瑪瑙の如く、かつ御座の周圍には綠玉の如き虹ありき。また御座

のまはりに二十四の座位ありて二十四人の長老、白き衣を纏ひ。首に金の冠冕を戴きて其の座位に坐せり。御座より數多の電光と聲と雷霆と出づ。また御座の前に燃えたる七つの燈火あり、これ神の七つの靈なり」(四ノ一―五)

ヨハネは再び『ラツバの如き』聲を聞いた。それは一章十節に記された『ラツバの如き大なる聲』と同じ聲であつて、初めの時に第一の異象を示した如く、此の度は第二の異象を示す爲めにヨハネの注意を惹いた聲です。此の時ヨハネは『靈に感ぜしが』とあるが、之は譯語がよくありません。一章十節の場合にも註釋した如く『靈にありしが』と譯す可きです。ヨハネが肉體によつて啓示を受けたのでなく『靈にありて』受けた默示である事を示してゐます。コリント前書十二章に於てパウロが述べてゐる『第三の天にまで取り去られたり、肉體にてか我知らず肉體を離れてか我知らず、神知り給ふ』と言つてゐるのと同じ體驗であると解してもよいであらうし、或は唯だヨハネが靈感によつて異象を見たのだと解してもよいでせう。兎に角ヨハネはイエスのバプテスマを受けられた時のやうに『天が開け』而して其の開けた天門の中に招かれて登つて行つた感じがしたので、信仰の巨人には此種の體驗を有つ人が多い。つまり彼は『靈にありて』天地の主なる神に拜謁を仰せつけられたので、何とも美しい極みです。ヨハネが拜謁を許されたのは慈愛の天父であつたよりも、

榮光の王でありました。それはヨハネが世の終末の審判を書く可く命ぜられたのだからであります。

「視よ天に御座設けあり」

『御座』は『王座』です。天地の主なる諸王の王としての神の王座です。即ち審判の座であります。最早めぐみの座ではありません。

「その坐し給ふ者の状は碧玉、赤瑪瑙の如く」

『碧玉』は古來種々の色があると稱せられてゐるが最も良いものはダイヤモンドの如く白く透明です。之れは言ふまでもなく神の本質は『聖』である事を示し、『赤瑪瑙』は神の怒即ち『正義』の審判を意味します。ダイヤモンドの如く白く輝き、赤瑪瑙の如き烈火の怒は所謂秋霜烈日の感を與へるでせう。

此れだけであるならばヨハネは目映くて見上ぐることは到底出来ないでせうけれど、

「御座の周圍には綠玉の如き虹あり」

『綠玉』はエメラルドで誠に柔かい感じのする寶石です。平和と恩寵との象徴です。しかも之れが『虹』の形を爲して玉座を圍んでゐるのです。ノアの洪水の時にも神は恩寵の象徴として虹を用ゐてゐます（創九ノ十四）。緑の色と虹の形とで二重に恩寵を示してゐるのです。神の御性質は『聖』

と『義』であつて、しかも溢るゝばかりの『恩寵』が之を包んでゐる事が書かれてゐます。就中、神の義が『赤瑪瑙』即ち神の『怒』といふ恐る可き形容を以て現はされたのは本書が神の審判を書くのを主として居るからです。福音の方は言はゞ『綠玉の如き虹』で、福音の神は寧ろ遠景としてのみ茲に描かれてゐます。

「また御座のまはりには二十四人の座位ありて二十四の長老白き衣をまとひ、首に金の冠を戴きて其の座に坐せり」

『二十四』は十二の二倍です。十二は完全を示す數です。例へばイスラエルの十二の支族、イエスの十二使徒と言ふが如きです。されば此の『二十四』は十二を二つ重ねたものと考へねばなりません。思ふに舊約即ちイスラエルの代表として『十二』、新約即ち異邦人の代表として『十二』、合計二十四を以て舊新兩約を代表せしめたのでせう。『長老』とは言ふまでもなく尊稱であつて、此處では教會即ち救はれたものを代表せしめた語です。斯く舊新約の救はれたものの代表は神の御座をとりまいてゐるのです。が、驚く可き事には其の地位が非常に高い。之ら長老の爲めに二十四の『座位』が設けてあります。此の『座位』の文字は神御自身に用ゐられた『座位』と同じで、矢張り『王位』を意味します。救はれた者が斯る高い地位に置かれてゐるのは少し不思議にも思へます

が、本書五章十節にも『彼らは地に王たるべし』と書いてある思想に附合します。主イエスも十二弟子に『汝らもまた十二の座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん』(マタイ傳十九ノ二八)と言つて居られるから、敢てヨハネの誇張ではないでせう。『白き衣』が全く潔められた人格を示し、『金の冠』が榮光を象徴する事は説明するまでもありません。併し此の『座位』は單に救はれた者の榮光の位置を示すのでなく、其の仕事をも示します。神は今『赤瑪瑙』によつて示された如く世界の審判の座に就いて居られるのであつて、二十四人の長老即ち救はれたもの、教會は其の周圍に陪審官の地位に置かれてあると言ふのです。勿論之れは第一節に『その後おこる可き事を汝に示さん』とある通り將來の事であつて、神が全世界を審き給ふ時の光景を描いたのです。だから、

「御座より數多の電光と聲と雷響と出づ、また御座の前に燃えたる七つの燈火あり。之れ七つの靈なり」

と書いてあります。モーセがシナイ山で律法を受けた時に「民みな雷と電光とラツパの音」(出埃及二十ノ一八)を聞いて『懼れ戦いた』とある其の同じ律法に照して審判を行ひ給ふのであるから矢張り戰慄すべき『電火と雷と聲』とが出たのであつて、之れは罪人を招き給ふ福音の時期は去つて、之を審き給ふ時が來たのを示します。『また御座の前に燃ゆる七つの燈火あり。これ神の七つの靈なり』とあるのも此の審判の嚴正なるべき事を示してゐます。『七つの靈』とは神の聖靈を

指したのである事は既に第一章に於て述べた通りですが、此處では聖靈の役割が『御座の前に燃ゆる七つの燈火』として現はれてゐます。西洋の註釋者は大抵聖靈であるから『慰め主』であつて神の審判の中にも恩恵が混つてゐるのを指すと言つて居ますが、それは誤つてゐます。『燃ゆる燈火』の語の中に恩寵を見出すのは難いですが、燈火は暗きを照し、かくれたるを發くものです。東洋人にはよくわかります。之れは閻魔の廳にある照魔鏡と同じ思想で、大審判の時に於ける聖靈の役目は、福音時代に於ける慰めの役目と異つて、凡ての人の心の有様を其儘に照し出す『燃ゆる燈火』となることを指したのであると思ひます。だから福音を拒絶した人は、虚偽の申開きをすることの出來ぬ立場に立つのです。

「御座のまへに水晶に似たる玻璃の海あり。御座の中央と御座の周圍とに四つの活物ありて前も後も數々の目にて滿ちたり。第一の活物は獅子の如く、第二の活物は牛の如く、第三の活物は面のかたち人の如く、第四の活物は飛ぶ鷲の如し。この四つの活物おのおの六つの翼あり翼の内も外も數々の目にて滿ちたり、日も夜も絶間なく言ふ「聖なるかな、聖なるかな、昔在し、今在し、後來り給ふ主なる全能の神」、この活物ら御座に坐し世々限りなく活き給ふ者に榮光と尊崇とを歸し感謝する時、二十四人の長老、御座に坐し給ふ者の前に伏し、世々限りなく活き給ふ者を拜し己の冠を御座の前に投出して言ふ「我らの主なる神よ、榮光と尊崇と能力とを受け給ふは宜なり。汝は萬物を造り給ひ、萬物は御意によりて存し且つ造られたり」(黙四ノ六―十一)

『水晶に似たる玻璃の海あり』の譯は悪い。元譯に『水晶に似たる玻璃の海の如きものあり』の方が正しいです。原語のホース即ち『如き』の字は全體の感じを言つたので、『水晶』だけを言つたではありません。『海』其物は動搖を示すもので本書の中には善い方面を指すことに用ゐてありません。例せば二十一章に於て、新天新地には『海も亦無きなり』と書いてあります。即ち現在の如き動搖常なき世界は過去となつてしまふと言ふのです。されば神の『御座の前に……海あり』と改譯した人は黙示録の思想に通じない人でありませう。此れでは元譯を改惡した事になります。ヨハネの言はんと欲する所は、神の御座の前には、海の如く廣いが海の如く動搖しない、海よりも透明で純粹な一枚の水晶で張りつめたやうに靜かな、言はゞ清澄な海の面のやうなものであるとの意味です。それは何を指したのであるかと言へば、舊約の神殿の聖庭に置かれてある『銅の洗盤』(出埃及記三十章十八以下参照)を暗示してゐるのです。此の銅の洗盤は『海』とも呼ばれてゐます(列王上七ノ卅九)。此れは誰でも知つてゐる通り日本の神社に必ず備へてある手洗水と同じ用に備へられたもので祭司が神前に出入する時、其手足を洗ひ淨めて『死をまぬがれる』ためです。それほどエホバの神は聖いと云ふのです。ヨハネは此の聖さに更らに大さを加へて、在天の神殿にある手洗水は大海の如きものである。しかも些少の汚れも動搖もない水晶の如きものであると言つて

ゐるのです。彼はバトモスの孤島で毎日海を眺めて其の動搖する様を見ては喜ばなかつたが(此れはヤコブも同様で一章六節に神を『疑ふ者は風に動かされて翻る海の波の如し』と言つてゐる)鏡の面の如く美しい海面を見ては、心を洗ふ神前の手洗水のやうに感じたのでありませう。偉大なるヨハネの見方ではありませんか。其の感じを其の儘に此處に寫したのが即ち此語となつて現はれたのです。結局神の偉大なる聖さを示し、且つ其の聖さは神に近かんとする者を洗ひ清める設備ともなることを意味してゐるのでせう。其次に神の聖座は『四つの活物』でとりまかれてゐると書いてあります。『中央と御座の周圍』とあるのは、ヨハネが居たところから見て『中央』即ち正面です。だから聖座の前後左右を『四つの活物』がとりかこんでゐるのです。此の『四つの活物』は地上の凡ての活ける物の代表です。『獅子』は野獸を、『牛』は家畜を、『人』は人類を、『鷲』は鳥類を代表して、結局生とし生けるもの一切を象徴せしめたのです。此らのものは各々『六つの翼』を有つてゐます。それは舊約の神殿の至聖所に於けるケルビムの形です。至聖所にはモーセの十戒を容れた契約の櫃があります。其上に純金の贖罪所(英語では『恵みの座』と云ふ)といふのが安置してあります。其の上に二つのケルビムが面と翼とを向ひ合せて立つてゐます(出埃及記廿五章十七以下参照)。神の榮光は此の二つのケルビムの間に現れてモーセ又は祭司に語り給ふたのです。一體ケ

ルビムとは何であるかと言へば、其の形状の如きは種々に書いてあるが、要するに近づく可らざる神の聖を護る御使です。(神社に唐獅子が二つ並んでゐるのは聖書のケルビム又はアツスリアの宮殿の門前に並んでゐる人面にして翼を有する牡牛と何らかの歴史的關係が有りませう)エゼケル書一章にも此處と同じく『獅子』と『牛』と『人』と『鷲』との形を以て表現してゐます。凡ての生物の代表であると同時に、凡ての生物の綜合でもあります。獅子の俊敏と牛の力と鷲の自在と人の智慧とを綜合し代表する神の御使です。活物の数が『四つ』であるのは、地を東西南北と見て全地を指したもので、翼が『六つ』あるのは即ち三對を有するので、『三』は天の聖き數を意味します。イザヤの見たセラビムも六つの翼を有してゐました(六章二節)。しかも此の四つの活物は翼の全面悉く『目』で充滿してゐる。言ふまでも無く、常に目覺めて四方八方を見張つてゐることを意味します。ソロモンの箴言に『エホバの目は何處にもありて悪人と善人とを鑒みる』(十五ノ三)といふ語があるが、此の『四つの活物』は地上の生ける凡てのものが、或る意味に於て神の目であると言ふのでせう。しかも此れら『四の活物』は『日も夜も絶間なく』神を禮讚してゐるといふのです。あゝ偉なるかなヨハネよ、と叫びたくなります。ヨハネの耳はベートヴエンの夫れの如く、實に靈界に響く『四つの活物』の讚美の聲を聞いたのです。生きとし生けるものの綜合が如何に美しい

音楽を奏してゐるかは、凡人には聞へないで、寧ろ生存苦より生ずる呻きの聲が日夜我々の耳に入るやうです。併しヨハネの如き人やベートヴエンの如き人には本當に宇宙の音楽が美しく響いたのです。作曲家であるベートヴエンが聞いたときに『月光曲』として『第九交響樂』として『莊嚴ミサ』として表現されたのですが、ヨハネは『聖なるかな、聖なるかな昔在し、今在し、後來り給ふ全能の神』と歌つてゐると聞いたのです。ヨハネの歌詞にベートヴエンの樂譜をつけたものが神の造り給ふた『四つの活物』の讚美歌であるであらうと私は想像します。此れは美しい空想でなく、現實な宇宙の聲であると私は信じてゐます。耳さへあれば此の偉なる歌が聞かれるのです。(天國に往つたら私共の靈の耳が開かれ、之を聞く事が出来るのだと、子供らしいと笑はれるか知りませんが、私はそう信じてゐます)天地の神を禮讚する頌榮の歌は唯だこれだけではありません。此の全宇宙の讚美に合奏する『二十四人の長老』の歌があります。此歌は救はれた者の讚美の歌ですが、此處では未だ造物主としての神を讚美してゐるだけです。救主としての神ではありません。此意味に於て教會の讚美は宇宙萬有の讚美と全く一致するもので、共に一つの樂を奏することとなるのです。『四つの活物』も『二十四人の長老』も共に萬物を造り給ふた神に榮光を歸するの自分の仕事でもあり歡喜でもあるのです。殊に『二十四人の長老』に至つては曩きに神から與へ

られた『金の冠』すら再び神の御前に投出して一切の榮光を神にのみ歸して居ります。天國に在つて私共の一番楽しい仕事は直接に神を拜し一切の榮光を神に歸する事でありませう。

神の羔羊 (第五章)

本章に於て愈々本書の中心となる七つの封印の開封が始まるのです。併しそれが開封されるのは第六章からであつて、本章は其の序幕です。ヨハネは先づ天地の王なる神が天地を支配し給ふに當つて最初から最後に至るまでの大經綸を樹てて之を御手の中に握り給ふ莊大な光景から始めてみます。

「我また御座に坐し給ふ者の右の手に卷物のあるを見たり。その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる」
(五ノ一)

とあるのが即ちそれです。「御座」は帝王の玉座であつて茲では天の父としてではなく天地に帝王として正義を以て全世界を支配する有様を示します。言ふまでもなく『卷物』には天地を支配する神の御計畫が書かれてゐるのであり、「裏表に文字あり」とは神の御計畫の周密にして天地間に行はるゝ一些事をも洩すことなく御經綸の中に收めてある事を語るのです。但し其の計畫は神御自身

のみ知り給ふところであつて何人と雖も之を窺ふことは許されません。即ち『七つの印を以て封ぜられ』てゐるのです。『七』は完數で、十分に封印せられてゐる事を示すと同時に、七期に亘つて、次第に展開すべき卷物の内容を暗示してゐます。且つ此の卷物は神の『右の手』にあります。『右の手』は神の力と實行とを現すものであつて、此の御計畫は一つだに實行されずに残るもの無いものである事を思はせます。斯く嚴封されて唯だ神の御手によつて實行されるまでは何人も窺ひ知る可らざるものではありませんが、タツタ一人之を開封して事前に示し得る御方があります。ヨハネは其の御方を紹介する前に序曲として『強き天使』を讀者の前につれ出します。二節以下がそれです。

「また大聲に「卷物を開きてその封印を解くに相應しき者は誰ぞ」と呼ばるる強き天使を見たり。然るに天にも地にも、地の下にも、卷物を開きて之を見得る者なかりき」

『強き天使』とは誰であるかと問ふ必要はないのです。此れは唯だ『大聲に』『天にも地にも地の下にも』聞こえるやうに叫び得る天使であるから『強き』と形容したのに過ぎません。要するに宇宙の何處を捜しても、天地間の誰に挑んでも、此の卷物を開封し得るものが無い事を強く言つたのです。天地を支配する神の御經綸は絶対の秘密です。事の起るまで何人も知り得ません。然るに

「長老の一人われに言ふ「泣くな」、視よユダの族の獅子ダビデの萌蘗、すでに勝を得て巻物とその七つの封印とを開き得る也」(五節)

とあります。神の攝理の神祕の扉を開いて、事の未だ起らざる前に世界の歴史を豫知し得る御方があると言ふのです。此の言明は『長老』によつてなされてゐます。『長老』は理想の教會の理想代表者ですから、主として教會の前途(ヨハネの時から以後)に就いて開封されるものと解すべきでせう。『ユダの族の獅子、ダビデのひこばえ』とは言ふまでもなく主イエスです。ユダは十二人兄弟の中で『獅子』であると父ヤコブが言つてゐます(創四九ノ九)。ですからイエスをユダの子孫中の代表的な獅子と見たので『ダビデのひこばえ』とはイザヤ書十一章の預言の語を借りてイエスは其の預言の成就者である事を言つたのです。即ち『ユダの獅子』は其の強さを示し、『ダビデのひこばえ』はメシアたる事を指したのです。但し主イエスと雖も『此巻物を開き得る者』即ち『開くに相應しき者』となるには『勝を得』なければなりません。單に神に子としてではなく人の子として生れ『世に勝ち』(ヨハネ傳十六ノ卅三)『陰府に勝ち』(マタイ十六ノ十八)救世主の業を全ふしなければ封印を開いて之を示す資格は生じなかつたのです。されば開封して示されたところの内容も亦救世の業に關するところだけであります。本書の第六章以下に記載されてあるもの

が即ちそれです。だから黙示録(寧ろ『開示録』)と云ふのです。

「我また御座及び四つの活物と長老たちの間に、居られたるが如き羔羊の立てるを見たり。之に七つの角と七つの目とあり。此の目は全世界に遣はされたる神の七つの靈なり。かれ來りて御座に坐し給ふ者の右の手より巻物を受けたり」(五ノ六、七)

『：間に』は『中央に』と譯すべきでせう。主イエスは救世の大業を成就した事によつて神の御座の正面である『中央』に位置を占められました。之は榮譽の位置を意味するのみでなく、救世の事業は宇宙の核心を爲すものであるからです。『之に七つの角と七つの目あり』とは此の救世主は取りも直さず全知全能の御方であると言ふのです。七は満數、角は能力、目は知識である事は明白過ぎるほどです。『此の目は全世界に遣はされたる神の靈なり』の譯は悪いです。『此れは全世界に：』と譯す可きです。『此れは：』と云ふのを『目』のみに解する人と『目』並に『角』を指すと解する人とありまして、私は『目と角』と兩方を指すと思ふ一人です。文法上はいづれに解しても差支はありませんが、神の全知だけが全世界に遣はされ、全能の方は遣はされないと考へにくいです。七つの目と七つの角は全世界に遣はされた全知全能の靈だと云ふのであると思ひます。いづれに解釋するとしても譯語は『此れは：』である可きです。兎に角イエスが十字架の大業を成

就して以來聖靈が特別の意味で全世界に遣はされるやうになつたことを指すのでせう。同じヨハネが「イエス未だ榮光を受けざれば、御靈いまだ降らざりし也」とヨハネ傳七章卅九節に言つてゐるのも思ひ出されます。聖靈なるものはイエスが贖罪を成就した後に人々に與へられたものであると言ふのであつて、此處に聖靈が、屠られたる如き羔羊から遣はされるとある思想に一致します。次に注意すべきは「……の中央に屠られたる如き羔羊の立てるを見たり」の語です。長老は泣いてゐるヨハネを慰めて「ユダの獅子」が出て來て巻物を開くと言つたのに、出て來たのは強さうな獅子ではなくて「屠られたやうな羔羊」でした。面白いですね。神の國にあつては一番強い獅子とは屠られたる如き羔羊です。此世では最も能く他を屠る者が強者ですが、天國では他の爲めに喜んで屠られる者が強者であります。「屠られたる如き」の原語には祭壇に獻祭として屠られるの意味が含まれてゐます。「如き」の字は屠られたが死んでゐるのではない事を示す爲めです。「立てる」の字も同じわけで此の羔羊は屠られたが「立つて」ゐるのです。十字架と御復活とを一語で現す爲めです。しかも此れは「羔羊」中でも最も若い「羔羊」です。ヨハネはイエスに始めて歩いて行つた時に、恩師バプテスマのヨハネから「視よ、世の罪を負ふ神の羔羊」(ヨハネ傳一ノ廿九私譯)と紹介されたのを忘れなかつたのでせう。但しヨハネ傳の方には普通の羔羊の字アムノスが用ゐられ

てゐるに反し、黙示録には「最も若い羔羊」アルニオンが用ゐられてゐるのは興味深いです。レビ記九章四節によると燔祭の羔羊は「當歳」のものと規定してあります。生れて一ケ年以内のものが最も純であるからです。若い頃のヨハネはイエスに於て單に「羔羊」を見たが、老年のヨハネは黙示録の中に燔祭として「屠られる」に最も適當した若い羔羊としてのイエスの謙遜と純情と贖罪的死とが彼の眼底に次第に明かに映じて來たのでせう。

「かれ巻物を受けたるとき四つの活物及び廿四人の長老おの立琴と香の満ちたる金の鉢とをもて羔羊の前に平伏せり。此の香は聖徒の祈禱なり」(五ノ八)

ヨハネ傳三章卅五節を見ると「父は子を愛し萬物を其の手に委ね給へり」とあるが、今天地の王なる神が其の經綸の巻物を羔羊に渡したとあるのは同じ思想です。されば全宇宙(四つの活物)も全教會(廿四人の長老)も一様に「羔羊の前に平伏せり」とあります。此の「平伏」の字は四章十節に神の前に「伏し」とあるのと同じ文字で、神に對する敬禮を羔羊に獻げたのです。「立琴」が讚美を意味し「香」が祈禱を意味する事は申すまでもありません。但し「此の香は聖徒の祈禱なり」は譯文としては正しくありません。矢張「此れは……」と譯すべきです。尤も意味は此儘で正しいのです。此れによつて見ますと天上の聖徒にも讚美や感謝の外に祈禱もあるわけです。我々地上の

者の爲めに執成し祈るのでせうか。それとも永久にそれからそれへと祈るべき事があるのでせうか。それから、彼らの讚美歌は次の如くです。

「斯くて新しき歌を謳ひて言ふ。汝は巻物を受け、その封印を解くに相應しきなり、汝は屠られ、その血をもて諸種の族・國語・民・國の中より人々を神の爲めに買ひ、之れを我らの神のために國民となし、祭司となし給へば也。彼らは地に王たるべし」(五ノ九十)

なぜ此れが新しい歌ですか。第四章八節と十一節にある天地の主なる神を謳ふ歌と對比して此れが新しいのです。換言すれば聖なる神を天地の主として謳ふのは舊約の歌で、イエスを贖罪主として讚美するのは新約の歌であります。此歌詞の中心を爲すものは又しても「屠られ」給ふた事です。イエスの御一生が如何に深い印象をヨハネに與へたかは言ふまでもない事です。最も深く印象し、恰もそれが唯一の事件でもあるかの如くに感ぜられたのはイエスの死であつたのです。否それだけではありません。イエスの死を思ふごとに、不思議にも自分の罪の潔まり行くを感じ、神の前に近づくことを感じ、新しい生命の湧き出づるを感じたのでせう。さればこそバトモスの島で此の贖罪の新しい歌を聞くことを得たのでせう。此歌は偏見を有する或る學者がパウロの神學の餘波を受けた後人の作ではないかと怪しむほどに、十字架の血の贖罪の力を高唱してゐます。「血をも

て……人々を神のために買ひ」の語の如きはパウロの語調であると言ふ人もありますが、これこそ實にイエスの十字架を體驗する何人でも感ずる所であります。私としてはパウロもペテロもヨハネも各自が其の體驗によつて同じ結論に達したのだと思つてゐます。此歌の中には舊約聖書(レビ記等)からの傳統と主イエスの遺訓とを十字架によつて説明し、自己の體驗によつて消化した使徒等の信仰の結晶が含まれてゐます。其れは

第一、イエスの一生涯の中心は「屠られ給ひし」にある事

第二、其の「血をもて……買ひ」給ひし事

第三、此の「買ひ給ひし」はユダヤ人に限らず、諸國民に及ぶ事

第四、「買」はれたる者は神の「王國」に屬し、(本文に「國民となし」とあるは惡しし、「王國となし」と改譯するか、又は他の原文に隨つて「王となし」と改む可きである)「祭司」となり、「地に王たる」事

の四ヶ條です。「買ひ」といふ語は商買上の文字です。市場などに行つて買出してくるのに用ゐます。即ちキリストは御自分の血を價として支拂つて、世界と言ふ市場から神の御所有として我々を買出して下さつたと言ふのです。此の文字には「贖罪」の意味は見出されませんが、それに似た思

想があるのは争へません。他人の所有になつてゐる者を神の御所有に買つて下さつたとの意味は明かです。『人々を神の爲めに買ひ』の『人々を』の字は原文にはありません。元の譯には『我々を』とあります。いづれも推定で補足した語です。兎に角諸國民の中から誰かを買ひ出したのです。そして此世から移して神の『王國となし』て下さつたのであります。即ち別の世界に移されたのです。信者が集つて別の社會を形成するのは此の事實の一つの具體化（不完全ながら）であると言へるでせう。次に『祭司となし』の語は注意を要します。我らキリストの國に屬する者は自己の救に満足するのみではいけないので、他人の爲めに『祭司』として、執成し祈る役目があるのです。救はれた在天の靈も『祭司』とされて居るのであります。彼らは我らの好き模範です。此の歌の最後に『彼ら地に王たるべし』とあるのは譯が良くありません。『彼らは地に王たり』とするか、或は『彼らは地を支配す』と譯す可きで、彼らの現在の状態を指して居るのです。キリストの血によつて買はれた聖者等は現在に於てキリストと共に『地を支配』して居るのです。キリストが現在神の右に坐して世を支配して居り給ふ如く彼らもキリストと共に『地に王たり』であるのです。我らもやがて其の仲間入りを許されます。此事は忘れ易い眞理ですから能く心をとめませう。現在、全地を支配してゐるのは他の何人でもありません。主イエスキリストです。而して救はれたる聖者等はキリス

トと共に地を支配して居るのです。政治家や財政家は反逆的な主權を振つてゐるかも知れませんが、眞の支配者は彼らではないのです。我らの先輩です。やがて我らです。黙示録の最後の頁が成就する頃には此の『支配』が完全に成就して、他の一切の權力は滅びます。素晴らしい救の成就です。次に此の新しい歌に共鳴して『多くの天使』が『大聲』に左の讚美を獻げてゐます。

「屠られ給ひし羔羊こそ能力と富と智慧と勢威と尊崇と榮光と讚美を受くるに相應しけれ」(五ノ十二)

「其數千萬々」とあります。僅かに「千」や「萬」ではなく數へ能はぬ多くの天使です。彼らは七重の禮讚を獻げてゐます。能力・富・智慧・勢力・尊崇・榮光・讚美、此の七つです。即ち滿數です。全宇宙に散在して居るあらゆる『能力』『智慧』『富』『權威』などは悉く集めて「屠られし羔羊」の御所有です。世界最大の帝王も其の破片を暫時の間だけ所有してゐるに過ぎません。「十二軍餘の天使」ですか、否、「十二軍」を何億倍せる全宇宙の天使の群が『大聲に』(五ノ十二)此く讚美してゐるのに、其聲を聞く耳を持つてゐたのは古往今來ヨハネ一人でしたのでせう。ヨハネは『大聲に』と言つてゐますが、私にはチツトも聞えませんが、金聲と云ふのは私共ではありますまいか。ヨハネはなほも續けて言ひます。聞け、宇宙の音樂は天使だけではありません。

「我また天に、地に、地の下に、海に在る萬の造られたる物、また凡てその中にある物の云へるを開けり。

曰く、願くは御座に坐し給ふ者と羔羊とに讚美と尊崇と榮光と權力と世々限りなくあらん事を」(五ノ十三)と。

此の聲も亦た我々には聞えないでせうか。此れは靈の耳を聳ててゐる時に幾分か聞えるやうです。實に萬物は神を讚美してゐます。が、『地の下に』の語は更らに私共を驚かせます。此語は第三節にも見ましたが、『陰府』を指したものです。『陰府』さへも神とキリストを讚美せずには居られないと言ふのです。惡魔さへも本心は神と羔羊とを讚美してゐるに相違ありませんが、それをも聞き得たのはヨハネだけでせう。唯だ不思議に感ぜられる點は天使が『屠られし羔羊』に獻げた讚美の方が造物主に獻げられた歌よりも立派である事です。思ふに之れは天地創造の事業よりも、十字架の救の方がヨリ困難であり、ヨリ大切な事であるからでせう。天使達は救の御事業を天地創造以上のものとして、驚嘆してゐるのです。此らの驚く可き讚美が、天の軍勢や天地萬有によつて獻げられた時に、凡ての活ける物の代表『四つの活物』は只だ一語、心からのアーメンを禁じ得ず、諸教會の代表『長老たち』は感極まつて一語をも出し得ず、伏して拜するのみでした。即ち十四節に

「四つの活物はアーメンと言ひ、長老たちは平伏して拜せり」

とあります。

第六章

本章に於て愈々「封印」が羔羊によつて開かれます。

「羔羊七つの封印の一つを解き給ひし時、我見しに、四つの活物の一つが雷霆のごとき聲して「來れ」と言ふを聞けり。また見しに、視よ白き馬あり、之に乗れるもの弓を持ち、かつ冠冕を與へられ、勝ちて復た勝たんとて出で行けり」(六ノ一、二)

右に第一の封印の開封だけの本文を掲げましたが必ず本章の終即ち第六の封印まで聖書の本文を御読み下さい。さすれば左の順序で種々の馬の出現を見るでせう。

第一の封印を解けば『白馬』出で来る

第二の封印を解けば『赤馬』出で来る

第三の封印を解けば『黒馬』出で来る

第四の封印を解けば『青ざめたる馬』出で来る

第五の封印(此れはあとまわしとします)

第六の封印を解けば『大なる地震』です。

先づ始めに記憶せねばならぬ事は、七つの封印の中で最も大切なのは第七であつて其の前の六つの封印は第七に到着するまでの準備的経過であるといふ點です。前から申して居る通り黙示録は主の御再臨を書かんとして居るのですが、其時までの世界の大勢の経過を書かねばなりません。第一から第六までが即ちそれです。換言すれば主の第一降臨から御再臨までの世界の状態を簡単に書いたのですから第一の封印から第六の封印までは並行するものであつて、之を時代別に見る可きではありません。此れを一言で説明すれば

白馬はキリストの福音です。

赤馬は殺し合ふ事即ち戦争です

黒馬は飢饉です

青ざめたる馬は主として疫病でせうが『剣と饑饉と死』です。

キリストの福音が『白馬』であるのは考へ易い事です。純真な神の御言葉が世に現れるや直ちに靈戦は開始せられ『勝ちて復た勝たんとて出で行きます』。しかし悪魔も負けては居りませんから非常に働き出します。『戦争』や『饑饉』や『疫病と死』とそれから地震などは相次いで起り、福音の進展と共に進展して参ります。悪魔の働きと言ふよりも神の審判的行爲と言つた方がよいかもわ

かりません。兎に角福音と相並んで戦争や饑饉や疫病や死や地震などが益々人間を囂する事が盛んになつてくるといふのが大體の意味です。勿論此れはヨハネ獨創の考ではありません。主イエスが十字架にかゝり給ふ直前にオリブ山で語り給ふたエルサレム滅亡から此世の終末までの預言に基いて書いて居るのです。ですからマタイ傳二十四章を参照する必要があります(必ず御一讀下さい)。マタイ傳によりますと、弟子等がエルサレム滅亡と世の終とに就いて質問した時に、主は二つの答を與へて居られます。一は其當時から世の終に至るまでの経過で、二は世の終の近づいた時の状態です。十四節に『而して後、終は至るべし』とありますから十四節までは『終末』の預言ではなく、十四節以下が『終』の預言である事は最も明かです。其の第六、七節を見ますと、

「汝ら戦争と戦争の噂を聞かん……また處々に饑饉、疫病(元譯)地震あらん。此らは産の苦しみの始まり」

とあります。尤も改譯には『疫病』は省いてあります。或る古い寫本には無いからです。併し同じ記録のルカ傳二十一章十一節を見ますと改譯にも「處々に疫病饑饉あらん」とありますから、マタイ傳から省かれても主イエスが『疫病』の事も言はれたものと思はれます。それで元譯を採用する事は事實上は差支ないと思ひます。するとイエスは其の當時から世の終に到るまでには福音の進展

すると共に、

戦争

饑饉

疫病

地震

が頻繁に起るであらうことを預言されたわけです。此れが即ちヨハネが黙示の中に見たところの

白馬（福音）（第一封印）

赤馬（戦争）（第二封印）

黒馬（饑饉）（第三封印）

青ざめた馬（疫病）（第四封印）

地震（第六封印）

此く見て参りますと、マタイ傳と本書の封印とが全く同じものを指して居る事がわかります、但し第四の封印と第六封印との間に第五封印がありますが、此れもマタイ傳の方にもあります。但し其の順序が『疫病』と『地震』との中間でなく『地震』のあと即ち第八節に『そのとき人々なんぢら

を苦難に付わたしました殺さん』とありますのを、ヨハネは『第五の封印を解き給ひたれば、會つて神の言ことばの爲め、又その立てし證あかしの爲めに殺されし者の靈魂の祭壇の下に在るを見たり』（九節）と書いて居るのです。此れでマタイ傳二十四章と本書の封印との一致が完全に見られます。今一度繰返へせばイエスの福音の開始から世の終までには（一）福音と（二）戦争と（三）饑饉と（四）疫病と（五）地震と（六）迫害とが相並んで行はれるといふ意味であります。勿論此らのものが一つ一つ文字通りに解釋されねばならぬものでもありますまいが、大體の世相として第一世紀から世の終末に近づくに随つて上述の如き事が次第に顯著に行はれてくると言ふのでありませう。福音が世界的に擴がるにつれて戦争や饑饉や疫病又は地震なども益々人を脅かすに至り、本當に主を信する者の苦難も愈々加つて行くのでありませう。

以上が六つの封印を鳥瞰的に見た大體であります、其の一つ一つの意義も逐次研究致しませう。

第六章 一—八（第一封印より第四封印）

「羔羊七つの封印の一つを解き給ひし時、我見じに、四つの活物の一つが雷霆の如き聲して「來れ」と言ふを聞けり。また見しに、視よ白き馬あり、之に乗れる者弓を持ち、かつ冠冕を與へられ、勝ちて復た勝たんとて出て行けり」（六ノ一、二）

『四つの活物』即ち萬有の代表者の一人が『雷霆』の如き聲で『來れ』と叫んでゐるとは實に面白い見方です。『雷霆の如き聲』は言ふまでもなく神の怒の聲、審判を招來する聲を暗示するので、『來れ』とは再臨の主に呼びかけて居るのか、或は審判の時を呼び寄せてゐるのか、いづれにしても此世の終末を急がせる叫びであります。ヨハネの耳には天地萬物が唯だ此の日を促進せんが爲めに雷の如く叫んでゐるのが聞えたのであります。

其の聲に應じて先づ現れたものが『白馬に乗れる者』即ちキリストの福音です。ロマの將軍は凱旋する時には白馬に跨つたと言ふことです。當時ロマの軍勢は無敵と稱せられてゐましたから『白馬』は福音の純なる事を示すと同時に其の強さを示すものです。キリストの福音は敗北を知らない常勝軍であります。『冠を興へられたり』の語も『勝ちてまた勝たんとて出で行けり』の語も皆な此點を指してゐます。其の武器も亦優秀なもので、敵をして恐れしむるに足る『弓』であります。當時に於て最も恐れられてゐた飛道具です。今ならば大砲とか爆撃機とか、防ぎ難い武器であります。ダビデも投石とか銅弓（詩十八ノ卅四）とを用ゆるに得意であつたために巨人ゴリアテを倒し又多くの敵を征服しました。福音は飛道具です。離れた所から飛んで來て直ちに人の肺腑を突き貫く天來の力であります。

但し本章に於ては未だ白馬に乗れる者の誰であるかは明記されて居りません。第十九章十一節に至つて始めて白馬上の將軍の御姿がハッキリと現はれて參ります。現在の教會は『或人とほく旅立せんとして其の僕どもを呼び、之に己が所有を預くるが如し』（マタイ廿五ノ十四）と言ふ時代であります。主は暫く我らを離れて福音宣傳の事業を我らに委任して居られます。白馬は在りますが、馬上の將軍の御姿は見えません。第十九章に其の御姿を見る時は御再臨の審判の時でありませう。此の區別をハッキリと心に留めて置きませう。全世界が顔と顔とを合せて主イエスを見奉るの御再臨の時です。

【第二の封印を解き給ひたれば第二の活物の「來れ」と言ふを聞けり。斯くて赤き馬いで來り之に乗れる者地より平和を奪ひ取ることと人をして互に殺さしむる事とを許され、また大なる劍を興へられたり】（六ノ三、四）

『赤き馬』とある此の『赤』は血の色です。『互に殺さしむる』の語や『大なる劍』の語と同じく戰爭を意味します。福音が白馬に跨つて走れば戰爭も赤馬に乗つて走ります。『馬』は疾く走るものであります。大局から達觀すれば、福音も戰爭も饑饉も疫病も死も悉く神の使命を果さんとして疾く走つてゐます。一は人を救ふ爲めであり他は人を審判せんが爲めであります。流轉進展、水は

流れて止まず、地球は回轉して停らず、世は終局に向つて驀進しつゝあります。而して人は無自覺に眠つてゐます。白馬の福音によつて目覺めなければ必ず赤馬の『大なる劍』に見舞はれます。御覽なさい。平和の福音を受け入れぬところは悉く『地より平和が奪ひ取られ』てゐるではありませんか。國と國とは言ふまでも無く、人と人との間に於ても、武装せずには商賣も取引も出来ないではありませんか。友情を示す贈答品にも掛引があり、爆弾が込められてゐる。

【第三の封印を解き給ひたれば第三の活物の來れと言ふを開けり。われ見しに。視よ黒き馬あり。之に乗るも手に權衡を持てり。斯くてわれ四つの活物の間より出づる如き聲を開けり。曰く小麥五合は一デナリ、大麥一升五合は一デナリなり。油と葡萄酒とを害ふな】(六ノ五、六)

饑饉を『黒馬』で表現したのは能く解せられます。黒い穂は腐り穂であり、又蝗虫の害など受けた田畑は黒くなるとの事です。『手に權衡を持てり』といふのは、食物が少いために、一々『權衡』で量つて食べなければならぬといふ意味でせう。『小麥五合は一デナリ、大麥一升五合は一デナリ』といふのは當時の相場約八倍の高値を示すもので『手に權衡を持てり』と同じく饑饉を形容した語であります。一デナリは大工の一日の賃銀ですから、食料品の高價である事を言ふのであつて、結局働いても働いても食ふ事の困難な状態です。或は働きたくても職業のない世相をも指します。

併しそれは生活の困難な状態であつて、未だ全く生きられぬ状態ではありません。『小麥五合』は一日分の食料と計算されたものですから、辛ふじて生きてゐられる状態です。此の聲が『四つの活物の間より出るが如く』であつたとはどういふ意味でせうか。四つの活物の一つでなく、四つの活きもの間といふのですから、自然界全體が一致して人間に食物を與へることを惜しむが如く思はれるとの意味では無いでせうか。兎に角神様が最初に人を造つた時に豊かに食物を與へ『生めよ殖えよ地に滿てよ、之を服從せよ』と仰せられたのですが、それと反對の聲が聞える時が來たのです。併しまだ神の御恵みは残つて居ります。『油』と『葡萄酒』とを害ふなどの聲は聞えて居ります。『油』が何を意味し『葡萄酒』が何を指すかと問はずともよいでせう。『油』も『葡萄酒』も舊約書では神の恵みを指して居ります。

【第四の封印を解き給ひたれば第四の活物の「來れ」と言ふを開けり。われ見しに、視よ青ざめたる馬あり、之に乗れる者の名を死といひ、陰府之に隨ふ。彼らは地の四分の一を支配し、劍と饑饉と死と地の獸とをもて人を殺すことを許されたり】(六ノ七、八)

『馬』を以て表徴された神の使者は『青ざめたる馬』を以て終りとします。之は『死』であるよ明かに説明されてゐます。主として疫病及び他の疫病によれる死でありませうが、『劍と饑饉と野獸』

とよれる死も除外されては居りません。『地の野獸』が殊に加へられてゐるのは獅子など猛獸の餌にされた當時のクリスチャンの事を思はせるものがあります。世の終末が近づくに随つて、福音も擴がつて行きますが、それと同時に戦争も、食ふことの困難も、疾病も死も愈々其の猛威を逞ふするのであります。『地の四分の一を支配す』といふのは能く解りませんが、神の與へ給ふ本來の壽命に達せずして『殺される者』が非常に多いといふ意味だらうと考へます。創世記の初の數頁を見ましても、神が人を造り給ふたときに、之を神に『象^{かたど}りて』造り『いのちのいきを吹き入れて』人を『生けるもの』と爲し給ふたのです。人若し神と偕に歩むならば死ぬる事なくしてエノクの如く天に移さる可きであつたのです。現在の我々は悉く罪の子ですからエノクの如くには成れないでせうが、少くとも天壽を全ふし、劍や饑饉や野獸や疾病によらず『よき齡に及び老人となり年滿ちて氣絶え死にて其民に加はる』(創世廿五ノ八)のが本當であります。然るに多くの者即ち『地の四分の一』とヨハネが言ふ程に澤山ものは心配や苦勞や疾病などに『殺される』やうになりました。勿論『疾病』にかゝるのが特に神の罰だと言ふのではありません。『野獸』に喰はされたクリスチャンが特に悪人でないのと同じです。が、兎に角人間の世界に一點の罪惡も入り込まなかつたら、人間には劍や獸や疾病に殺されるといふ事が無いのであります。

第六章九一十七 (第五第六封印)

「第五の封印を解き給ひたれば曾つて神の言の爲め又その立てし證の爲めに殺されし者の靈魂の祭壇の下にあるを見たり。彼ら大聲に呼はりて言ふ「聖にして眞なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐を爲し給はぬか」。爰に各々白き衣を與へられ、かつ己等の如く殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との數の滿つるまで、尙ほ暫く安んじて待つべきを言ひ聞かされたり」(六の九一十二)

ヨハネの時代は實に殉教の時代でありました。イエスを信ずるといふ事は主の爲めに死ぬるといふ事と同じでした。明治の初年に於ても受洗の時の問答は『あなたは首を斬られてもかまいませんか』との一つであつたと言ふことであります。其のやうな迫害の無い今日でも、主を信ずるといふ事は主に忠誠を誓ふことであり、主の爲めには喜んで苦難を忍び、死をも甘んずる心である可きだと思ひます。信仰の爲めに多くの得をするけれども少しの損もせず、少しの犠牲も拂はないのは信仰生活の本流を離れたものでありませう。されば第五の封印を解かれた時に見た異象は『神の言の爲めに殺されし者の靈魂』でありました。此れが教會の姿です。此れが信者の『靈魂』です。讚美歌三二二の『主のためには十字を負ひ……』の精神であります。キリストの福音は第一の封印を解きし時に現れた白馬であります。勝利に勝利を重ねて行くのですが、それと同時に『赤馬』や『黒

馬』や『青ざめたる馬』が出て來ます。此らのものは全世界に災を爲すものですが、白馬軍に従ふ者に對しては一層激しく働きかけます。第四の封印にあつた『劍』と『地の獸』によつて殺されたとあるが如きは文字通りにネロ帝の迫害などの中に見られます。併し此等の死は一として無駄ではありません。それは昔の聖徒の死も我らの小さい苦難も同じく神の『祭壇』に燔祭として献げられた尊き犠牲でありまして、神の前に馨はしい香であります。だから此らの『靈魂の祭壇の下に在るを見たり』とヨハネは言つて居ります。元來『犠牲』といふ言葉は今では非常に廣汎な意味になつて居りますが、本來は祭壇の上に燔祭として献げられた牛や羊を指すものです。即ち『神の言のため、又その立てし證の爲めに殺される』事を指したのです。尊い殉教の死であります。ヨハネの時代には肉體で之を實行させられたのです。今は肉體で之を實行する機會は去つてしまつたやうですが、精神では之を實行しなければなりません。

次に注意を要する語は『殺されし者の靈魂を見たり』と言つてゐる事です。ヨハネは『殺されし者』を見たと言はずに、殊更に『靈魂』を見たと言つて居ります。此れは彼が暗々裡に、人の死から復活までの状態を示してゐるやうです。殉教者達は殺された後に神の祭壇の下に行つてゐます。即ち幸福な状態であります。けれどもまだ完全な救には入つて居りません。復活の體が與へられて

みません。單なる『靈魂』です。言はゞ靈魂が裸でゐるのです。ですから十一節に其の裸を掩ふために『各々白き衣を與へられ』と書いてあります。即ち最後の大審判まで靈魂が中間状態にあるのです。(拙著『イエスに聽く者』の第二講『死後の生存』参照)。のみならず此の中間状態にあつて其の祝福は未だ完全ではありませんから、全き救を招來するために彼らは一生懸命で大聲に呼ばはつてゐます。『聖にして眞なる主よ、何時まで審かすして地に住む者に我らの血の復讐を爲し給はぬか』と彼らが叫んでゐるのは復讐心に燃えてゐるのだと讀むべきではありません。神の大審判の日の速かに來らん事を祈つてゐるのであります。元來『復讐』といふ事は人間同志で之を爲す可きものではありませんが、神に於ては之を爲さざる可らざるものであります。ロマ書十三章にも『愛する者よ、自ら復讐すな』と言つてゐますが同時に『主言ひ給ふ、復讐するは我にあり、我之を報いん』と言つて居ります。此の大復讐は世界の終末に於ける大審判の時にある事は前掲の『死後の生存』に於て述べた通りであります。

次に『地に住む者に我等の復讐を……』とある文字は怎ういふ意味であるか一寸解し難いやうですが、それは極めて簡単に説明が出來ます。『地に住む者』は大審判の時に地上に生存する者との意味ではありません。パウロが『我らの國籍は天に在り』と言つた通り、キリストを信する者は、

天に住む者であつて地に住む者ではありません。我らの住家は地上には無いのです。『地に住む者』とは地を樂しみ地を戀し地に執着し地を己が住家としてゐる人達です。イエスは會つて『此世は橋なり、家を建つべき所に非ず』と言ひ給ふたと聖書外の本に書いてありますがそれは本當でせう。『地に住む者』は『此世の子等』であります。妙にも初代教會の信仰が現世主義でなかつた事が見られます。

それから最後に『殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との數の滿つるまで』の句について考へたいと思ひます。勿論原文には『數の』の字はありませんが、此の意味である事は疑ふ餘地はありません。すると大審判の時が未だ來ないのは救はる可き人の數が未だ不足してゐると言ふわけです。神の豫定説を茲で論じやうとはしませんが、神には御計畫のプログラムがあり毎日一枚一枚實行されて、救はるべき最後の一人に到着した時に此世の終末と大審判とがあるといふ事だけはまちがひありません。一生懸命に傳道して一日も早く兄弟の數を滿たす事が我々の任務であります。それは此ら殉教者の叫びと一致する事であります。

「第六の封印を解き給ひし時、われ見しに大なる地震ありて日は荒き毛布の如く黒く、月は全面血の如くなり、天の星は無花果の樹の大風に搖れて生後の果の落つる如く地に落ち、天は巻物を捲く如く去りゆき、山と

島とは悉く其の處を移されたり。地の王等、大臣、將校、富者、強者、奴隸、自主の人、みな洞と山の巖間に匿れ、山と巖とに對ひて言ふ「請ふ我らの上に墜ちて、御座に坐し給ふ者の御顔より、羔羊の怒り、我らを隠せ。そは御怒の大なる日既に來れば也。誰か立つことを得ん」(六ノ十二—十七)

明白に御再臨直前の光景です。第五の封印のところ殉教者達は御再臨の促進を祈つて居ります。其の祈は聽かれつゝあるので、第六の封印が開かるるや御再臨直前の光景が現はれて來ます。マタイ傳廿四章廿九節に『此らの日の患難のち(即ち第五の封印に示された殉教時代の後)直ちに日は暗く月は光を放たず星は空より墮ち天の萬象ふるひ動かん。其とき人の子の兆、天に現はれん。其の時地上の諸族は皆嘆かん……』とあるのと全く同一です。マタイ傳にあるイエスの言葉、またヨハネが茲に書いてゐる第六の封印の光景は文字通りに解すべきものか。或は譬喩的に解す可きか、容易に決し難いところです。其の解釋に最も善き参考となるものはヨエル書二章二十八節より三十一節であります。曰く『その後われ我が靈を一切の人に注がん。汝らの男子女子は預言せん。汝らの老人は夢を見、汝らの若き者は異象を見ん。その日我また我が靈を僕婢に注がん。また天と地に兆をま顯さん。即ち血あり火あり煙ある可し。エホバの畏る可き日の來らん前に日は暗く月は血に變らん』とあり、又同三章十四五節に『エホバの日審判の谷に近づくが故なり。月も日も暗くなり、星其の

光を失ふ」とあります。此のヨエルの語はイエスの御言葉又前掲のヨハネの語とよく似てゐます。同じ事件を指して預言したもののやうに思はれます。然るにヨエルの此の預言はペンテコステの日に成就されたとペテロは言つてゐます（使徒行傳二ノ二十四―二十四を讀んで下さい）。そこで或る學者は譬喩的に解決するのが本當であると言ひます。ペンテコステの日に實際に日月星辰に變化は無かつたが、それ以上に不思議な聖靈の降臨があつて、それによつてイエスの福音は燃え上りキリストの教會は基礎を置かれた。だからイエス及びヨハネの言葉もヨエルから出てゐるものに相違ない故に同じく譬喩的に解すべきだと言ふのです。なるほどペテロはヨエルの此の預言がペンテコステの日に成就したやうに言つてゐます。併し注意して前掲のヨエルの預言を讀んで見ると二つの事が預言してあります前半は聖靈の降臨ですが、後半は審判の日の光景です。前半と後半との間の「また」の字は可なり大きな間隔を示してゐるのではないでせうか。由來舊約の預言といふものは性質上近い將來の事も遠い將來の事も大した遠近法を用ゐず一括的に言ひ現はしてゐます。イザヤの預言などにもキリストの出現と新天新地の完成とを一緒に豫告してゐる所が多くあります。此のヨエルの語もさうではないかと私には考へられます。前半は聖靈の大降臨を豫告したので、それはペテロの解釋の通りペンテコステの日に成就し、其の時から福音時代となつて今日に至つてゐます。

現代はペンテコステの延長で聖靈の働き給ふ時代であります。假りに福音時代と申しませう。併し後半は其の文字が示す如くエホバの畏るべき日即ち三章の方にある「エホバの日審判の谷に近く」時期を豫告したのではないでせうか。さうだとすれば後半の預言はペテロの時には未だ成就しなかつたものであり隨つて必ずしも譬喩的に解釋すべきだとは言へますまい。寧ろ前半の聖靈降臨が文字通りに應じたことによつて後半もまた文字通りではないかと想像されます。

神の大審判と主とイエスの再臨について、昔から二つの解釋の潮流があります。一は大戦争とか大飢饉とか言つたやうな大苦難は凡て神の審判であり主の再臨であると考へる潮流です。エルサレム滅亡の如きは明かに此れに該當する、先頃の世界大戦の如きもそれである、と言つた風な解釋です。之に反して今一つの解釋は、神の審判と主の御再臨とは世界の終末に於て全面的に全世界の注視の中に行はれると云ふのです。實を言へば黙示録全體の解釋が二者の中いづれを採るかによつて全然異つてしまふのです。ですから此の第六の封印の解釋如何によつて黙示録の意味も目的も變つてくるわけです。私は約二十年前に教會で黙示録の講義を一年間ばかり續けたのですが此點で少からず困難を感じました。此頃やつと曲りなりに自分の立場が定まつたのであります。それは何も新奇な説ではないので、右の二つの解釋を併用したやうなものです。

神の大審判と主の御再臨と言ふことは、私の信する所によれば、或る學者の言ふ如く此世の終末に唯だ一回行はれると限られたものでもなく、さりとて他の學者の言ふ如くエルサレムの滅亡や世界大戦のやうな出来事のみを指したのでもありません。ソドムゴモラの如く、ノア洪水の如く、神は屢々此世に審判を行ひ給ひます。併し此れは部分的あり一時的であります。ですから審判とは言ふものの其の目的は多分に懲戒的であつて個人に對しては悔悛を促し、社會に對しては改造を求める事になります。人間の方面から見れば失敗によつて、教訓が與へられるわけです。前回に例用したエルサレム滅亡や世界大戦を神の審判として見るのは此の部に屬します。斯ういふ場合に主イエスは聖靈にて人々に近づき給ひます。それをバルージャ即ち御再臨と考へる事も出来ませう。主は一層我らに近づき給ふに相違ありません。けれども此らの審判とは、其の廣さと其の目的とを異にした大審判が別にあるのです。それは個人の悔悛や社會の改造を少しも目的としない純粹の審判です。即ち全然黒と白とを分つだけの審判です。其の範圍も部分的地方的でなく、全世界的であり、其の判決は最終的で、其れ以後は悔改が絶無なのであります。此時に主イエスは救主としてではなく、審判主として再臨し給ふのです。慈悲を混へた審判が屢々小出しに行はれるのは、森嚴なる正義のみによつて行はれる最後の大審判に備へしめんための神の憐みの御計画であります。ですから

エルサレム滅亡や世界大戦を神の審判と解釋する人が、神の審判とは何時でも此らと類似の事が繰返へされることを意味するのだと考へるならば大なる誤解に陥つてゐるのです。此らの小出しの審判は、やがて来る可き最終的審判の豫習であり警告であるのです。

此の第六封印に示された光景は此の最後の大審判が將に頭上に落下せんとする有様を描いたのである。が、ヨハネは其處で筆を止めてゐます。ヨハネは世界の進行を此の大審判への行進として書いてゐますが、其の行進は一直線ではなく、螺旋状であります。幾度か大審判の直前にまで進みつゝも亦た後戻りしつゝあるかの如く見えます。實は後戻りしてゐるのではなく螺旋状に進んでゐるのである。同じ途のやうで同じく無い途を、繰返すが如くして重複でない進行を、續けつゝ遂に最後の大審判に達するのであります。此の第六の封印でも今こそ土壇場と思はれる光景ですが、まだ大審判ではないのです。第七章以下には大審判を『一時引き止めて風を吹かせぬ』和やかな光景が描かれてゐます。

第七章 (挿話)

「この後われ四人の御使の地の四隅に立つを見たり。彼らは地の四方の風を引止めて地にも海にも諸種の樹にも風を吹かせざりき。また他の一人の御使の活ける神の印を持ちて日の出づる方より登るを見たり。かれ地と

海とを害ふ權を與へられたる四人の御使に向ひ大聲に呼はりて言ふ「我らが我らの神の僕の額に印するまでは地をも海をも樹をも害ふな」。われ印せられたる者の數を聽きしにイスラエルの子等の諸族の中にて印せられたるもの合せて十四萬四千あり」(七ノ一―四)

大審判は方に行はれんとするやうに見えたが、其の審判の執行者たる『四人の御使』は『四方の風を引止め』る可く命ぜられました。舊約書中にも『風』は屢々審判の記號として用ひられてゐます(例エレミヤ四九ノ三六)。「地」にも『海』にも吹かぬやうに、『樹』をも害せぬやうに審判の執行が猶豫されます。「樹」とは人間でせう。此の猶豫期間に先づ神の選民たるユダヤ人の中から『十四萬四千』の人々が『額に印せられ』るのです。言ふまでもなく『十二』はユダヤ人の滿數ですから十二の十二倍即ち一四四で、十四萬四千人と言つたのは神の豫定し給ふた滿數が救はれる事を指したのであります。彼らが『額に印せらる』とは彼らがキリストの所有である事が表記されて萬人に明かに見えるといふことを意味するのです。「神の印を持ちて日の出る方より登る」此天使は復活のキリスト御自身であると解釋するのが至當でせう。兎に角大審判が行はれんとするに先立つて『神と羔羊との初穂』(黙十四ノ四)であるユダヤ人が救ひ出されるのです。しかも此れを執行する天使が『地の四隅に立つ……』と書き出してあるところから見ると、地上に散在してゐるユダヤ人が

神を中心としたユダヤ國を建設する預言であると見られぬ事もない様です。が、第十四章には同じ十四萬四千の人々が『天』で『新しき歌』を歌つてゐますから地上の出來事を指すと斷言することはむづかしいやうです。天上であるにもせよ、地上にあるにもせよ、終末の審判の直前にユダヤ人が先づ救はれるのです。

但しイスラエル人の十二祖先の名を列記するに當つてヨハネは出生順に従つてゐません。長子のルベンを貶して第二番目としユダを第一番に記してゐます。言ふまでもなくルベンは父の妾と通じた罪によつて貶され其の子孫からも人物は出てゐないからでせう。ユダは立派な人でした。其の子孫からはダビデもイエスも生れてゐます。ダンの名は全然省いてあります。ダンの子孫は十二人中で最も早く偶像教に墮落し、其の結果として早く全滅してしまつたからでせう(歴代上四章以下に十二支族の名を列舉しあれどダンの名は無し)。其の代りにレビの子孫が入れてあります。舊約書ではレビの子孫は祭司族として別扱を受けてゐますが、茲では單に救はれた者の中に列舉されてあります。此外にはエフライムの名の代りに其父ヨセフの名が記入されてゐるのが注意を惹きまします。エフライムの子孫は強大な一族でしたが、ユダ王國から分離した香ばしからぬ歴史があるからでせう。兎に角イスラエル人と雖もアブラハムの子孫たるが故に救はれるのではなく、實質によつ

て救はれる事を暗示してゐるのではないでせうか。

斯くユダヤ人が救はれ『額に印せられ』た後に異邦人の救が完成されます。即ち九節十節に、『この後われ見しに、視よ、諸國、諸族、諸民、諸國語の中より誰も數へ盡すこと能はぬ大なる群衆、白き衣を纏ひて手に櫻欄しやうらんの葉を持ち、御座と羔羊との前に立ち、大聲に呼はりて言ふ「救は御座に坐し給ふ我らの神と羔羊とにこそあれ」。御使みな御座及び長老たちと四つの活動との周圍に立ちて御座の前に平伏し神を拜して言ふ「救は御座に坐し給ふ我らの神と羔羊とにあれ」とあります。此れが異邦人の救です。大審判は來らんとして來らず、其の前にユダヤ人が先づ救はれ、次で異邦人が救はれ、主を信する者は、處罰といふ意味に於ての大審判を免れるのであります。

此處に我らの意を強ふすることは救はれた異邦人の數の非常に多い事です。ユダヤ人の救も神の定め給ふた豫定の數に達しますが、其れは數へ得る數です。異邦人は『誰も數へ盡すこと能はぬ大なる群衆』とあります。之をマタイ傳廿四章廿五章に照し合せて見ても同様の事が考へられます。二十五章卅一節以後に於てイエスの語られた異邦人の審判は其規模が二十四章四十五節より二十五章卅節までの譬喩よりも遙かに大きいではありませんか。少數の信者が大迫害を被つてゐた時代に早くもヨハネはイエスの教訓と神の默示とによつて、全世界から『大なる群衆』の救はれるであら

うことを豫知してゐたのは常人には不可解と深く考へさせられます。

イスラエル人の救は復活のキリストによつて『額に印』されたとあります。此れは先きに申した通り、ユダヤ人たるが故でなく、信仰によりキリストの御所有になつた者だけが救はれるのです。異邦人の『大群衆』は『白き衣を纏ひ、手に櫻欄の葉もちて』ゐます。此れは假廬の祝祭を意味します。ユダヤ人の最も楽しい祝日です。またイエスのエルサレム入城の時を思ひ出させます。ホザナの歡呼、救はれたる者の無上の歡喜を現はすものです。

『白き衣』については第十四節以下に説明があります。

「かれらは大なる患難より出で來り、羔羊の血に己が衣を洗ひて白くしたる者なり、この故に神の御座の前にありて晝も夜も其の聖所にて神に事ふ。御座に坐し給ふ者は彼らの上に幕屋を張り給ふ可し。彼らは重ねて飢ゑず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。御座の前に在す羔羊は彼らを牧して生命の水に導き、神は彼らの目より凡ての涙を拭ひ給ふべければ也」

とあります。悔改と信仰です。自分の力で白衣を作つたのでなく、主の血に洗はれて白くなつたのです。併し之を成就するまでには多大の苦痛を忍ばねばなりません。『大なる患難より出で來り』とあります。此の『大なる患難』の文字に就いては二種の解釋があります。一は世の終末に於ける

『大患難時代』であると解する説です。此説に従へば御再臨の前に全世界的な、特種の『大患難時代』が来ると考へる人達です。彼らの中には今日のやうな世界の行詰は此の『大患難時代』に入つたものと見る可きだと言ふ人もあり、又は此の『大患難時代』とは第六の封印のところに書いてあるやうな眞の苦難のみの時代を指すので、キリストを信する者は此の大患難には遭遇しないのである、だから此處にも『大なる患難より出で』とあつて、大患難にあづからぬ事を意味する、と解する人もあります。併し通常は此れを特定の『大患難時代』とは解釋せず、キリストの教會又は信者の生活は初代から世の終末に至るまで悉く『大なる患難』の中にあるもので、信仰の道を本當に守らんとする者は誰でも『大なる患難』を経ねばならぬ事を指したのだと解釋してゐるやうです。私としては此の兩説とも棄つべきものではないと考へてゐます。即ちキリスト教會及びキリスト者の生活は患難の生活であるに相違ないが、全世界的に見ても此の患難は次第に増大して御再臨が近くに従つて『大なる患難』が加つてくるものではないでせうか。特に『大患難時代』と稱すべきものがあるか否かは別として。

兎に角、大なる患難を経てキリストの血によつて潔められた者は『白衣』を着せられるのです。申すまでもなく一點の罪までも洗ひ落されて全き聖者となるのです。其の祝福は『重て飢ゑ

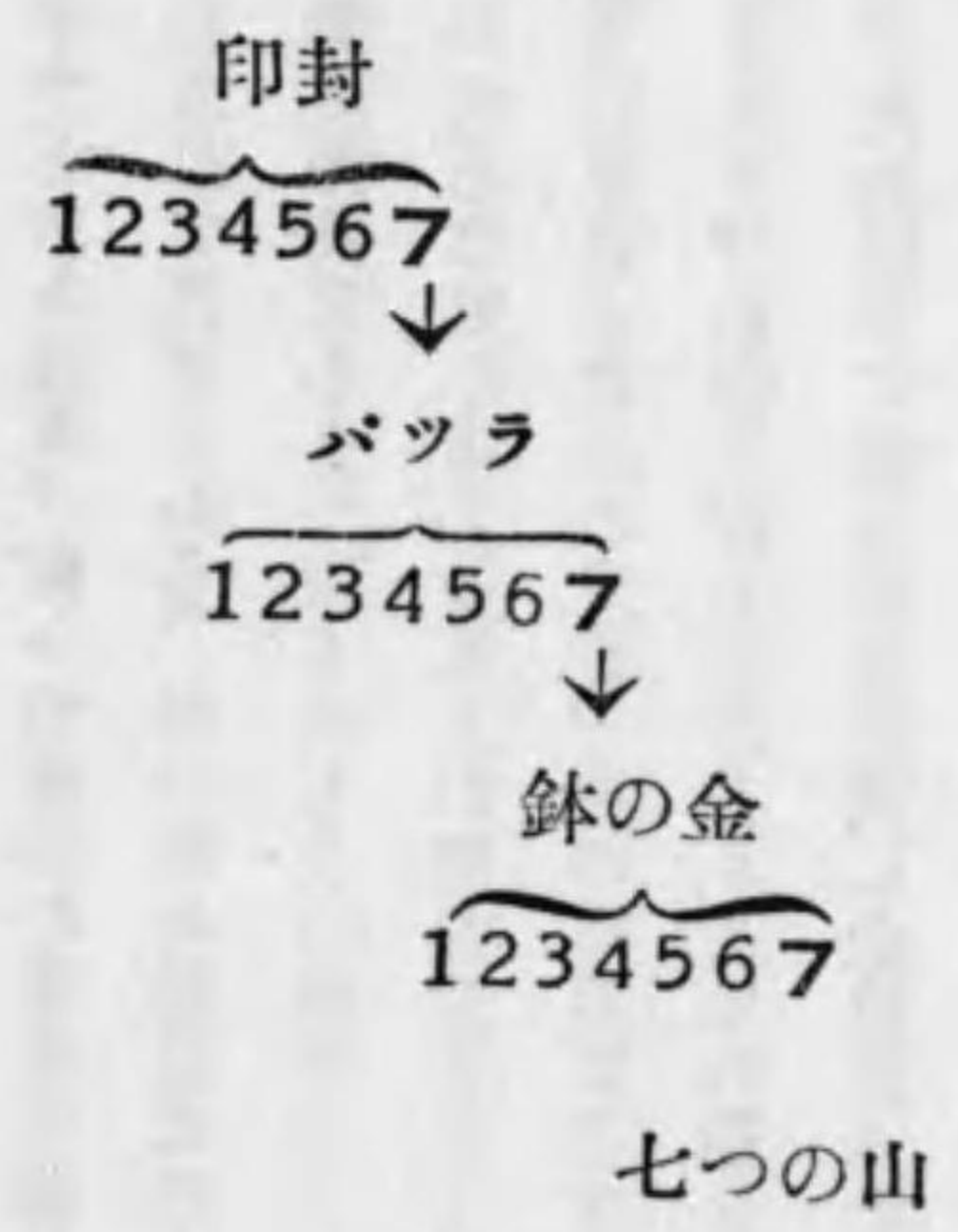
ず、渴かず』とある通り、何一つ我らの要求の満足されぬことは無いのです。勿論我らの要求其物が悉く淨化されてゐますから、神の好み給はぬ我らの要求などは、起り得ないのです。而して我らは『神の御座の前にありて晝も夜もその聖所にて神に事ふること』に於て最高の歡喜を見出すのです。今日の我らは神に事ふることが努力であり、苦痛をさへ感じますが、彼の時にはそれが最大の幸福、最大の歡喜となるのです。神の爲めに勞することが休息となり慰安となり幸福となる時が來るのであります。『神は彼らの目より凡ての涙を拭ひ給ふ』ので、苦痛や悲哀は全く忘れられてしまひます。此れは單に個人の靈が天に救はれるのとちがつて、全世界の救はるべき者の救が完成する時であります。

第八章一一五 (第七封印)

「第七の封印を解き給ひたれば凡そ半時の間、天靜かなりき。われ神の前に立てる七人の御使を見たり。彼らは七つのラツバを與へられたり」(八ノ一、二)

ヨハネの見た異象は次第に進展して第一封印から第六封印まで開封されたのです。第七封印で世界の終末の異象が示されるのかと思ふと、さうではありません。第七封印は世界の終末期に入つた事を示すものですが、終末其物はまだ來りません。第六封印の恐ろしい光景に比べて第七封印は反つて

静穏です。併し此の静けさは嵐の前の静けさです。片唾を吞んで恐怖の前進し来るのを待つてゐる静けさです。之を神の方面から見ると審判前の最後の猶豫です。此處で一言申さねばならぬのは本書の構造に就いてです。それは先きに『本書の構造』と題して書きましたが、其内でも『七つの封印』と『七つのラツバ』と『七つの金の鉢』との相互的關係を今一度詳説したいと思ひます。第一に記憶すべきは七つの封印を解封するのが本書の眼目である点です。而して『七つのラツバ』は第七番目の封印の内容であり、七つの鉢は第七番目のラツバの内容である点です。圖解すれば左の如くです。



圖の如く
 第七番目の封印からラツバが出で、
 第七番目のラツバから金の鉢が出ます。
 七つの山は金の鉢の第七番目からでなく
 七天使の中の一人が示して居ります。その理由はわかりません。

右の如く封印もラツバも第七番目が扇のやうに開いて行くのです。で、第七番目の鉢が傾けられて後『七つの山』即ちバビロンなる大淫婦(俗化せる文明)の刑罰があり、最後に新天新地が展開するのです。世界は終末が来らんとしては、新たに展開し、また終末が来らんとしてはまた新しく展開しつゝ、次第に終末的色彩が濃くなつて行き、罪惡の進展につれて神の審判の色も濃厚となり、遂に大なる事變が起つて今の世界は幕を閉ぢるのです。それは御再臨と大審判とであります。終末に近づくにつれて神の御審判は、處罰の意味が濃厚となつて行く事をヨハネは『封印』と『ラツバ』と『鉢』とで示してゐます。『封印』は隠す性質のもので、此の時は神の審判もまだ左程に現著ではありません。『ラツバ』は大聲を發すると同時に戦闘の記號です。此の時は審判の色が濃厚になります。『鉢』は其の内容を飲ませる爲めであつて、耳に響くよりも一層現實に體驗させられるのです。

本章に入つて第七の封印が開かれ、其の内容である七つのラツバが吹き始められます。ラツバは『神の前に立てる七人の御使』によつて吹かれるのです。トピット書(舊約經典外の古書)十二ノ十五によると彼らは神に最も近く侍する天使長であると言はれてゐます。審判は最も慎重に取扱はれる事を示します。彼らはラツバを興へられましたが、まだ吹き始めません。其前に莊嚴な祈禱が

献げられます。即ち

「また他の一人の御使、金の香爐を持ち來りて祭壇の前に立ち多くの香を與へられたり。これは凡ての聖徒の祈に加へて御座の前なる金の香壇の上に献げんがため也。而して香の煙、御使の手より聖徒たちの祈と共に神の前に上れり。御使その香爐をとり之に祭壇の火を盛りて地に投げたれば數多の雷霆と電光とまた地震おこれり」(八ノ三、四、五)

此の天使を、仲保者として執成しの祈を献ぐるキリストであると解釋する人もあるが、其の必要はないでせう。たゞ人間の祈を助成する祈が天にても献げられつつある意味を示してゐる事だけは確實です。或は人間の祈を助けて祈る事を専門の役目としてゐる天使があると解釋しても大して悪い事はありません。但しカトリックで言ふやうに、其の天使やマリアなどに祈禱を捧げ援助を求めるといふに至つては屋上屋を架するの類で、イエスキリストの御執成を不要ならしむるわけで、結局天使やマリアを崇拜するに至る危険があります。それよりも茲に眞の祈禱は神から與へられるものであるといふ事實をヨハネが言明してゐるのは興味深い事です。此の祈禱専門の天使ですら「金の香爐を持ち來り、祭壇の前に立ち」ますが「香」其物、即ち祈禱其物は「與へられたり」と書いてあります。天使ですら祈禱の準備を爲すことは出来るが「祈る」ことは神から與へられなければ

出来ぬわけです。「祭壇」とは舊約の神殿中の聖所にある「香壇」であります。贖罪の日と稱する一年一度の大祭日に大祭司は香を携へて此の聖所に入り、全國民の贖罪の爲めに香をたくのです。ヨハネは其の儀式に則つて示された眞理を赤裸々にして我らに見せてゐるのです。我らの祈は贖罪の血の賜物である、即ちキリストの血によれる罪の赦の上に立脚するものである事を教へてくれます。と同時に、斯る祈こそ神の前に香ばしいものである事や、天上でも我らの祈に加勢してくれる者のある事や、神御自身が「多くの香」を與へて下さる事などが明かにされて我らの祈を勵ましてくれます。

然るに此の祈の結果は實に意外です。「數多の雷霆と聲と電光とまた地震」とであります。勿論此の「聲」は審判の聲で、雷霆電光地震は其の恐る可き光景を示すものです。何故に祈禱の結果は此くも恐ろしい事になつたのでせう。それは明白です。此れは第七の封印即ち審判の時代となつてゐるからです。「今は恵みの時、今は救の時なり」(コリント後六ノ二)と言はれてゐる通り今日は福音時代です。しかし福音を提供される時代が過ぎ去れば審判の時が來ます。救の爲の祈は、悔改めざる者に對しては審判を招來する祈になつてしまふのであります。

第三異象 七つのラツバ

第八章六一三 (第一ラツバより第四ラツバ)

「こゝに七つのラツバをもてる七人の御使これを吹く備をなせり」(六節)

神が審判を爲して天罰を下さんとするや用意は極めて周到です。充分にも十二分にも用意し給ひます。『備を爲せり』とは七つの天使らの慎重な態度を示します。神は出来るだけ待ち給ひます。それでも悔改めぬときは福音の時代を締切となさるのです。此時神の恐る可き審判は頭上に落下して來ます。何人も之を避けること能はず、何物も之を遮ること能はずであります。

「第一のラツバを吹きしに血の混りたる雹と火とありて地にふりくだり、三分の一、焼け失せ、樹の三分の一、焼け失せ諸の青草焼け失せたり。第二の御使ラツバを吹きしに火にて燃ゆる大なる山の如きもの海に投げ入れられ、海の三分の一、血に變じ、海の中の造られたる生命ある者の三分の一死に、船の三分の一滅びたり。第三の御使ラツバを吹きしに燈火の如く燃ゆる大なる星、天より墮ち來り、川の三分の一と水の源泉の上に墮ちたり。此の星の名は苦艾といふ。水の三分の一は苦艾となり、水の苦くなりしに因りて多くの人死にたり。第四の御使ラツバを吹きしに日の三分の一と月の三分の一と撃たれて其の三分の一は暗くなり、晝も三分の一は光なく夜も亦おなじ」(八ノ七一十二)

先きの圖解で示した通り第七封印の内容が逐次現はれて來たのです。換言すれば第六封印に於て天地に大異變が起りつゝある其の光景の連続であり發展であります。第一のラツバから第四のラツバまで息もつかせず同じやうな天變地異が相接して起つてくるのは、第一封印から第四封印まで息もつかせず同じやうな異象が起つてくると同じ行き方です。而して第五封印以下に於て特に力を込めて特殊の異象が示されてある如く、第五ラツバ以下が特殊の重大な豫言を形成してゐます。七つの金の鉢についても同じ事が言へます。第五鉢以下が重大な默示であるのです。第一のラツバから第四のラツバまでを通覧しますと其れは悉く自然界を撃つところの災でありまして直接に人間を撃つては居りません。第五以下は一直線に人間をめぐけて迫つて來ます。此の區別を一層ハッキリさせるため神はヨハネに第四ラツバと第五ラツバとの間に十三節の『鷲』を示して

『また見しに一つの鷲の中空を飛び大なる聲して言ふを聞げり、曰く「地に住める者どもは禍なるかな禍なるかな禍なるかな」、尙ほ他に三人の御使の吹かんとするラツバの聲あるに因りてなり』

と『禍なるかな』を三度も繰返して注意してゐます。本書の研究者が此の三天使を『禍の天使』と名づけるのも無理はないと思はれるほど恐ろしい光景が展開されます。

先づ第一ラツバから第四ラツバまでに就いて述べませう。前に申した通り此らの禍は直接には自

然界を撃つだけです。しかもそれは三分の一に過ぎないのです。此の大體の意味は誰にも明白です。世の終末に近づいて神が禍災を下し給ふことは次第に頻繁になつて來ますが、未だ全く刑罰的のものでなく、悔改せしめんための御恵みが混つてゐる事を示すのです。此らの災害はいづれもエチプトを撃つた十災を思ひ出させるものが多いですが、エチプトのものよりも遙かに恐ろしい光景です。『血の混りたる雹』とか『燃ゆる大なる山の如きもの』とか、『燃ゆる大なる星』とか言ふのは實物を指したのであるか、或は第一封印から第四封印までと同じく何かの象徴であるかは不明ですが、恐る可き天變地異が相ついで起り、全地の『三分の一』と言ふほどの大部分が之によつて破壊される事を指すだけは明かです。此らの異象を象徴的に解釋する例を擧ぐれば、第一ラツバの『地の三分の一焼け失せ』とは俗化の教會の上に降る審判であり、『樹の三分の一焼け失せ』とは人間の食料品が多大の損害を受けることで、『諸の草が焼け失せる』とは牛馬の食物が全滅すること、又第二ラツバの『海』とは教會外の世間を指すので『火にて燃ゆる山の如きもの』即ち山のやうに大きい火の塊が海に投げられて海の三分の一が血に變じたと言ふのは此世の勢力其れ自身によつて此世が部分的に滅ぼされる事で、『船三分の一滅びたり』とあるのは交通機關の大障害の起る事であり、又第三ラツバの『燈火の如く燃ゆる大なる星』は人を惑はす偽教師で、之が爲めに『多くの

人死にたり』とは心靈的の死を指し、第四ラツバの日、月、星の三分の一暗くなるとは人の智慧が行詰つて暗夜を歩むやうになることを示し、また水の源泉に隕ちた大なる星『苦艾』によつて水の三分一は苦くなり多くの人が死んだと言ふのはアルコールを含んだ酒で生命を無くするのだと説明するが如きです。いづれも巧妙な説明ですが、コヂツケである事は誰でも直ちに感ずるでせう。此らの異象の一つ一つを何らかの心靈的意味に解釋しやうとする事は大體失敗だと思はれます。但し『血』といふ文字が幾度も用ひられたことによつて殉教者の血が報ひられ、神の審判として『多くの人 死にたり』などある事によつて、此ら自然界に起る災害のために倒れる人が多數あるであらうことが末世の一現象として預言されてゐるだけは確實でせう。

以上の四つの災害は恐ろしいものではあるが以下の三つの災害の序曲に過ぎないものです。眞の厄災は第五からである事を宣言する爲めに『一つの鷲が中空を飛び大なる聲して』『禍！禍！禍！』と叫び出しました（第十五節）。『鷲』は猛鳥で餌を見つけた時に恐ろしい勢で襲ひます。恐る可き神の審判の來らんとする報告者として適當です。之を『天使』と譯し又は天使と解釋する人がありますが、私はアエトス即ち『鷲』と讀み且つ文字通りに解釋するのがよろしいと思ひます。イエスの『死骸のある所には鷲あつまらん』（マタイ廿四ノ廿八）との語も思ひ出されて妙味があ

ります。「鷲」とは「秃鷹」のことでもあります。

此の鳥が『中空』を飛んでゐるとあるのは天と地との中央といふ意味ではなく、天の中央と言ふ意味で、凡ての人に見られる最も都合のいゝ所です。『中空を飛び』且つ『大なる聲』をするので、すから萬人に見られ萬人に聞こえるやうに叫んでゐる様子を示したものです。つまり第五以下のラツバの災害を出来るだけ物々しく豫告してゐるわけです。

第九章 (第五第六ラツバ)

『第五の御使ラツバを吹きしに我一つの星の天より地に墮ちたるを見たり。此星は底なき坑の鍵を與へられたり』(九ノ一)

元譯の『天より地に墮ちたる一つの星を見たり』がよろしい。此時に墮ちたのでなく、既に墮ちてゐたのです。原語はそれを明かにしてゐます。此れは言ふまでもなくサタンです。ルカ傳十章十八節にイエスが『われ天より閃く電火の如くサタンの落ちし見たり』と言はれたとの同じものです。墮ちた時の様子は本書十二章七節以下に詳説されてゐます。イザヤ書十四章十二節にも『あしたの子よ、明星よ、いかにして天より墮ちしや』とある如く、天使が墮ちてサタンとなつたといふ思想は聖書の思想です。ミルトンの創意ではありません。ミルトンの失樂園に現れた思想は聖書其儘の

ものが多いです。聖書によつて見てもサタンは神に反逆し神の位を奪はんとする者のやうに書いてあります。此所でもサタンは星であります。此れはキリストが『輝ける曙の明星』(黙廿二ノ十六)であり給ふことに對立する立派なものです。また『此星は底なき坑の鍵を與へられ』とあるのはキリストが『死と陰府との鍵をもてり』(黙一ノ十八)とあるのに對立して居ります。黙示録は何處までもサタンを平の將門の如く擬王國の君主として、擬キリストとして示されてゐます。而して其の大本營は『底なき坑』であります。サタンと其の一族は天から墮ちて『底なき坑』に巢喰つてゐるのです(本章一ヨリ十一、廿章一ヨリ三。十一章七、十七章八)。どういふ神の深慮か私共にはわかりませんが、彼には『底なき坑』を開いて地上に出て來ることの出来るやうに『鍵』が與へられてゐるといふのです。悪魔の棲家と此の地上とは絶縁されてはゐません。悲しくも自由な聯絡があるのです。彼所と地上との交通は末世となるに従つて益々頻繁になつて來ます。勿論此れも神の御審判の一方面としてサタンが地上に働くことが許されるのです。罪の無い所にはサタンと雖も働くことを許されません。罪はサタンを招き、サタンは人に罪を犯させ、加速度を以て地獄に轉落して行くことになるのです。楮て此の異象で見たサタンの働きは怎んな事であるかと言へば

『斯くて底なき坑を開きたれば大なる爐の煙の如き煙、坑より立ちのぼり日も空も坑の煙にて暗くなれり。煙

の中より蝗、地上に出でて地の蝸のもてる力の如き力を與へられ、地の草すべての青きもの又すべての樹を害ふことなく、たゞ額に印なき人のみ害ふことを命ぜられたり。されど殺すことを許されず五月の間苦しむることを許さる。その苦痛は蝸に刺されたる苦痛の如し。此の人々死を求むとも見出さず、死なんと欲するとも死は逃げ去る可し」(九ノ二——六)

此れも神の王國に似せた擬王國の状態であります。サタンは如何にして神と其王國に代るべき自分の王國を建設せんかと苦心して居ります。神の王國に於ては祈こそ『香の煙』(黙八ノ三、四)であつて祭壇の上より『神の前に上り』行くのです。サタンの王國にもかゝる『煙』が必要であります。即ち本章二節の『底なき坑を開きたれば大なる爐の煙の如き煙、坑より立ちのぼり』ます。祈が香の煙の如く清らかに細く高く立ちのぼるに反して、底なき坑の煙は濛々として低く擴がりつゝ、地を掩ふて來ます。私は數年前から此處を讀むごとに現代を指した豫言であるかの如く考へられてならないのです。現代ほど『底なき坑より立ちのぼる煙』の爲めに世界の思想の混亂してゐる時代は未だ曾つて無かつたやうです。現代は罪惡横行の時代ではありません。思想といふものが全く毒煙の中に彷徨つてゐるのです。善が善でなく惡が惡でなく、善惡とか正邪とかの區別は全く煙の中に没してゐます。赤い思想の如きは其の先頭に立つて、神の觀念を否定し、所有の觀念を否定し、

貞操の觀念を否定し、鬭争や破壊や強奪や姦淫は新道德の名に於て是認されてゐます。新道德といふのは假面であつて實は不道德であります。自己の充實とか、本能の満足とか、新經濟機構の原理とか、種々の美名をつけて不道德を道德と呼ぶのです。善と惡とに反對の名をつけてサタンの擬王國を建設せんとして用ゆる煙幕は今や全地に擴がつてゐます。ヨハネの見た通り『日も空も坑の煙の爲めに暗くなれり』であります。私の若い頃に尊敬してゐた一人の宣教師は最近米國から再び日本に來て、本國の青年男女の思想も品行も全く變つてゐる事を語り、私が慨嘆したのに對し彼は笑つて言ふ『どうも仕方がない。彼らは變つて行く、我々老人は老人の道を行かう。彼ら若い者は若い者の道を行んだらよからう』と其の態度の餘りにも平氣であるのに私は驚きました。私は之を單なる思想の變遷として受取るわけには行きません。御覽なさい、米國の有力な一雜誌は堂々と、結婚前の試験的性交 (Experimental promiscuity before marriage) を推奨してゐるではありませんか。此れをしも單なる思想の變遷として片附けるならば、我また何をか言はんやであります。現代は實にサタンの煙が底なき坑より上り來り全地に擴がり『日も空も暗く』なつてゐるのだと考へずには居られません。だが、サタンの擬王國は進捗するほど其の惡魔的性質を暴露して來ます。此の煙に酔ひ、甘き夢を貪つてゐる者は禍なるかなであります。『煙の中より蝗』出で來り、蝸の如

き力を以て人を害みます。此の『蝗』が何を意味するかは判然しないとしても、サタンの部下であることだけは第十一節に『この蝗に王あり』とあることによつて明かです。大體黙示録にある災にはエジプト出發のときの十災の中から採用された象徴が多いのですが、蝗の災もエジプト十災中の第八番目に『蝗全國の上を蔽ひければ國暗くなりぬ』とある記事に似てゐます。エジプト全國が暗くなるほどに蝗が現はれたことを思ひ合せてヨハネの蝗も全世界に充ち満ちて居るサタンの萬軍である事が考へられます。たゞエジプトのよりも遙かに恐ろしい超自然的の蝗であります。普通の蝗が木も草も青きものを喰ひ盡して人の食物を奪つてしまふのに反して此の超自然の蝗は草木に觸れず、直ちに人間を襲ふのです。死ぬるよりも苦しい大苦痛を以て人を苦しめるのです。但しそれは第七章に記された『額に神の印なき人をのみ害ふ』とありますから神を信する者に觸れる事は出來ぬのです。しかも『五月の間』と制限されてゐます。勿論文字通りの五ヶ月ではありますまい。神のみ知り給ふ或る一定の不完全數でありませう。

第七節以下に『かの蝗の形』が記されてゐますからそれによつて其の性質を知ることが出來ます。勿論超自然の靈界のことですから其のつもりで解釋すれば大した間違はあります。先づ『かの蝗は戦争の爲めに具へたる馬の如く』と言ひ「また鐵の胸當むねあての如き胸當あり、其の翼の音

は軍車の轟く如く、多くの馬の戦闘に驅せ行くが如し』とありますから彼らが如何に戰鬥的であるかが窺はれ、『頭上は金に似たる冠冕の如きものあり』とある事によつて僭越にも自ら高ふして王とならんとする傲慢な性質を示し、『顔は人の顔の如く、之に女の頭髮の如き頭髮あり、齒は獅子の齒の如し』との形容によつて、人間の叡智と獅子の殘虐をもちながら外觀は婦女の柔かい魅力を有してゐることがわかります。併し最も恐る可きは其の蝸の如き尾であつて頗る有毒な刺を具へてゐる點です。しかも彼らは散漫な働きをするのでなく『この蝗に王あり』で立派な統一を維持してゐるのです。其の王の名は『アバドン』即ち『滅亡』であります。ギリシヤ語のアポロンも同じく滅亡の意ですから、結局サタンを指したのでせう。而して『蝗』は此のアバドン（滅亡）王國の軍隊であります。スターリンを思はせるものがあります。

「第一の禍害すぎ去れり、視よ此の後なほ二つの禍害きたらん。第六の御使ラツバを吹きしに、神の前なる金の香爐の四つの角より聲ありて、ラツバを持てる第六の御使に「大なるユウフラテ河の邊に繋がれ居る四人の御使を解き放て」と言ふを聞けり」（黙九ノ十二—十四）

神の御支配は世の終に近づくに従つて次第に審判的色彩が濃厚となり、第一の禍害、第二、第三の禍害と重疊は愈々全世界に加はつて來ます。併し惡を罰するに惡を用ゐ、惡自身の力で惡が減びる

やうになし給ふのが大體として御審判の方法であります。此れは神は愛であり給ふから、なる可く刑罰の爲めに御手を下し度くないのです。舊約の歴史を讀んで見ても之れが明かに感ぜられます。イスラエルを罰するにアツスリアを用ひ、ユダを懲しめるにバビロニアを用ひ、バビロニアを滅すにメド・ベルシヤを用ひたるが如きであります。

第六のラツバを吹いたときに『神の前なる金の香壇の四つの角より聲あり』とあります。『四つの角』は香壇の四隅に突出した『角』で、其の力を示すものです。此れは第六章十節と第八章三節とに記されてある聖徒等の祈りの御答の『聲』です。第六章には『祭壇の下』で殉教者が祈つて居り、第八章には『金の香壇の上』に祈が献げられてゐます。いづれも神の義しき審判を待つ祈です。其の祈が今や第六のラツバと同時に答へられ始めたのであります。併し未だ最後の大審判ではありません。十五節に『人の三分の一を殺さんために備へられ』とある通り、部分的の、しかし可なり大規模の審判です。此の審判に用ゐられる道具は『大なるユウフラテ河の邊に繋がれ居る四人の御使』であります。惡の天使を用ひて惡を罰し給ふのです。此れを善き天使と解釋するのは怎う考へても誤りです。『繋がれ居る』といふ事だけでも惡しき天使である事は明かです。加之、『四』は地の數で『六』と共に屢々『三』や『七』といふ天の數の反對數として用ひられてゐます。『大河ユウフラ』

テ』は、神の『生命の河』に對立する惡魔の擬王國の『滅亡の河』の象徴でせう。私が諸學者の説を排して此の如き私見を提供するのは僭越であるとも思はれますが、古來ユウフラテ河を神の民に敵する勢力の象徴として居る例は舊約書にあるのです。例せばイザヤ書第八章六節―八節に『この民はゆるやかに流るゝシロアの水』(即ち神の都の水です)をすてゝレヂンとレマリヤの子とを喜ぶ。此によりて主はいきほひ猛く漲り亘る大河(即ちユウフラテです)の水を彼らのうへに堰入れ給はん。是はアツスリヤ王と其の諸の威勢(即ち軍隊です)とにして……ユダに流れ入り溢れひろがりて項^{ユダ}にまで及ばん』とあります。かく神の河と異邦の河とを對立させてあります。又詩篇第四十六篇にも『よしその水は鳴り轟きて騒ぐとも、その溢れ來るによりて山はゆるぐとも何かあらん、河あり、其の流れは神の都を喜ばしむ』と歌つて、異邦の軍勢を大河の溢るに比し、神の都には靜かな河があると言つて、神の御保護は靜に流れて而かも絶えざる飲料を供給する恩寵であることを讚美してゐます。本書にも、來るべき新天地には『御使また水晶の如く透徹^{すまは}れる生命の水の河を我に見せたり……』(默廿二ノ一)との語があります。されば此の『ユウフラテ河』は『生命の河』の反對に滅亡の流れの泉源と解してよいでせう。此處から何が流れ出るかは想像するに難くありません。『かくてその時、その日、その月、その年に至りて人の三分の一を殺さん爲めに備へたる四人の御使は解き放』

たれたり。騎馬の数は二億なり、我その數を聞けり。われ幻影にてその馬と之に乗る者を見しに彼らは火、煙、硫黄の色したる胸當を著く。馬の頭は獅子の頭の如くにて、その口より火と煙と硫黄と出づ。この三つの苦痛、即ち其の口より出づる火と煙と硫黄とに因りて人の三分の一、殺されたり。馬の力は其口とその尾とにあり、その尾は蛇の如くにして頭あり、之をもて人を害ふ也」

サタンの擬王國の『生命の河』即ち『滅亡の河』より流れ来るものは神の國の河邊に生ずる『諸國民を醫す生命の樹』（黙廿二ノ二）の反對に『人の三分の一を殺す』『火と煙と硫黄』の軍勢であります。されば第六のラツバの時代に生ずる第二の禍害は大戦争です。第五のラツバに於て私共は『底無き坑より上り来る煙と蝗』との異象に於て世界の思想界が全く混迷に陥る豫言である事を見ました。而してそれが現時代に相當してゐると申しました。次に来る世界的災害は更らに一步を進めて大戦争であります。第五のラツバの禍害によつては人が死にませんでした、今回は全人類の『三分の一』までも死にます。しかも此の戦争は地獄的の惨虐を極めたものであります。誰でも知つてゐる通りヨハネ時代には未だ火薬煙硝の發明はありませんでしたから普通の戦争は『劍』とか『鎗』とか言ふ形容語で現はされてゐます。例せば本書六章四節に戦争の象徴として『大なる劍を與へられたり』とあります。然るに此處に書いてある『騎兵』は何らの武器も持たず『その口より

火と煙と硫黄出づ』とあります。言ふまでもなく『火と煙と硫黄』は地獄を形容するとき用ゆる語です。此の戦争の如何に地獄的であるかを言ふのです。が、偶然にも現代の戦争、否、寧ろ次回に起らんとする世界戦争は主として『火と煙と硫黄』でありませう。火薬が主として用ゐられるのは勿論、毒瓦斯や毒液體でありませう。而して戦闘員非戦闘の區別なく殺戮されませう。此の豫言の通り人類の『三分の一』といふほどの大多數が殺されるでせう。斯く申しますが、此の豫言は決して目に見ゆる大戦争を直接に指しただけではありません。靈界に於けるサタンの軍勢の大活動を指したのであります。ですから此の『騎兵』は見ざるサタンの兵であります。其の『數は二億なり。我その數を聞けり』とあるのは神を信する者にとつて慰めの語であると私は潜に解釋してゐます。神の軍勢は無限です。サタンの軍勢は人間が考へ得るところの最大多數ですが、有限です。有限である點をハッキリと聞いたと言ふのでせう（此れも私解で甚だ僭越かも知れません）。次に解釋に困難を感じるのは『馬』です。『頭は獅子の頭の如く』とあるのは其の力と殘虐性を示すと解されますが、『馬の力はその口と尾とにあり。その尾は蛇の如くにして頭あり、之をもて人を害ふ也』とあるのは、参考書を見ても、又いくら考へても私には全く解りません。勿論其の惡魔的性質を示した事はわかりませんが、前段の『蝗』にも『この尾に五月の間、人を害ふ力あり』（九ノ十）

とありますし、何故『尾』が斯くも高調されるのか解りかねます。サタンの王國の軍勢は『蝗』も『馬』も『尾』に特別の力があるとは或は其の獸的性質又は性的罪惡の力の強さを現はしたのであるかと思ふぐらいの事です。兎に角恐るべき惡魔の力の現れです。此くの如く惡を以て惡を罰し給ふ此の恐ろしい審判が來ましても全人類は悔改めません。

「これらの苦痛にて殺されざりし残りの人々は己が手の業を悔改めずしてなほ惡鬼を拜し偶像を拜せり。また殺人、呪術淫行、竊盜を悔改めざりき」(九ノ廿、廿)

廣い意味で、神を拜せざる者は「己が手の業」を拜する者です。自己を崇拜する者です。自己崇拜は偶像崇拜です。惡鬼崇拜です。サタンと同じ心を以て天地の神を拒否するのです。かゝる人に眞の道德のあるわけがありません。結局は「殺人、呪術、淫行、盜竊」を行ふ輩であります。世の終の近づくにつれて世界は自ら改善するとは考へられないのが本當でせう。主イエスキリストを外にして、世の救は來らないのです。

二つの挿話(其一)

(第十章七つの雷)

七つのラツバの中、六つまで吹き鳴らされました。が、第七が吹き鳴らされる前に此處で第十章

と十一章とに二つの異象が挿まれてゐます。これは七つの封印のときと同じです。第六の封印が開かれて、將に第七の封印が開かれんとするに當つて第七章が挿話として挿まれてゐると同じ形式です。

七つの封印も七つのラツバも七つの鉢も神が此世を審判し給ふ方面を書いてゐるのですが、其間に織り込まれて福音を受けた者の状態が少しだけ示されてゐます。ですから本書は大體として暗い恐ろしい光景ですが、其中に福音の光が時々チラと見せられるのです。それが挿話の形で書かれてゐます。第七章もそれでした。第十章もそれです。ですが

第十章は主としてヨハネ自身だけに關してゐます。第九章までに於てヨハネは異象を見てゐただけですが、第十章に於て始めて自分が異象中に於て行動します。異象の傍觀者でなく、自ら登場して或る役割を演ずるのです。

「我また一人の強き御使の雲を著て天より降るを見たり。その頭の上に虹あり、その顔は日の如く、その足は火の柱の如し」(十ノ二)

第一章で見た主イエスによく肖てゐますが、主御自身ではありません。種々研究の結果、私は第五章二節の『強き御使』と同じ天使であると思ひます。いづれの場合も『卷物』と稱する重大な神の

御計畫に關する特別な使命を帯びて居り、神の「強さ」を代表する役目を持つてゐます。私は此の天使はガブリエルであると考へます。ガブリエルとは『神の強き人』といふ意味ですから『強き天使』に相當するのみでなく、此の天使はメシア即ち救世主に關して特に使命を持つてゐます。ダニエル書に二回（八ノ十六、九ノ廿一）現はれてゐますが二回ともメシアの出現に關する異象に於てです。次にルカ傳に二回（一ノ十九、廿六）見えてゐますが、イエスの先驅者たるバプテスマのヨハネの誕生と主イエスの御誕生とに就いて遣はされてゐます。而して本章は再び福音についての使命をヨハネに齎してゐます。黙示録の講解から外れますが、茲で一吋天使について一言したいと存じます。現代では天使と言へば一般に架空的な存在のやうに考へられてゐます。然らずとするも有無の定かならぬ極めてボンヤリしたものに考へられてゐます。神の存在や靈魂の存在さへ一種の假定に考へる言者（？）の多數である今日、天使や惡魔の存在の冷笑されるのも無理ではありません。まいが、聖書によれば天使も惡魔も儼然たる實在です。「御使」（即ち天使）の語は舊約書に約百八回、新約書に約百六十五回用ゐられてゐます。天使は人間以上の存在者で、キリストすら地上に居り給ひし間は「御使よりも少しく卑くせられしイエス」（ヘブル書二ノ九）と言はれてゐる程に尊い者です。其の數は『千萬の御使の集會』（ヘブル十二ノ二十）とありますが、此の『千萬』は

無數と譯して差支へない字で、マタイ傳二十六章五十三節にはイエス御自身の「十二軍に餘ある御使」の御言葉を以て現はされてゐます。此の「十二軍」との御言葉の中には、天使等が統一を有する隊伍に編制されてゐるとの意味もあるやうです。勿論彼らは人間のやうな方法で繁殖しないのです。イエスは「それ人の甦りの時は娶らず嫁かず天にある御使たちの如し」（マタイ傳二十二ノ三十）と言つて居られます。其の代りに天使の死といふ事はなく、墮落した天使たちは「惡魔とその使らのために備へられたる永久の火に入る」（マタイ傳二十五ノ四十一）のです。右の外にも主イエスは徹頭徹尾、天使の存在を言明して居られます。（例、マルコ傳八ノ三十八、十三ノ二十七、其他枚擧に遑あらず）。我らが毎日獻げる主の祈にも既定の事實として含まれてゐます。「御國（直譯すれば汝の王國）を來らせ給へ。御意の天に成る如く地にもならせ給へ」の語でさへも、天に神の王國のあることを暗示してゐるではありませんか。若し人間以外に神の臣民が無かつたならば此の祈は意義を爲さぬでせう。それはアダム以來昇天した人の國だとのみ解釋するのは常識に外れるでせう。若しサウだとすればアダムが死んだときに始めて天國の住民がタツタ一人出來たわけになるでせう。「御意の天に成るが如く」の語を、天使たちが聖意を常に遵奉してゐる事を指すと見て意義が鮮明になると思ひます。

偕て本論に歸りまして、此のガブリエルは茲でキリストの代理者として現はれてゐます。第一に『雲を着て』ゐます。『雲』は神の神秘を示すと共に目映い御榮光を緩和するものです。又『その頭の上に虹』があります。『虹』はノアの洪水の後に恩恵のしるしとして現れ、又本書四章三節にも神の玉座の周圍に『綠玉の如き虹あり』と言つて御慈悲の深きを示してゐます。されば此天使はキリストの福音の使者として現れたのです。尤も本書の眼目であるキリストの審判の方面をも備へてゐます。即ち『その顔は日の如く、その足は火の柱の如し』とあります（本書一ノ十四、五及び其の講解参照）。さて此の天使は

『その手には展きたる小き巻物もち、右の足を海の上におき、左の足を地の上におき、獅子の吼ゆる如く大聲に呼ばはれり』（十ノ二、三）

此の『小き巻物』が何であるかに就いては諸説紛々としてゐますが、私はキリストの福音あると斷言してよいと思ひます。之を第五章の封印せられたる巻物の一部分と解するが如きは錯覺も亦甚しいです。第五章のは『封印』されてゐます。世界の御經營のプログラムは神のみ知り給ふのです。が、此の『小き巻物』は『展きたる』ものです。即ち少しの秘密もなく公開されたものです。しかも第十節にヨハネが食べてしまつたものです。ヨハネがキリストの代理者から頂いて食べてしま

つたものはキリストの御血と御肉でせう。即ちキリストの福音であります。此れは誰にでも公開されたものであり、又『小き巻物』に十分に書かれ得ます。小さいにも拘らず其の使命は片足を『海の上』に、片足を『地の上』に置く大なる天使の態度にふさはしいものです。即ち世界萬民に示す福音であります。されば此の天使は『大聲に呼ばはれり』ます。福音の叫びを全世界に響かせんが爲めです。

『呼ばはりたるとき七つの雷霆おの／＼聲を出せり。七つの雷霆語りし時、われ書き記さんとせしに天より聲ありて「七つの雷霆の語りしことは封じて書き記すな」と言ふを聞けり』（四節）

此れにも諸説がありますが、わからないのが本當でせう。なぜなれば『天より聲ありて』封じてしまつたのです。併し此れだけは言へるでせう。此れはヨハネ個人への天啓であつて公開すべきものでなかつたのです。ヨハネは主御在世の時に『ボアネルゲ（即ち雷霆の子）』と言ふ名を頂きました（マルコ三ノ十七）。『七つ』とは單に満數の意味です。『雷霆の子』なるヨハネに對して『七つの雷霆』即ち完全な雷霆が何事か彼自身に關する事を示したのだと見ていゝでせう。雷は雷として完成されるのでせう。私は思ひます、一生懸命に一切を献げてキリストに事へやうとする者には、其人にだけ示される、而して他人には語れぬ、特別の御啓示があると。

『斯くて我が見しところの海と地とに跨りて立てる御使は天に向ひて右の手を挙げ、天及び其の中にあるもの……物を造り給ひし世々に限なく生き給ふ者を指し、誓ひて言ふ「この後、時は延ぶることなし。第七の御使の吹かんとするラツバの聲の出づる時に至りて神の僕なる預言者たちに示し給ひし如く其の奥義は成就せらる可し」と』(十ノ五―七)

右の内第七節に重要な改譯を要します。『……神の僕なる預言者たちに示し給ひし如く其の奥義は成就せらるべし』とありますが此の『示し』は甚だ不十分な意譯です。『……神の僕なる預言者たちに福音し給ひし如く其の奥義は成就すべし』と改むべきです『福音する』といふ動詞は日本語では文法に外れてゐるかも知れないが止むを得ません。現譯のまゝで讀むと第七の御使がラツバを吹くときに『成就する』神の奥義は第五第六のラツバの如く恐る可き罰の如く考へられますが『示す』の代りに『福音する』と直譯すれば『神の奥義の成就』とは福音の成就であることが明かとなります。勿論福音の成就する時期は神の審判の時と符合するかも知れませんが直接には福音の祝福を指します。さて此の天使が『右の手を挙げ』神を指して嚴肅に宣誓しつゝ言ふところは何であるかと言へば、それは『この後、時は延ぶることなし』といふことであります。『時』とは何でありませう。要するにそれは『猶豫期間』といふことです。福音の宣傳は神の審判の立場から見れば一種の執行猶豫です。世界は福音の宣傳によつて救はるる者の數の『滿つるまで』刑が執行猶豫され

てゐるのです。第六章十節を見ると、殉教者達は審判の日の來る事の遅いのを神に訴へてゐます。で、此の強き天使が神を指して誓つたのは、福音宣傳によれる刑の執行猶豫期間は決して延長しない、神の定めたる『時に至りて』福音の成就と共に執行せられると言明したのです。此の福音の『奥義』とは何であるかと言へば、第十一章十五節以下が即ちそれでありませう。

「かくて我がさきに天より聞きし聲のまた我に語りて「なんぢ往きて……御使の手にある展きたる巻物をとれ」と言ふを聞けり。われ御使のもとに往きて小さき巻物を我に與へんことを請ひたれば、彼言ふ「これを取りて食ひつくせ、さらば汝の腹苦くならん。されど其の口には蜜の如く甘からん」。われ御使の手より小さき巻物を取りて食ひ盡したれば、口には蜜の如く甘かりしが、食ひし後わが腹は苦くなれり。また或者われに言ふ「なんぢ再び多くの民・國・國語・王たちにつきて預言すべし」(十ノ八―十一)

此の數節を讀んで涙なき人があるでせうか。ヨハネはイエスの福音を『食ひし後、わが腹苦くなれり』と言ひました。殉教的生涯！苦い苦い經驗です。主イエスは御復活の後ガリラヤ湖畔で愛弟子ペテロに『誠に誠に汝に告ぐ、なんぢ若かりし時は自ら帶して欲する所を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ處に連れ行かれん』と言ひ給ふた。ヨハネは之を説明して『これペテロが如何なる死にて神の榮光を顯すかを示して言ひし也』(ヨハネ傳廿一ノ十八―)と

言つてゐます。福音は實に此の如きものです。最初之を信するときには『其口に甘い』です。『凡て
疲れたる者は我に來れ』などの甘い言葉で招き給ひます。が、次第に之を『食ひ盡し』『腹に入
る』頃には『十字架を負ひて我に従へ』との苦い御言葉が響いて來ます。『食ひし後、わが腹は苦
くなれり』と告白したヨハネは怎んな苦しい經驗を嘗めさせられてゐたのでせう。兄弟のヤコブは
疾くに殉教の死を遂げ、親友のペテロも十字架につけられ、自分は老いたる肉體をバトモスの島で
鑛山に勞働させられ、のみならず、日々に迫り來る教會の苦勞心配、あゝ此らの間斷なき苦痛、老
ゆるほど増して來る此の苦き福音、此れを嘗め盡してこそ始めて『多くの民・國・國語・王たちに
つきて預言する』ことが出来るのでせう。否、『預言すべし』の『可し』は『ねばならぬ』といふ
嚴命です。此らの苦痛を忍びつゝ、『預言』即ち傳道せねばならぬのであります。

二つの挿話（其二）

第十一章一—十三（二人の證人）

第十一章は前章に繼いで第一節から十三節まで第二の挿話です。此れは神の教會の地上に於ける
奮闘と苦難と其の運命との預言です。

『爰に、われ杖の如き間竿を與へられたり。斯くて或者いふ、立ちて神の聖所と香壇と其處に拜する者どもを
度れ。聖所の外の庭は差措きて度るな、これは異邦人に委ねられたり。彼らは四十二ヶ月の間聖なる都をふみ
にじらん』(十一ノ一、二)

舊約の神殿は外庭と聖所とに大別されてゐます。此の異象に於てヨハネは神殿の核心を爲す聖所
(原語ナフス)だけを度る可く命ぜられてゐます。ヨハネは舊約の神殿によつてキリストの教會の
有様を見せられました。神殿に聖所と稱して神の在す所のある如く教會にも眞實に神の宿り給ふ信
者もある、併しながら悲しい事には神殿にも外庭のある如く、教會にも外庭信者があつて一向に神
聖な神の御姿を宿してゐない人々もあります。神の與へ給ふ『間竿』によつて度つて頂けるのは聖
所的の信者だけです。『聖所と香壇と其處に拜する者を度れ』と明言してある通り、常に神に近づ
き、絶えず祈を爲し、神を拜む人だけ『度』つて頂けるのです。香壇とは言ふまでもなく、祈の香
の煙を絶やさないことでもあります。第二十一章九節以下に『羔羊の妻なる新婦』即ち理想の教會の
事が記されてありますが、其處にも『金の間竿』を以て測ることが書いてあります。で、此の『度
る』といふのは第四章にあつた『數へる』のと同じく、神の永遠の御所有として『數へ』また『度
る』のであります。言はゞ神の財産目録の中に登録されるのであります。不思議なことではありま

せんか。神の教會は全部が即ち神の御所有ではないのでせうか。ヨハネは明かに否と答へます。神殿は全部が神の宮のやうに見えるけれども、本當に神の在す所は其の聖所のみに限られてゐます。教會は全部が神のもので、あるやうに見えるけれども、眞に神に屬する者は聖所の如く神を宿す人のみである事が此の異象によつて明かにされました。次に『聖所の外の庭は差措きて度るな』とありますが、此の『差措きて度るな』の譯は弱過ぎます。本當は『外に棄て、度るな』と譯すべきです。主イエスが『鹽もし其味を失はゞ外にすてられ』(マタイ五ノ十三)と言ひ、また『外の暗黒に投げいだけ』(マタイ廿二ノ十三)と言ひ給ふたのを思ひ出させる文字です。たゞ『差措きて』を知らぬ顔をしておくと云ふのでなく、斷然放棄する意味であります。外庭信者！。少しも神の奥院に這入つて來ない、又這入らうともしない信者にとつて恐ろしい御言葉であります。イザヤも曾つて、かゝる外庭信者について『汝ら是我に(エホバ)まみえんとて來る。このことを誰が汝らに求めしや、汝らは徒らにわが庭をふむのみなり』(一ノ十二)と言つてゐます。しかし誤つてはいけません。そんなにむづかしいのでは私のやうな薄信な者は到底救はれない、などと考へるのは大なる誤りです。芥種ほどの信仰あれば救はれるのです。が、外庭信者とは結局外庭だけで満足してゐる信者です。私などは到底神の聖所にまで近づいて、神の姿を宿すなどといふ境涯に達しては居り

ません。が、其處に達したいといふ慾求と多少の努力があります。茲に示された外庭信者には其れがないのです。淺薄な外形的な信仰で自己満足して、より深く、より高い信仰に憧憬あこがれする心さへない人です。かやうな信者は『これは、異邦人に委ねられたり』と説明してあります。元譯の『異邦人に與へられたり』の方が直譯でよろしい。中途半端な信者は結局異邦人に與へられてしまふやうになると言ふのです。神とマンモンとに兼ね事へやうとする者は結局マンモンだけに事へることになるのです。私などは神殿の外庭に居る者でせうけれども、聖所に向つて心を走せて居ります。無教會主義の人々が教會の悪い方面を見て教會の一切を貶されるやうですが、ヨハネは此の異象に於て、地上の教會なるものは聖所と外庭とより成立つて居る、刈入の時まで麥と毒麥と並び生じてゐる、といふ事實を認めてゐるのです。しかも『彼ら(異邦人)は四十二ヶ月の間、聖なる都をふみにじらん』とあります。ヨハネは屢々『四十二ヶ月』又は『一年と二年と半』或は『千二百六十日』といふ期間を用ゐてゐます。日數で言ふのと、月數で言ふのと、年數と言ふのととの差だけで、實際は三年半です。ユダヤの曆は一年三百六十日ですから、月や日に換算すると斯うなります。主イエスは三年半の間傳道されたが遂に十字架につけられました。イエスの御一生は教會の一生涯の縮圖であるといふのでせう。勿論イエスの三年半は文字通りの三年半ですが、教會の一生涯として

の三年半はどれほどの永さかわかりません。兎に角、時の斷片を指すのでせう。ユダヤ人は『七』を完數としてゐましたから、七の半分即ち三ヶ半は不完數です。教會が外庭信者即ち此世と妥協する信者の爲めに『異邦人にふみにじらるる』のは三年半です。即ち不完數の期間だけです。『七』の永遠ではありません。此れが教會のせめてもの慰めでせう。兎に角教會の中に世と妥協する者が多く生じて、此世の勢力が教會を蹂躪するであらうとの此の預言は現代に於て最もよく成就してゐると言へるでせう。併し幸な事にはそれが教會の全部ではありません。教會の中にも忠實なる『二人の證人』を神は残し給ひます。即ち第三節に

『我わが二人の證人に權を與へん。彼らは荒布を着て千二百六十日のあひだ預言すべし。彼らは地の主の御前に立てる二つのオリブの樹、二つの燈臺なり』
とあります。

「われ我が二人の證人に權を與へん。彼らは荒布を着て千二百六十日のあひだ預言すべし。彼らは地の主の御前に立てる二つのオリブ、二つの燈臺なり」(十一ノ三)

教會は俗化して異邦人の爲めに蹂躪されますけれども、それは全部ではありません。第一節にある如く『聖所と香壇と其處に拜する者』も澤山にあります。此らは『靈と眞にて神を拜する者』(ヨ

ハネ傳四ノ廿三)です。其中から勇敢に神の證人となり殉教者となる者が『二人』出て來ます。『二人』と限られてゐるのは怎ういふわけか解りかねます。或はモーセとエリヤを指すのではないかとも思はれます。エリヤは『荒布』を着てゐました。勿論モーセとエリヤと言つても、歴史的の此の二人が復活して來るものではありません。モーセとエリヤの精神を有し此の二人のやうに忠實に神の證人となる者が出て來るとの意味でせう。兎の角『荒布』即ち喪服を着てゐる人達です。パプテスマのヨハネは此の喪服によつてユダヤ全國民の悔改を促しました。此の『二人』は全世界が罪に死んでゐるのを悲しむ象徴として荒布を着用してゐるのでせう。換言すれば教會が異邦人に蹂躪されてゐるのを悲むこと、恰も死者を悲む如くに悲んでゐる人達です。此の意味で彼らはエリヤの如き預言者であります。『千二百六十日の間、預言すべし』と日數でありますから、三年半の間、毎日活動するのです。異邦人の勢力が教會に活動するのと同じ期間中であります。但し此の人等は少數(二人)ではあるが決して絶えないのです。其の絶間なき活動を示す爲めに月數でなく、日數を用ゐたのではないでせうか。毎日毎日倦まず撓まずに祈り又働く少數の證人が、絶えず教會内に存續する預言でせう。極めて少數ではありますが、此らの人達こそ實に主の前に在る『二つのオリブ』『二つの燈臺』です。一つではありません。人に目や耳や手足が二つあるやうに教會にも『二

人の證人』があるのです。少数ですが、缺けることは無いのです。一體、教會は『燈臺』であるのです（黙一ノ廿）。併し俗化して全教會は燈臺たることの出来ぬ時期が來ます。（それは現代の教會でせう）でも、教會の中に『二つの燈臺』は繼續します。しかも『二つのオリブが』そばについてゐるのです。『オリブ』は油の供給者です。オリブの樹から無限に油を供給される燈臺が二つは何時でも教會内にあります。イエスの御警を拜借すれば『燈火とともに油を器に入れて携ふる者』（マタイ傳廿五ノ三）は少數ながら教會の中には絶ゆることは無い預言であります。何處やらの修道院では二人づゝの僧が交代で日夜祈りつゞけて、少しの間斷もなく今日に至つてゐるとの事ですが、此の異象は其修道院の如き教會の預言ではないでせうが、教會が如何に俗化しやうとも、そのやうな聖徒が必ず何處かに存続するとの預言でせう。モーセとエリヤは舊約精神の代表者で、山上の變貌の時イエスの死に就いて語つてゐます（ルカ傳九ノ卅）此の『二人』はモーセとエリヤの末流でありますから贖罪のイエスの堅持者です。されば第五節に

『もし彼らを害はんとする者あらば、火その口より出でて其の敵を焚きつくさん。もし彼らを害はんとする者あらば必ず斯の如く殺さる可し』。

とあるのは列王紀略下一章十節より十二節のエリヤの記事（及び列王上十八章）其儘であります。

但し、火がエリヤの時の如く天より降らないで『火その口より出づ』とあるのは主イエスの御口から『兩刃の利き劍出づ』（黙一ノ十六）とあるのと同じ意味を示したもので此の『火』は神の御言葉である事を表はすのです。神の御言葉は兩刃の劍とも言へるし、焰の劍とも言へるのです。此の二人の證者の武器は神の言葉です。次に第六節の上半に

『彼らは預言するあひだ、雨を降らせぬやうに天を閉づる権力あり』

とあるのも同じく列王下第十七章にあるエリヤの記事から來たのです。次に第六節下半以下に

『また水を血に變らせ、思ふままに幾度にも諸種の苦難をもて地を撃つ権力あり』

と云ふのは言ふまでもなく出埃及記七章より十章に至るモーセの奇跡を暗示したものです。されば此の『二人の證人』はエリヤとモーセの権力を與へられて、主の證詞を爲すとの意味である事は明かです。但し此らの證人の語るところは福音であるよりも寧ろ主の審判的方面であるらしく見えるのは我らの不思議に感ずるところですが、考へて見ればキリストの救の福音も神の審判なしには土臺のない家屋でありませう。

最後に此らの證人の末路が預言してあります。即ち第七節以下に

『彼らが其證を終へんとき底なき所より上る獸ありて、之と戦闘を爲し勝ちて之を殺さん。その屍體は大なる

都の衝に遣らん。都を譬へてソドムと云ひエチアトと云ふ。即ち彼らの主もまた十字架に釘けられ給ひし所なり。もろもろの民・族・國語・國のもの三日半の間その屍體を見、かつ其の屍體を墓に葬ることを許さざる可し。地に住む者どもは彼らに就きて喜び楽しみ互に禮物を贈らん。此の二人の預言者は地に住む者を苦しめられたれば也。』(十一ノ七一十)

とあります。何といふ意外な預言でせう。キリストの全教會から忠實な『二人の證人』さへも遂に絶たる時が来るのです。眞剣にして忠實な少数者さへも遂には全滅する時が来ると言つて居るのです。私は此れを一般背教の時代を指すのだと思ひます。然り、教會は遂に全く倒れてしまふ時が一度は来るのです。ヨハネは主イエスの御生涯に於て教會歴史の縮圖を見てゐるのですから、主が遂に殺された如く、教會も一度は殺されてしまふ。併し主の甦り給ふた如く教會も亦甦る、而して天に携へ擧げられるのであります。即ち、第十一節十二節に

「三日半のち生命の息、神より出でて彼らに入り、彼ら足にて起ちたれば、之を見る者大に懼れたり。天より大なる聲して「此處に昇れ」と言ふを彼ら聞きたれば雲に乗りて天に昇れり。その敵も之を見たり。」と書いてゐます。

俗化し腐敗した教會の中にある極めて少数(二人)の眞實なる證人すら『底なき所より上る獸』の

爲めに殺されてしまふ時が来ます。が、それは『彼らが證を終へんとき』です。教會の存在は福音を立證するためです。全世界の人々にキリストの福音の證人となることです。我らの使命は、キリストの十字架と御復活とによつて我らが救はれた事を立證するのです。聞く者が之を信ずると否とは我らの力の及ぶところではありません。此世の人にとつては、我らの『證し』が反つて彼らを『苦しめる』事になるでせう。正義の存在は罪惡にとつては、いつも苦痛です。が、構ひません。我らはたゞ正直に眞剣に且つ大膽勇敢に立證し證明するの使命を果せばよいのです。此の使命が果される時が即ちイエスの言はれた『御國のこの福音は諸の國人に證を爲さんために全世界に宣傳へられん。而して後、終は至る可し』(マタイ傳廿四ノ十四)と言はれた事と合致します。全世界が救はれるではありません。全世界に『宣傳され』『證し』をされるだけです。此の『證し』此の『宣傳』を受入れて救はれる人は少いのです。しかし兎に角『宣傳』が全世界に行渡つた頃には、全教會は俗化の愈々甚しい時で『二人の證人』さへも殺される時が到来したのです。彼らを殺す者は『底なき所より上る獸』です。此の『獸』は第十三章と第十七章とに詳説されてゐます。勿論惡魔の或る代表的勢力です。『底なき所より上る』とあるのは、主イエスが陰府より上られた御復活を似せた惡の復活であつて、世の終末が近づき教會の使命も果された時機を狙つて、盛り返し

て来る悪魔の活動の世界的復興です。何故に神が此の如き悪魔の復興を許し給ふかは我らの知る所ではありません。たゞ此の如き全世界的悪の復興と教會の全滅の時が来ることをヨハネが預言してゐる事だけは確實です。然り、全滅です。全く死滅するのです。最後まで踏み止まつた『二人の證人』も滅びてしまひます。『ソドム』の勢力、『エジプト』の勢力、『主の十字架につけられし所』なるエルサレムの勢力が擧つて『二人の證人』を殺してしまふのです。ソドムとエジプトは純然たる此世の勢力を指し、『主の十字架につけられし所』はエルサレムで背教俗化せる教會の勢力を指すのです。彼らが合同して純眞な教會を殺します。而して全世界の住民は俗化せる偽教會と合同して、此の『二人の證人』の滅びた事の大祝賀をやります。『互に禮物を贈』つて『喜び楽しむ』のです。正義の預言者は腐敗せる社會にとつて、此れほど邪魔になるものは無いからです。されば『此の二人の預言者は地に住む者を苦しめたれば也』とヨハネは附記してゐます。『地に住む者』とは此世を自分の安住の地としてゐる俗人達です。『我らの國籍は天に在り』と意識しつゝ此世に假寓してゐる人達と反對の人です。結局ヨハネは、キリストが遂に殺された如くキリストの教會も、眞の教會は遂に殺されてしまふ時が来ることを預言したのであります。併し主が三日目に甦り給ふた如く、眞の教會なる『二人の證人』は

『三日半のち生命の息、神より出でて彼らに入り彼れら足にて起ちたれば之を見るもの大に懼れたり』(一ノ十一)

とある如く復活します。『三日目』と言はず『三日半』と言つたのは或る一定の少時日といふ意味でせう。一週間即ち七日は一定の完全數です。『三日半』は其の半分ですから或る一定の不完全數です。即ち或る一定の暫時といふことになります。勿論それが數ヶ月であるか數年であるか不明です。兎に角、或る少時日を経たのちに眞の教會は復活します。けれども此度は最早預言はしません。イエスが御復活後昇天された如く昇天するのです。然り、眞の教會は昇天するのであります。

『天より大なる聲して「こゝに昇れ」と言ふを彼ら聞きたれば雲に乗りて天に昇れり。その敵も之を見たり。』(十一ノ十二)

とあります。敵前の昇天です。全世界環視の中に天に凱旋するのです。それと同時に

『この時、大なる地震ありて都の十分の一は倒れ、地震の爲めに死にしもの七千人にして遺れる者は懼をいだき、天の神に榮光を歸したり。』(十一ノ十三)

とあります。『十分の一』とか『七千人』とか言ふのは何を指したか詳しくはわかりませんが、全世界でなく『都の十分の一』即ち此世を楽しみ此世に屬してゐる人達の一部だけが亡ぼされるといふ

意味である事は明かです。『七千人』の『七』は完數ですし、『七千人』を直譯すれば『七千の名』です。有名な人々が可なり多く所罰されるのでせう。其の處罰は『地震』によつてです。彼らが安住の所と考へてゐる『地』が震はれるのです。大自然は彼らの思ふ如く彼らの味方ではありません。大地は反つて聖徒等に同情して遂には彼らを亡ぼす道具となります。勿論地震と言つても其れが本當の地震ではありません。譬喩的の語でせう。自分の住安してゐる足の下が崩れるのです。

第十一章十四—十九 (第七のラツバ)

『第二の禍害すぎ去れり。視よ第三の禍害すみやかに來るなり。第七の御使ラツバを吹きしに天に數多の大なる聲ありて 此世の國は我らの主および其のキリストの國となれり。彼は世々限なく王たらん』と言ふ。』
(十一ノ十五)

七つのラツバの中で終りの三つのラツバは特に『禍害』のラツバと言はれてゐます。即ち八章十三節に『地に住める者どもは禍害なるかな禍害なるかな(三度繰返しあるに注意。)尙ほ他の三人の御使の吹かんとするラツバによりてなり』とあります。言ふまでもなく第五、六、七のラツバが一、二、三の禍害を喚び起すのです。されば、第七のラツバの響かんとするに當つて『視よ、第三の禍害すみやかに來るなり』と注意されたのです。『速かに來るなり』とありますが、

人間の目から見るとナカナカ速かに來りません。第七のラツバが響いても未だ第三の禍害は起りません。それは第七のラツバの内容の詳説であるところの『七つの鉢』(第十五、六章)の段落に於て全ふせられるのであります。其處に達するまでには種々の問題が第十二、三、四章に於て取扱はれてゐます。このところでは第七のラツバの詳説を省いて只だ其の結論のみを書いたのです。ですから最早此世の終末が來つて審判も行はれ、キリストの王國が地上に確立したやうに書いてありますが、實際に於ては其れは七つの鉢に盛られる禍害が悉く傾けられた後に來るのです。されば今茲に書いてある第七のラツバの内容は(即ち十五節)は第十九章以下に於て詳説されるところのものを、取越して簡単に述べたものと見てよいでせう。

ですから茲にある第七のラツバは此世は最後に於て全くキリストの王國となる點を高調してゐます。聞き落してはいけません。『此世』です。此現在の世界がキリストの王國となるのです。十萬億度の遙かな極樂淨土でなく、『遙かに仰き見る輝きの御國』でなく、此の世界が全く淨土となり樂園となるのです。天使の此の『數多の大なる聲』の宣言に和して、全教會の代表者たる二十四人の長老は左の如く言つて神を禮讚します。

『かくて神の前にて座位に坐する二十四人の長老ひれふして神を拜して言ふ「今いまし昔います主たる全能の

神よ、汝の大なる能力を執りて王となり給ひしことを感謝す。諸國の民、怒を懐けり、汝の怒も亦いたれり。死にたる者を審き、汝の僕なる預言者及び聖徒、また小なるも大なるも汝の名を畏るゝ者に報を與へ、地を亡ぼす者を亡し給ふ時いたれり。かくて天にある神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の概見え、數多の電光と聲とまた大なる雷ありき」(十一ノ十六―十九)

『汝の大なる能力を執りて王と成り給ひし』の語に注意したいです。我々は屢々神は全能なるが故に今既に自由自在に聖旨のまゝに宇宙を支配して居られると考へ易いのですが、實はさうではないのです。地上には未だ聖旨が行渡つては居りません。若し行渡つてゐるならば『御意の天に成る如く地にも成らせ給へ』と祈る必要はもう過ぎ去つた筈です。甚だ大膽な言ひ方ですが神は天の王ですけれども今なほ此世が御自由にならないで宸襟を惱ませられて居られるのです。勿論必ず御意が行はるる時が来るのですが、それまではキリストの十字架の御苦しみが示す如く、天父御自身も此の世界の爲めに苦しんで居られるのです。が、前掲の句にあるやうに此の終末の時こそ神が『能力を執り、王と成り』給ひます。換言すれば文字通り主の祈の『御意の天に成る如く地にも成らせ給へ』が成就します。此れは實に大なる感謝です。救はれた我らにとつて此れほど大きな感謝は無い筈です。現在の世界に於ける我々の多くの疑問や、人生の大きな謎や、苦痛や鬭争に關する不可解

な暗黒などは悉く一掃されて、青天に白日を仰ぐが如く凡てが明かになるのです。其時になつて回顧すれば個人の一生に於て不平に感ぜられた事も、世界の進行に於て不可解に思はれた事も悉くが明朗に解かれ、まともに主の御榮光を仰ぎ見ることが出来るのです。多くの人が天道是か非かと啣ち、神などあるものかと論ずるのは、實を言へばまだ神が『大なる能力を執りて主となり給』は無いからです。神が未だ王となり給はないと言つては少し言ひ過ぎるかも知れませんが、本當に其の全能力を發揮して此世を思ふまゝにして居られぬからです。

最後の時に於て斯く主は御自身の全能力を執り上げ、王としての全權力を働かせ給ふときに二十四人の長老即ち神に屬するものゝ教會は感謝に充ちますが、それと正反對に『諸國の民は怒を懐き』ます。此れは理の當然でせう。今まで勝手に振舞つて僭冒をやつて居たのに、不義なる番頭の如く其の權力が取り上げられるのですから『怒を懐く』のも尤もです。併し、もうそれが最後の跳きです。『汝の怒も亦いたれり』とある如く最後の審判が來ます。神は愛なるが故に、いつまでも笑つて居られると思つて附上ると最後の日が來ます。否、附上つた者にも然らざるにも其の清算の日が來たのである事を書いてゐるのです。此の審判の詳細は第二十章十一節以下に載せてあります。併し此處で注意すべき事はヨハネが救はる可き者を『汝の僕なる預言者及び聖徒また小なるも大なる

も汝の名を畏るゝ者」と言つてゐますが、此れはマタイ傳十章四十二節以下に主イエスが救はれる人々を『預言者』と『義人』と『弟子たる小き者』とに分けたに能く似てゐるところから考へて、ヨハネがイエスの御教訓を念頭に浮べつゝ書いてゐるやうに察せられます。勿論『預言者』とは舊約の預言者に限つたのでは無く凡て神の御言葉を取次ぐ人を指した事は言ふまでもありません。また救はれる者の最小限度は『汝の名を畏るる小なる者』である事も見落してはならぬ事と思ひます。此れなれば神の名を信する者は誰も彼も救はれてゐます。今一つ注意したいのは『地を亡ぼす者を亡ぼし給ふ時いたれり』の語です。此語によつて神の造り給ふた美しい地球が人間の罪でどれほど傷つけられてゐるか、また神がそれをどれほど憂ひて居られるかがわかります。地を亡ぼす者の亡ぼされた後の地球は掃除した後の座敷の如く美しくなるのです。「かくて天にある神の聖所開け、聖所のうちに契約の櫃見え」(十九節)たとあります。即ち長老たちの讚美が終ると大審判が開かれたのです。「契約の櫃」は神の臨在を意味するもので、神を畏るる者には恩寵のしるしであり、神に背く者には刑罰のしるしであります。それから『數多の電光と聲と雷霆とまた地震と雹ありき』とあるのが即ち審判の聲であります。勿論この形容語は八章五節にも十六章十八節にもありまして必ずしも最後の大審判を言ふものではありませんが、兎に角審判的の神の御活動を指すものであります。

であります。

第四異象 七つの人物

第十二章 (太陽を着たる女)

前段即ち第三異象の七つのラツバの終りで一と先づ世界末までの預言が済んだのです。此の段落即ち第四異象は前の段落即ち第三異象の引續きでなく、ヨハネは再び福音の誕生に逆戻りして其處から出發し教會と此世との鬭争を書いてゐるのです。ですから第四異象は年代的に言へば第二、第三異象と重複することになります。但し視角が異つてゐますから、異つた場面が展開するのは勿論のことです。此の異象を『七つの人物』と名づけましたが、七つのラツバ七つの鉢の如くにハツキリした七つの人物ではありません。便宜の爲め斯く名づけたに過ぎません。登場するのは七つの人物と假りに申しましたが七つに計算するのは少し無理かも知れません。此の段落は第十二章から第十四章まででありまして、七つの人物とは

一、太陽を着たる女(十二ノ一)

二、此女の生んだ男の子(十二ノ五)

- 三、其の一族『その裔の残れる者』(十二ノ十七)
- 四、天使ミカエルと其の一派(十二ノ七)

右の教會側の登場者

- 五、赤き龍(十二ノ三)
- 六、海より上れる獸(十三ノ一)
- 七、陸より上れる獸(十三ノ十一)

右は此世側の登場者

『男の子』がキリスト或はキリストの福音を指し、其一族が教會を指し『赤き龍』と海陸の獸が惡魔と其の一族を指すことだけは明瞭ですが、それ以上は次第に研究を重ねて行きたいと思つて居ります。先づ『太陽を着た女』から研究させよう。第十二章一節に

『また天に大なる徴見えたり。日を着たる女ありて其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕あり。』

『天に大なる徴』が見えたとあります。ヨハネは『徴』を天に見たのです。『徴』は或る事件の象徴であつて、事件其ものではありません。地上に行はれる事件の『徴』を天に見たのです。日と月と星とを以て飾られたと言ふまでもなく、此の『女』が『光』の代表である事を示します。『光』

を以て神の御性質を表現するのはヨハネの好むところでした。『神は光にして少しの暗き所なし』(ヨハネ第一書一ノ五)『この生命は人の光なりき、光は暗黒に照る、而して暗黒は之に勝たざりき』(ヨハネ傳一ノ五)『イエス言ひ給ふ、光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』(全十二ノ卅五)等々の語を此人の口から聞くのです。されば此の『女』は何を指すかと言へば、神の光を代表する機關即ち教會であると思ひます。併し新約の教會のみを指すものではありません。此の『女』からキリストの生れた點から考へて、舊約と新約とを一貫した神の教會であります。

『かれは孕りをりしが子を産まんとして産の苦痛と悩みとの爲めに叫べり』(十二ノ二)

との語は説明を要さないでせう。キリストが生れるまでに舊約の教會はどれほど悩み苦しんだでせう。生れるまでに苦しんだのではなく、生まんが爲めに苦しみました。イスラエルの歴史を読むもの、殊にイザヤ、エレミヤ、ホゼア等の預言を読むものは直ちに首肯することが出来ます。

『また天に他の徴、見えたり、視よ大なる赤き龍あり、これに七つの頭と十の角とありて頭には七つの冠冕あり。その尾は天の星の三分の一を引きて之を地に落せり。龍は子を産まんとする女の前に立ち、産むを待ちて其子を食べ盡さんと構へたり』(十二ノ三、四)

此の『龍』がサタン即ち惡魔である事は九節にヨハネ自身が註釋してゐます。が、『赤き』と形容

したのはナゼでせう。六章三節に『赤き馬いで來れり』と言つたのと同じ理由です。殘虐性を示す血の色と破壊性を示す火の色です。『七つの頭と十の角』とあるのは『頭』は智を、『角』は力を示すことは明かですから、神を僭上して、全知全能に肖せた形を有つてゐる事を言ふのです。『七つの冠冕』も同様の意味で天地の王たる神を僞せた王冠です。前記の『女』の『冠冕』とは字が異つてゐます。あれは王冠でなく唯だ榮譽の冠です。偕て此の『龍』は其の『尾』を以て『天の星の三分の一』を引きて地に落せり』とあります。『三分の一』といふ數は本書に屢々出て來ますが、いつでも全體に對する一部分です。『天の星の三分の一』はサタンが墮落するときに天使の一部分を自分と共に墮落させた事であらうと思ひますが、或る學者は教會の一部を墮落させる事だと解して居ります。ダニエル書八章十節に一匹の牡山羊が『甚だ大きくなり、天軍に及ぶまでに高くなり、その軍と星數個を地に投げくだして之を踏みつけ』とあるのは参考となると思ひます。兎に角大なる傲慢の態度を指すことは明かです。『尾』と言つたのは其の力が獸的であることとせう。九章十一節にも底なき坑の蝗の『尾』に力がありました。此の『龍』が生れんとする子を食ひ盡さんと構へてゐたと言ふのは説明を要しないでせう。惡魔はキリストの降誕を最も忌嫌つたに相違ありません。ヘロデ大王は端なくも其の道具につかはれてベテレヘムの二歳以下の子を悉く殺しました。

『女は男子を産めり。この子は鐵の杖をもて諸種の國人を治めん。かれは神の御許にその御座の下に擧げられたり』(十二ノ五)

此れは言ふまでもなく救主たるイエスのことです。イザヤ書七章十四節の『視よ、をとめ孕みて男子を生まん』とあるのと、詩篇第二の八、九節にメシアは鐵の杖を以て諸國の王を打破るとある此の二つの預言の成就としてのイエスを書いたのです。而してイエスの傳を抜きにして直ちに御昇天を書いたのであります。目的はイエスの傳でなく、御昇天後の教會を書くにあるからです。

『女は荒野に逃げゆけり。彼處に千二百六十日の間かれが養はるゝ爲めに神の備へ給へる所あり』(十二ノ六) 『女』即ち教會はキリストを失つて『荒野』の生活に入つたのです。舊約の教會はキリストを生むことによつて其の使命を果したのですが、キリスト昇天後の新約の教會は『新郎をとられた』(マルコ傳二ノ廿)のであつて御再臨までは淋しい悲しい生活をしてゐるのです。尤も此の『荒野』の生活の中にすら『かれ(教會)が養はるゝ爲めに神の備へ給へる所』があります。この『所』とは多分内住の聖靈の裕かに宿れる靈的教會眞のエクレンヤ、目に見えざる理想の教會であります。エペソ書一章三節、二十節、二章六節にある『天の所』と同じ意味でせう。『千二百六十日』とは『一年と二年と半年』又は『四十二ヶ月』と同一のものであつて不完全數即ち半端な數を示すものであ

る事は前に述べた通りです。完全数を以て表現するほどの永い時期ではないが兎に角相當の期間地上の教會は『荒野』にあるやうな苦しい状態に置かれるのです。それはマタイ傳廿五章十四節にも主イエスが御昇天後を指して『或人遠く旅立せんとして其の僕どもを呼び之に己が所有を預くるが如し』と言はれたのと同じことです。勿論靈に於て主は我らと共に居られます。『我なんぢらを遣して孤兒とはせず』(ヨハネ傳十四ノ十八)と言はれてゐますが、直ちに『汝らに來るなり』(同上)と附け加へて御再臨までは孤兒のやうな姿であることを暗示して居られます。何と言つても現在の教會は主の御再臨を待つ淋しい姿です。『荒野』に立つてゐるのです。讚美歌五四六番の三節に『荒野の原、途もなく踏み分けかねつつ、佇める此の憂き身を仇は嘲み笑ふ』とあるのは怎ういふ意味か知りませんが、御再臨までの我らの姿と見てもよいでせう。

『斯くて天に戦争起れり。ミカエル及び其の使たち龍と戦ふ。龍も其の使たちも之と戦ひしが勝つこと能はず、天にははや其の居る所なかりき』(十二ノ七、八)

『斯くて』と譯した人は多分この戦争を主の御聖誕の結果と解する學説を採用したのでせう。が、サタンが天から追放されたのを主の地上に降誕された結果と解するのは時代錯誤でせう。で、永井譯のやうに『また』と譯す方がよいでせう。ルカ傳十章十八節に主イエスが『われ天より閃く電光

の如くサタンの落ちしを見たり』と言ひ給ふたのと同じで、天地創造以前の出來事ですが、今ヨハネが幻の中に見せられたのです。それは地上の教會に對するサタンの戦争の愈々激しい事を第十二節に於て示さんが爲めです。『ミカエル』とは『誰か神の如き者ぞ』といふ意味でキリスト御自身を指すと思ふ人もあります。普通は天使長と考へられてゐます。ダニエル書十章十三節にも此の天使は『ベルシヤの國の君』と稱する惡靈と戦つてゐます。ユダ書九節にも惡魔と争つてゐます。サタンに對して戦ふ特別の使命を與へられた天使らしいです。彼が天上からサタンを追拂つたのですが、それが爲めに地上は暫時恐ろしい所となりました。神はサタンさへも悔改めるのを暫く待ち給ふのでせう。が、サタンは此の『御恩寵』を悪用します。即ち第十二節に

『地と海とは禍害なるかな。惡魔おのが時の暫時なるを知り、大なる憤怒を懷きて汝らのもとに下りたれば也。』

とあります。『地と海とは』と言つたのは第十三章一節の『海より上る一つの獸』と、同十一節の『地より上る他の獸』との恐ろしさを叙せんとする伏線です。兎に角地上の教會は、サタンの運命の縮まるにつれて愈々猛烈な『憤怒』をサタンから浴びせられなければならない預言です。併し幸なことにサタンの運動が愈々猛烈であるのは其の終末が近いので、第十節に天の大なる聲が

『われらの神の救と能力と國と神のキリストの權威とは今すでに來れり』
と叫ぶが如く御再臨と神の國の成就とが『すでに來れり』と叫ぶほど間近い事を示すのであります。

『かくて龍はおのが地に落されしを見て、男子を生みし女を責めたりしが、女は荒野なる己が所に飛ぶために大なる鷲の兩翼を與へられたれば其處に至り一年、二年、また半年のあいだ蛇の顔を離れて養はれたり。』(二十ノ十三、四)

興味深い書き方ではありませんか。教會は『女』です。山上の垂訓に現れてゐるキリスト者の道徳が女性的である事が思ひ出されます。されば『龍』から攻撃されたときに反抗の態度に出せず、『荒野』に飛んで逃れます。『荒野』は淋しいのですが、同時に宗教的なものだと言へるでせう。宗教と名のつくほどの大宗教は『荒野』で生れました。釋迦の靈山、モーセのミデアンの野、イスラエル民族の四十年の荒野生活、モハメットの洞穴に於いて聞いた天の聲、パウロのアラビヤ三年、主イエスの四十日の荒野の斷食などが思ひ出されます。荒野は瞑想と祈禱と克己と遁世などを提供します。此の『荒野なる己が處に飛ぶために大なる鷲の兩翼を與へられ』とあるのは先きの第六節にあつた『かれが養はるる爲めに神の備へ給へる所』です。即ち教會が荒野の淋しい生活をしては

ゐますが、其の淋しい中にこそ『神の備へた所』があつて其所で『養はれ』るのです。『己が處』といひ『神の備へた所』とは何ではありませんか。主イエスが此世を去られる直前に『われ汝らの爲めに處を備へに往く』(ヨハネ傳十四ノ二)と言はれたのと同じ『ところ』でせう。またパウロが『我らの國籍は天にあり』(ピリピ書三ノ廿)と指したのはキリスト者の『己が處』でありませう。されば此世の『荒野』的生活の中にも『神の備へ給ふた』『己が處』があつて、其處で我々は『蛇の顔を離れて養はれる』のです。先きに引照したエペソ書の『天の所』です。其處に行くのには『大なる鷲の兩翼』を張つて翔らねばなりません。『大なる鷲の兩翼……』の語は出埃及記十九章四節に『我が鷲の翼をのべて汝らを負ひて我に至らしめたり』との神の御言葉と關係があるかも知れませんが、出埃及記の鷲は神御自身であり、此處の『鷲の兩翼』は『女』に與へられたのです。『荒野』と言ひ『鷲の翼』と言ひ私には怎うしても祈禱の生活と考へられます。祈禱の翼が與へられて教會は地上にありながら天國へと飛び翔ることを許されるのです。此處でこそ教會は眞實に神から『養はれ』ます。併し此の祝福せられた『己が處』にてさへも教會は絶対安全ではありません。サタンなる『龍』即ち『蛇』は黙つて居りません。

『蛇は其の口より水の川の如く、女の背後に吐き之流さんとしたり』(十二ノ十五)

ユーフラテ川がアツスリア國の代表語として用ゐられ（イザヤ八ノ七。五九ノ一九）國々の動亂が大流に比せられてゐる（詩四六ノ三）ことは舊約書に例が多くあります。で、私は之をサタンが國々の動亂によつて其の動亂の中に教會を難破させてしまはうとする計畫を指すのだと思ひます。それにはロマ帝國に次から次へと起つた動亂や、北歐の蠻族がロマに侵入した大動亂などが直接に指示されてゐるではありませんが、先頃の歐州の大戦やロシアの革命やまた近き將來に全世界を震撼せしめんとする大戦なども含めて預言されてゐるのだらうと思ひます。かうした戦亂のあるごとに平和の愛好者たる教會はいつも迷惑をかけられてゐます。時には其の渦中で覆滅したかの如くにさへ見えます。ところが

「……流されんとしたれど、地は女を助け、その口を開きて龍の口より吐きたる川を呑み盡せり。」（十二ノ十六）

此れは不思議な事です。サタンは天より逐はれましたがまだ地では十分に權威が奮へる筈でした。彼は『此世の君』（ヨハネ傳十四ノ卅）ではありませんか。然るに此の場合『地』は『女』を助けました。『龍の口より吐きたる水を呑み盡せり』とあります。國々は動亂してもまた静まります。革命や戦亂は永久に續くものでありません。『地』と言ふのは此處では『自然の勢』又は『此世の

趨勢』と解釋したらいいでせう。いくら戦亂があつても自然の勢は遂に之を『呑み盡して』しまひます。そして『龍』は大ひに『怒り』ます。自分の味方と恃む『地』すらが結局は神の味方であるのを見て憤懣に堪えないのです。

『龍は女を怒りて其の裔の残れるもの、即ち神の誠命を守リイエスの證を有てる者に戦闘を挑まんとて出でゆき、海邊の砂の上に立てり』（十二ノ七、八）

『女』が教會である事は先きに述べました。生れた『男子』はキリストである事も述べました。其の後『女』は多くの子女を生んでゐます。或は生みつゝあると言つた方が正しいでせう。それが信者を指すのである事は申す迄もなく、『其の裔の残れる者』とあるのは永井譯の『餘れる彼の種』の方がよろしい。長子なる『男の子』の他の子供達と言ふことです。勿論現代の我々をも含めてあります。眞の信者の特徴として『神の誠命を守る』ことと『イエスの證を有つ』こととの二點が擧げられてゐるのは注意す可きです。ヨハネは別の書物（第一書三ノ廿三）で『神の誠命は是れなり、即ち我ら神の子イエスキリストの名を信じ、その命じ給ひし如く互に相愛すべきこと也』と言ひ、『我らその誠命を守らば之によりて彼を知ること自ら悟る』（同二ノ三）と言つて『神の誠命』を高調してゐます。『イエスの證人』となる事は使徒行傳を見ても本書を讀んでも初代教會一